

八尾市文化財調査報告38
平成9年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ

1998.3

八尾市教育委員会



「平成9年度八尾市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」・正誤表

頁	行	誤り	正
16	第13図	3. 黒灰色粘砂（ブロック状）	3. 灰黒色粘砂（ブロック状）
66	10	・・の褐灰色粗砂混粘砂で・・	・・の灰色粗砂混粘砂で・・
67	4	・暗褐色班灰色粘砂上面で・・	・褐色班暗灰色粗砂質土上面で・・
72	23	・⑩層褐色班灰色粘土上面・・	・⑩層灰色細砂混粘質シルト・・
〃	24	・・⑫層粘質シルトが・・	・・⑫層褐色班灰色粘土が・・
〃	34	2～8は・・	2～7は・・
〃	35	・・土師器杯8のみ・・	・・土師器杯7のみ・・
73	2	羽釜12の口縁端部は・・	羽釜11の口縁端部は・・
79	15	・・から14世紀前半に・・	・・から14世紀後半に・・

はじめに

八尾市は、生駒山地西麓から大阪平野東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。そして、ここには旧石器時代から連続と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、八尾市内の個人住宅建設をはじめ民間の各種事業に先立つ国庫補助対象の遺構確認調査の成果を収めています。「天王の森」を中心とした周辺域において弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が出土した恩智遺跡、八尾寺内町の形成を考える上で貴重な遺構が検出された八尾寺内町遺跡、弥生時代後期の土器集積を確認した跡部遺跡をはじめ、非常に貴重な成果が得られました。

しかしながら、これらの調査のほとんどが、開発や建設工事を前提とした記録保存のための発掘調査の事前の遺構確認調査であり、これらの成果は遺跡の破壊という大きな代償の上に得られたものであることは言うまでもありません。

今後、八尾市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる形で、保存・活用されていくことが、重要な課題となっていくことでしょう。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に対し、御礼を申し上げるとともに、今後ともより一層の文化財行政に対するご理解とご協力を頂きますようお願い申し上げます。

平成10年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成9年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 寺島正男）が実施した。
3. 調査にあたっては、八尾市教育委員会文化財課技師 米田敏幸、道斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、とくに成果のあった調査について、その概要を収録した。また、「八尾市内平成8年度発掘調査報告書I」に収録した「跡部遺跡（96-580）の調査」について、遺物整理によって新たな成果が得られたので付録として収録することにした。
5. 調査一覧表及び報告書抄録の作成は本課技師 吉田珠己が行った。
6. 本書の作成にあたっては、道斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は藤井が行った。

本文目次

1.	太田遺跡（96-266）の調査	1
2	序. 恩智遺跡の既往の調査について	6
2-1.	恩智遺跡（96-471）の調査	11
2-2.	恩智遺跡（96-747）の調査	15
2-3.	恩智遺跡（96-518）の調査	19
2-4.	恩智遺跡（97-38）の調査	25
2-5.	恩智遺跡（96-657）の調査	27
2-6.	恩智遺跡（97-310）の調査	29
3.	萱振遺跡（97-299）の調査	40
4-1.	久宝寺遺跡（96-641）の調査	42
4-2.	久宝寺遺跡（97-298）の調査	44
5.	郡川遺跡（96-691）の調査	47
6.	小阪合遺跡（97-175）の調査	49
7.	成法寺遺跡（97-156）の調査	51
8.	神宮寺遺跡（97-49）の調査	57
9.	太子堂遺跡（97-441）の調査	62
10.	東郷遺跡（97-768）の調査	64
11.	中田遺跡（96-718）の調査	66
12.	東弓削遺跡（96-565）の調査	69
13-1.	八尾寺内町遺跡（97-99）の調査	75
13-2.	八尾寺内町遺跡（97-185）の調査	77
14-1.	矢作遺跡（97-218）の調査	84
14-2.	矢作遺跡（97-220）の調査	86
付編.	跡部遺跡（96-580）の調査（その2）	88
	調査一覧表	99

図版目次

- 図版1 太田遺跡（96-266）
恩智遺跡（96-471）
- 図版2 恩智遺跡（96-518）
- 図版3 恩智遺跡（97-310）
- 図版4 萱振遺跡（97-299）
成法寺遺跡（97-156）
- 図版5 神宮寺遺跡（97-49）
東郷遺跡（96-768）
中田遺跡（96-718）
- 図版6 中田遺跡（96-718）
八尾寺内町遺跡（97-99）
- 図版7 八尾寺内町遺跡（97-185）
- 図版8 八尾寺内町（97-185）
- 図版9 跡部遺跡（96-580）
- 図版10 太田遺跡（96-266）出土遺物
恩智遺跡（96-471）出土遺物 石器類
恩智遺跡（96-518）出土遺物 S D 0 1 出土土器
S D 0 2 出土土器
- 図版12 恩智遺跡（97-310）出土遺物
- 図版13 恩智遺跡（97-310）出土遺物
- 図版14 恩智遺跡（97-310）出土遺物
- 図版15 恩智遺跡（97-310）出土遺物・（96-747）出土遺物
- 図版16 萱振遺跡（97-299）出土遺物
郡川遺跡（96-691）出土遺物
- 第2区 S K 0 3 焼土坑 検出状況
調査風景（第2調査区）
掘削状況（第2調査区）
調査風景
第1調査面検出状況（弥生時代遺構面）
第2調査面検出状況（中世遺構面）
第1遺構面 溝状遺構（東より）
第2遺構面 落ち込み状遺構（東より）
東壁土層断面
広口壺出土状況
調査風景（機械掘削）
掘削状況（第3調査区）
遺構検出状況 S D 0 1（南から）
南壁断面（北より）
第2区 第1遺構面（北より）
第2区 第2遺構面 ピット検出状況（南より）
東側調査区断面
西側調査区断面
ピット1検出状況（西より）
調査区全景（南より）
ピット2検出状況（北東より）
ピット4及び5検出状況（東より）
南壁土層断面
北壁及び西壁土層断面
遺構検出状況 北より（第1調査区）
ピット内遺物出土状況
掘削状況 東壁（第2調査区）

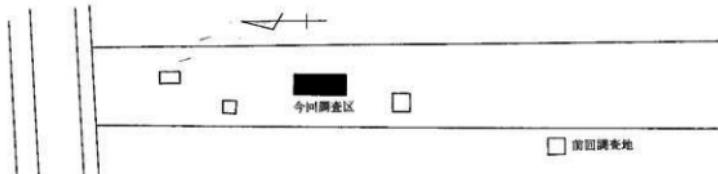
- 図版17 久宝寺遺跡（97-298）出土瓦
- 図版18 成法寺遺跡（97-156）出土遺物
中田遺跡（97-718）出土遺物
- 図版19 東弓削遺跡（96-565）出土遺物 No.6 出土羽釜
No.14' トレンチ⑩ 層出土遺物（18~23）／
No.9' 出土遺物（24）
- 図版20 八尾寺内町遺跡（97-185）出土遺物
- 図版21 八尾寺内町遺跡（97-185）出土遺物
- 図版22 跡部遺跡（96-580）出土遺物 第1調査区
第2調査区 土器集積出土土器
- 図版23 跡部遺跡（96-580）出土遺物 第2調査区 土器集積出土土器
- 図版24 跡部遺跡（96-580）出土遺物 第2調査区 土器集積出土土器

1. 太田遺跡（96-266）の調査

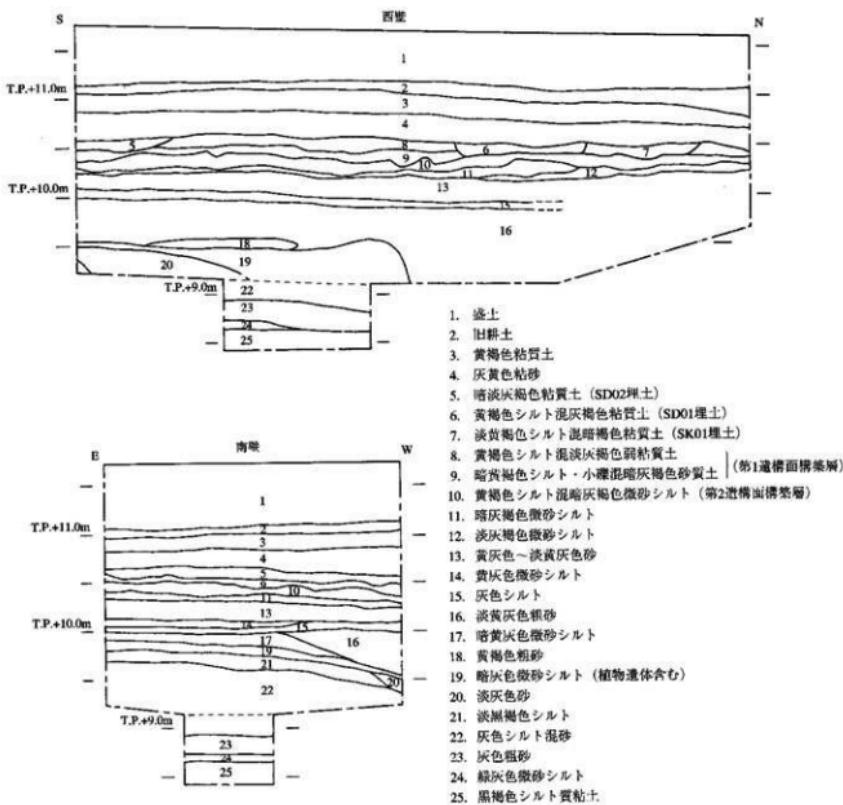
1. 調査地 太田3丁目156番地
2. 調査期間 平成9年2月17日～21日・24日
3. 調査方法 平成8年9、10月に行った調査（平成8年度既報告）において、弥生時代末期から古墳時代後期の遺構が確認されたことにより、計画の変更がなされた。そのため再度、浄化槽設置部分について約8.5m×3.5mの調査区を設置し、地表下3.4mまで重機と人力を併用して掘削を行った。
4. 調査概要 既調査部分において古墳時代後期の遺構が確認されているため、同時期の遺構の存在が予想された。
- 現地表（TP +11.76m）下0.7mまでは盛土および旧耕作土であり、地表下1.15m前後の黄褐色シルト混泥灰褐色弱粘質土層上面で、東西方向の溝2条（SD01・SD02）と土坑（SK01）1基を検出した。この面が第1遺構面となる。北側の溝（SD01）は、ほぼ東西に直線的に伸び、検出長約1.8m、幅1.5m前後、深さ約0.15mで、黄褐色シルト混泥灰褐色粘質土を埋土とする。この埋土内からは、土師器（高杯など）および須恵器片（杯など）が出土している。南側の溝（SD02）は、南壁にかかる形で検出したため幅は不明であるが、南北方向に伸び、検出長約2.7m、深さ0.1m前後をはかり、埋土の暗淡灰褐色粘質土からは、土師器および須恵器片が出土している。土坑（SK01）は、西壁にかかるうえ、北側の溝（SD01）に切られており平面規模などは不明であるが、深さは約0.15mで、埋土の淡黄褐色シルト混泥灰褐色粘質土からは、土師器（小型壺など）および須恵器片



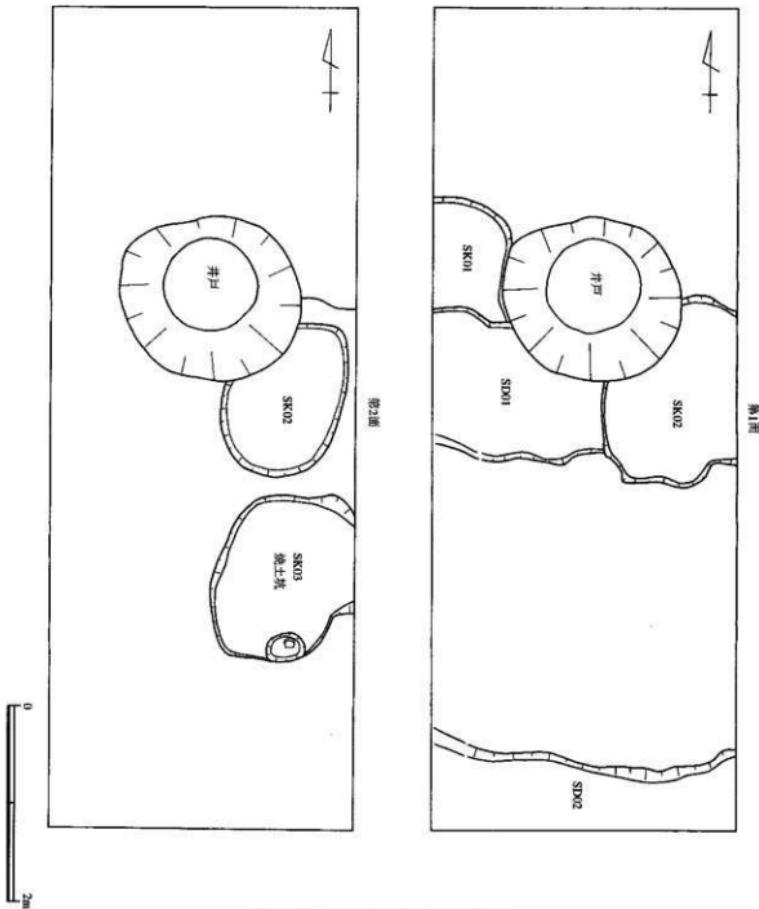
第1図 調査区周辺図 (1/5000)



第2図 調査位置図 (1/800)



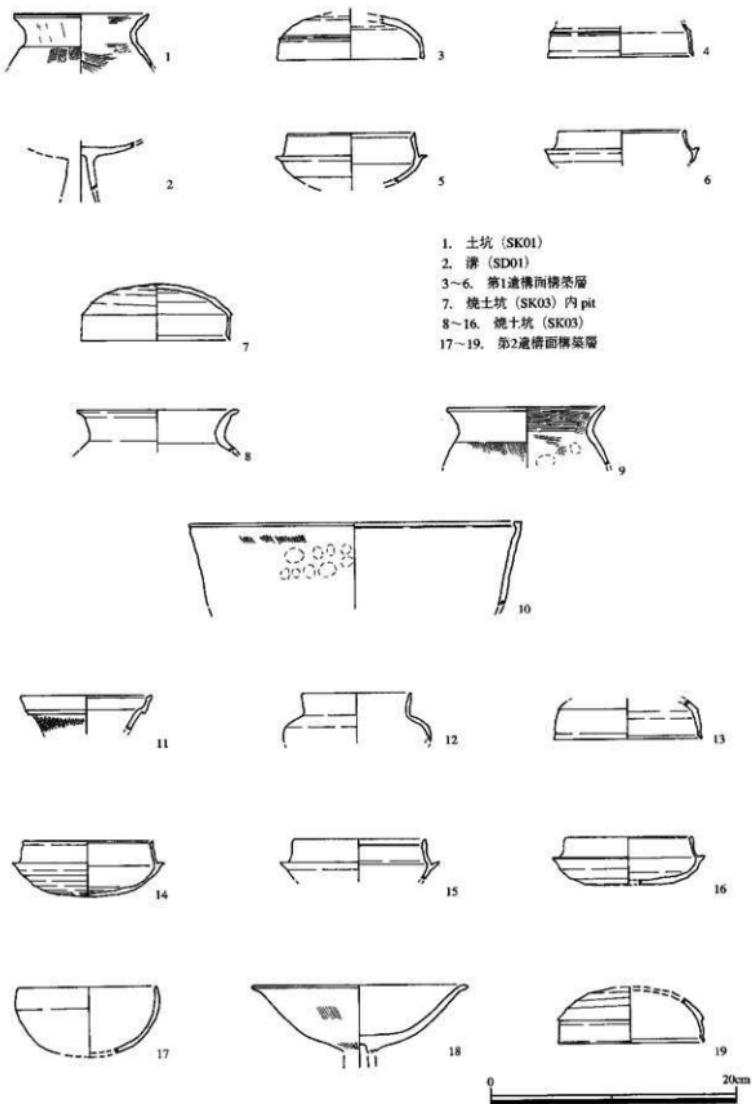
第3図 土層断面図 (1/50)



第4図 遺構平面図（1／50）

が出土している。第1遺構面は、出土した須恵器の編年観から、MT15型式併行期の遺構面と考えられる。

第2遺構面は、第1遺構面から約0.2m下の黄褐色シルト混暗灰褐色微砂シルト層上面で検出した。遺構は、長径約1.8m、短径約1.5mの不整楕円形を呈する焼土坑（SK03）が見つかっている。この焼土坑は深さ約0.1m前後で、埋土の炭化物が混じった黄灰色粘質土内から、土師器（小型壺など）および須恵器（杯など）のほか製塙土器と考えられる破片も出土しており、二次焼成を受けてい



第5図 出土遺物実測図 (1 / 4)

る破片もあることから、製塙炉かそれに伴う土坑の可能性がある。この焼土坑（SK03）内の南端に、直径約0.4m、深さ0.12mのピットがあり、完形に近い須恵器の杯蓋が、据え置かれたような状態で炭化物とともに埋まっていた。この遺構面は、焼土坑（SK03）から出土した須恵器がTK23～47型式に比定できることから、この時期に該当するものと考えられる。

第2遺構面構築層より下では、遺構、遺物ともに検出されず、また地表下1.5m以下では灰色～黄灰色のシルト層および砂層の堆積が続き、一時期河川の流路となっていたようである。なお第1・2遺構面でみられる土坑（SK02）は、その北西にある井戸（開発直前に埋め戻されたもの）との切り合い関係や埋土内の遺物からみて、この井戸に伴うものと考えられる。

5. 出土遺物

図化できた遺物は19点ある。第1遺構面では、土坑（SK01）内から口径11.0cmの小型の土師器壺（1）が、また溝（SD01）内からは2の土師器の高杯脚部が出土した。第1遺構面構築層内には、須恵器の杯蓋（3・4）および杯身（5・6）のほか、図化できなかったものの土師器の壺などが含まれていた。

第2遺構面では、焼土坑（SK03）の埋土から口径13.0cm前後の小型の土師器壺（8・9）や、須恵器甕（11）・短頸壺（12）・杯蓋（13）・杯身（14～16）のほか、製塙土器の破片が多数出土している。また、7は焼土坑（SK03）南端のピット内から出土した須恵器の杯蓋である。第2遺構面構築層内には、土師器の鉢（17）・高杯（18）や須恵器の杯蓋（19）のほか製塙土器の破片も含まれている。

6. まとめ

今回の調査では、前述した前回の調査で検出された古墳時代後期の遺構面が続くことが確認された。広範囲の調査ではないため詳細は明らかではないが、それほど時期的に隔たりのない2時期の遺構面があり、それぞれ溝や土坑などの遺構が検出されていることから、古墳時代後期にはこの周辺は生活域であったことがうかがえる。特に第2遺構面では、前回および今回の調査とともに焼土坑が検出され、製塙土器や二次焼成を受けている土器などが出土しており、製塙炉およびそれに伴う遺構が広がっている可能性がある。また、周辺の調査でMT15型式併行期の祭祀遺構と推定される遺構が検出されており、須恵器の杯蓋が据え置かれたような状態で出土した焼土坑内のピットについては、祭祀に関わる遺構となる可能性もある。

これらの古墳時代後期の遺構の性格についてはまだ不明ではあるが、今後の周辺の調査成果をまって、検討していく必要があろう。

(吉田珠己)

〔参考文献〕

八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ』1994年

八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ』1997年

2. 恩智遺跡の調査

序. 恩智遺跡の既往の調査について

1. 96-471
 2. 96-747
 3. 96-518
 4. 97-38
 5. 96-657
 6. 97-310
-

序. 恩智遺跡の既往の調査について

恩智遺跡は、「天王の森」(恩智中町3丁目地内：大阪府指定史跡)を中心として、現在の恩智中町・恩智北町・恩智南町に広がる旧石器・縄文時代から連綿と続く遺跡である。特に弥生時代中期には、大規模な集落が形成されていたと考えられ、この時期が恩智遺跡における集落の盛行期と考えられている。

恩智遺跡内及び周辺域では、近年、市街地化が進み、従来のような大規模な開発に伴う発掘調査だけではなく、小規模な専用住宅などの建て替え等の増加により、これら開発に伴う遺構確認調査が増加している。特に恩智遺跡では、該期の遺物包含層への到達深度が浅いため、貴重な遺跡を破壊してしまう可能性が非常に高いためである。今回の報告等の資料の増加が、その上に成り立っていることはいうまでもないだろう。こういった小規模な調査を含めた資料の増加に対応するために、恩智遺跡における面的な調査成果を踏まえた遺跡の広がりの把握が必要となってくる。そういう意味で、「天王の森」を中心とした既往の調査を整理し、既往調査位置図（第6図）及び調査一覧表（第1表・第2表）を掲載することにした。

今までに、京都大学・大阪府教育委員会・瓜生堂遺跡調査会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会等が発掘調査を行っており、貴重な成果とともに、遺跡の内容が徐々に、明らかになりつつある。その結果、ようやく恩智遺跡における弥生時代の集落域の範囲が実証性をもつものとなってきた。

今回の報告でも、関連する資料が多数確認されている。詳しいことは、それぞれの報告に譲るが、今回の報告を含めて、今後恩智遺跡の集落の性格等の解明がが、少しずつでも進むことを期待したい。また、それが恩智遺跡だけにとどまらず、中河内地域平野部の集落との関係を知る上でも重要となるだろう。

(藤井)



第6図 恩智遺跡調査地及び既往調査位置図

調査年月	調査地	調査原因	調査主体	主な検出遺物・出土遺物	文献
大正6（1917）年7月	恩智中町3丁目	_____	京都大学（梅原末治・島田貢彦）	弥生時代前期～後期の土器・土器・石器等出土	1
大正6（1917）年8月	恩智中町3丁目 （芋茶の木）	_____	鳥居龍藏	弥生土器・石器出土	2
大正7（1918）年	安養寺裏山 （通称組内山）	耕作中出土	_____	流文土器（外縁付口式）出土	3
昭和14（1939）年	恩智中町3丁目	史前遺跡調査事業	藤岡謙二郎	弥生時代前期～後期の土器・須恵器・石器出土	4
昭和16（1941）年	「天王の社」北方 （詳細は不明）	井戸湖削削出土	_____	人骨・縄文土器出土	5
昭和24（1949）年	安養寺裏山 （通称郡塚山）	耕作中出土	_____	裴姿津土器（扁平縁式）出土	3
昭和49（1974）年	恩智中町3丁目 「天王の社」内東南部	八尾市消防署防火用 貯水槽設置	八尾市教育委員会	繩文時代晚期の土器・弥生時代 前期～後期の土器・瓦出土	6
昭和50（1975）年	恩智北町～恩智中町	恩智川改修工事	瓜生童遺跡調査会	弥生時代前期～後期の土器・木棺 墓・土坑・自然河温候出 古墳時代前期の井戸・構・構を検出	7
昭和51～53 （1976～1978）年	恩智中町3-240・245	マンション建築	八尾市教育委員会	弥生時代中期の遺構・遺物多数 検出	未報告
昭和54（1979）年	恩智中町2-94	天理教教会増設	八尾市教育委員会	弥生時代中期の遺構・遺物多数 検出	未報告
昭和58（1983）年2月	恩智中町2-265	個人住宅建築	八尾市教育委員会	弥生時代前期の土坑検出	8
昭和59（1984）年6月	恩智中町3-214	個人住宅建築	八尾市教育委員会	弥生時代の遺構・遺物包含層検出	9
昭和59（1984）年6月	恩智中町1-77-2	銀行建築	八尾市教育委員会	弥生時代中期の遺構検出	9
昭和60（1985）年6月	恩智中町1-51	マンション建築	（財）八尾市文化財調査研究会（OJ88-1）	古墳時代前期～中期の土坑・構 検出	10
昭和61（1986）年7月	恩智中町3-112	個人住宅建築	八尾市教育委員会	繩文時代晚期の土器無積・祭祀 跡検出	11
昭和62（1987）年7月	黒智南町1-130・131	寮建築	八尾市教育委員会 (86-494)	遺構・遺物ともになし	12
昭和62（1987）年8月	恩智中町3-126・131・133 134	個人住宅建築	八尾市教育委員会 (86-518)	弥生時代中期の土坑・ビットを 検出	12
昭和63（1988）年5月	恩智中町3-224-1,3	共同住宅建築	八尾市教育委員会 (63-529)	地表下1.1mにおいて、弥生時代 ～中世の土器出土	13
昭和63（1988）年5月	恩智中町2-125	個人住宅建築	八尾市教育委員会 (63-15)	地表下1.6mにおいて、弥生土器 片出土	13
昭和63（1988）年8月	恩智北町1-59・60	共同住宅建築	（財）八尾市文化財調査研究会（OJ88-2）	弥生時代中期～古墳時代中期の 遺構・遺物包含層を確認	14
昭和63（1988）年11月	恩智1045他6筆	浄化槽設置	（財）八尾市文化財調査研究会（OJ88-3）	古墳時代後期の土器棺蓋を検出	14
昭和63（1988）年11月	恩智中町3-239・257	住居付教会建築	八尾市教育委員会 (63-361)	地表下1.8m～2.4mにおいて、弥 生時代～古墳時代の包含層確認	13
平成元（1989）年1月	恩智中町3-66	下水道管渠築造	八尾市教育委員会 (63-399)	弥生時代中期の遺構・遺物を確 認	15
平成元（1989）年9月	恩智中町4-55他	青少年施設建築	（財）八尾市文化財調査研究会（OJ89-4）	近世の石組み・暗渠を検出	16
平成元（1990）年8月	恩智北町4-650	小学校プール建設	八尾市教育委員会 (90-10)	中世の灰状遺構検出	17

第1表 恩智遺跡 既往調査一覧表（その1）

調査年月	調査地	調査原因	調査主体	主な検出遺物・出土遺物	文献
平成2(1990)年10月	恩智中町3-129	個人住宅建設	八尾市教育委員会 (90-282)	ピットと溝状遺構検出 弥生時代遺物包含層確認	18
平成2(1990)年12月	恩智中町2-323・324	共同住宅建築	八尾市教育委員会 (90-457)	弥生時代の自然流路を検出	18
平成3(1991)年2月	恩智中町1-81	共同住宅建築	八尾市教育委員会 (90-538)	弥生時代の自然流路を検出	19
平成3(1991)年7月	恩智中町2-176	専用住宅建築	八尾市教育委員会 (91-55)	弥生時代中期の遺物包含層を確認	19
平成3(1991)年9月	恩智中町2丁目地内	水道管埋設工事	八尾市教育委員会 (91-232)	地表下0.0mに弥生時代中期の遺物包含層を確認	20
平成3(1991)年10月	恩智中町2丁目地内	水道管理設工事	八尾市教育委員会 (91-363)	中世以降に弥生時代の遺物包含層を削平	20
平成3(1991)年11月	恩智北町112～126・42	排水路改修工事	(財)八尾市文化財調査研究会(OJ91-5)	古墳時代前期の土坑・中期の溝を検出	21
平成3(1991)年11月	恩智北町2-169・170・172・173	共同住宅建築	八尾市教育委員会 (91-335)	弥生時代～古墳時代の遺物包含層を確認	19
平成3(1991)年12月	恩智北町2-169・170・172・173	共同住宅建築	(財)八尾市文化財調査研究会(OJ91-6)	弥生時代前期・中期前葉の遺構面を検出	22
平成4(1992)年1月	恩智北町4丁目	市道拡幅工事	八尾市教育委員会 (91-540)	V期の円筒埴輪が出土	23
平成4(1992)年6月	恩智北町4-650	小学校屋内運動場建設	(財)八尾市文化財調査研究会(OJ92-7)	古墳時代前期～鎌倉時代の遺構・遺物を確認	24
平成4(1992)年10月	恩智中町2-245-2	学生寮建築	八尾市教育委員会 (93-352)	弥生時代中期の遺物包含層を確認	25
平成4(1993)年5月	恩智中町3-65	専用住宅浄化槽設置	八尾市教育委員会 (92-640)	弥生時代中期の落ち込み状遺構を検出	26
平成7(1995)年8月	恩智中町3-150-1・-2	浄化槽設置	八尾市教育委員会 (95-160)	弥生時代中期の遺物包含層及び遺構面を検出	27
平成8(1996)年9月	恩智南町2-87-1	宅地造成	八尾市教育委員会 (96-408)	弥生時代中期の遺物包含層を確認	28
平成9(1997)年2月	恩智中町3-120	専用住宅建築	八尾市教育委員会 (96-471)	弥生時代中期～中世の遺物包含層を確認	本書掲載
平成9(1997)年2月	恩智中町3-111	専用住宅浄化槽設置	八尾市教育委員会 (96-747)	繩文土器・弥生土器が出土	本書掲載
平成9(1997)年3月	恩智中町2-94	浄化槽設置	八尾市教育委員会 (96-518)	中世・弥生時代中期の遺構面を検出	本書掲載
平成9(1997)年4月	恩智中町3-81・82	専用住宅浄化槽設置	八尾市教育委員会 (97-38)	古墳時代中期ごろの遺物包含層を確認	本書掲載
平成9(1997)年6月	恩智中町3-143	専用住宅浄化槽設置	八尾市教育委員会 (96-637)	弥生時代中期の遺物包含層を確認	本書掲載
平成9(1997)年8月	恩智中町3-128,130	専用住宅建築	八尾市教育委員会 (97-310)	弥生時代中期の遺構面を検出	本書掲載

第2表 恩智遺跡 既往調査一覧表（その2）

[参考文献]

- 梅原末治・島田貞彦 1923「河内国府石器時代遺跡発掘調査報告書」『京都大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 島居龍藏・岩井武俊 1917「石器時代遺跡調査(15)」大阪毎日新聞大正6年8月12日付
- 梅原末治 1926『銅鐸の研究』

4. 藤岡謙二郎 1941 「中河内郡南高安村恩智弥生式遺跡」『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12冊
5. 今里幾次 1948 「河内恩智の縄文土器」『日本考古学』1-3
6. 山本昭・泉本知秀・福岡澄男「八尾市恩智遺跡の出土遺物」『大阪文化誌』第2卷1号
7. 瓜生堂遺跡調査会 1980 「恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ」／1981 「恩智遺跡Ⅲ」
8. 八尾市教育委員会 1983 「八尾市内遺跡昭和57年度発掘調査報告書」
9. 八尾市教育委員会 1985 「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」
10. (財)八尾市文化財調査研究会 1986 「昭和60年度事業概要報告」
11. 八尾市教育委員会 1987 「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ - 恩智遺跡の調査 - 」
12. 八尾市教育委員会 1988 「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ」
13. 八尾市教育委員会 1989 「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ」
14. (財)八尾市文化財調査研究会 1989 「(財)八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度」
15. 八尾市教育委員会 1989 「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ」
16. (財)八尾市文化財調査研究会 1990 「(財)八尾市文化財調査研究会年報平成元年度」
17. 八尾市教育委員会 1991 「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅱ」
18. 八尾市教育委員会 1991 「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ」
19. 八尾市教育委員会 1992 「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ」
20. 八尾市教育委員会 1992 「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ」
21. (財)八尾市文化財調査研究会 1992 「恩智遺跡第5次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』
22. (財)八尾市文化財調査研究会 1992 「恩智遺跡第6次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』
23. 八尾市教育委員会 1993 「八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅱ」
24. (財)八尾市文化財調査研究会 1997 「恩智遺跡第7次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』
25. 八尾市教育委員会 1993 「八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ」
26. 八尾市教育委員会 1994 「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ」
27. 八尾市教育委員会 1996 「八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ」
28. 八尾市教育委員会 1997 「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ」

2-1. 恩智遺跡（96-471）の調査

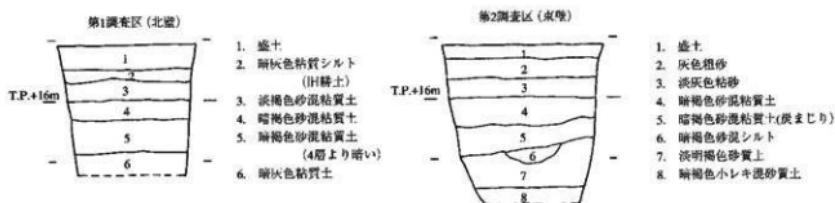
1. 調査地 恩智中町3丁目120
2. 調査期間 平成9年2月27日・3月17日
3. 調査方法 専用住宅建築に先立ち、遺構・遺物の確認調査のために1.1m×1.1mの範囲の調査区を東西方向に2ヶ所設定した。そして、人力掘削によって、それぞれ地表下約1.3mまで調査を行った。さらに、基礎工事の掘削時に立会調査を行った。
4. 調査概要 第1調査区—申請地内西側の調査区である。現地表(T.P.+16.46m)より地表下0.2mまで、盛土層が続く。以下旧耕土層（暗灰色粘質シルト）が層厚約0.1mで存在している。
- 地表下約0.4m付近(T.P.+16m)において、落ち込み状遺構を東壁断面で確認しているが、出土遺物は土師器の細片のみであった。時期は、近世ごろのものと考えられる。そして、この遺構面のベース層となる暗褐色粘質土〔4・5層〕は、地表下0.4mから0.85m(T.P.+16.0m～15.6m)まで続き、瓦器・土師器・須恵器・弥生土器の破片・サヌカイト剝片及びチップ等が多数含まれている。これら出土遺物から、この層は、中世以降の遺物包含層であると考えられる。
- さらに、地表下0.85m～1.1m(T.P.+15.6m～15.35m)の間に暗灰色粘質土〔6層〕があり、弥生土器片を中心に出土しているものの、その他に須恵器片・土師器片も含まれている。のことから、この層は、古墳時代後期までの遺物包含層であると考えられ、弥生時代の遺物包含層は削平されているものと考えられる。明瞭な遺構等は確認できなかった。
- 第2調査区—申請地内東側の調査区である。現地表(T.P.+16.44m)より層厚約0.1



第7図 調査地周辺図（1/5000）



第8図 調査位置図 (1/400)



第9図 土層断面図 (1/40)

mの盛土層があり、その直下に旧耕土層（灰色粗砂）が見られた。

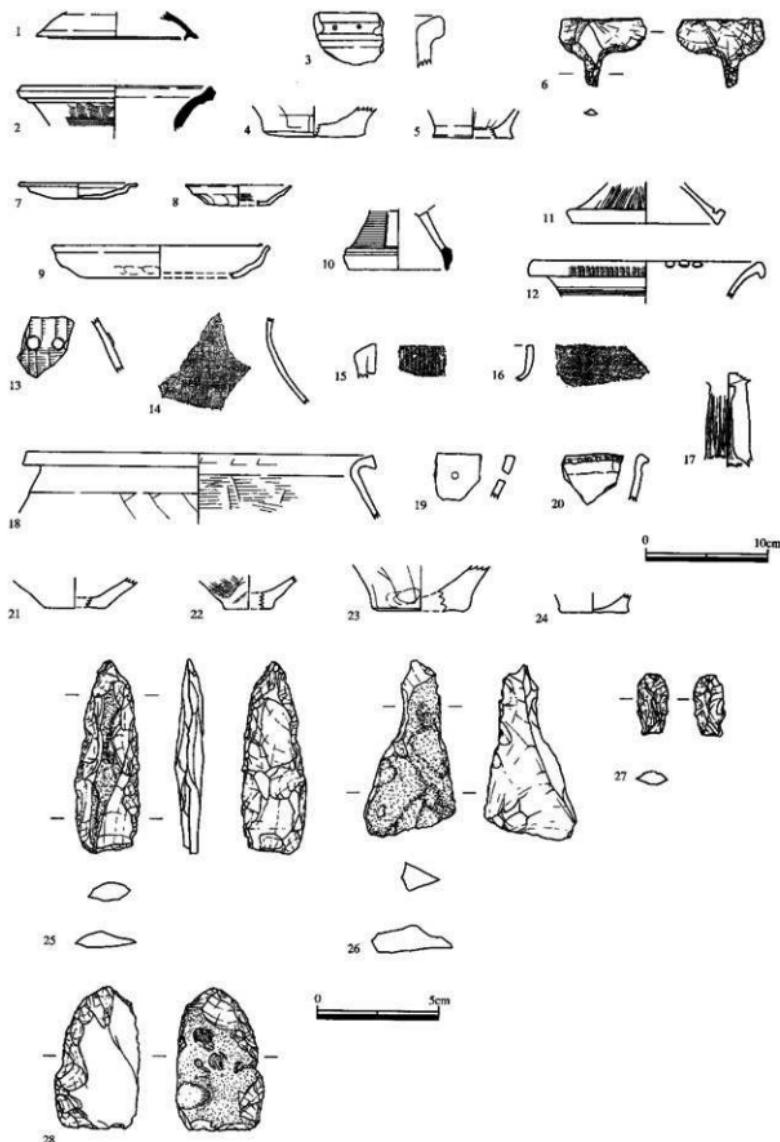
以下、地表下0.4m～0.65m（T.P.+16m～15.75m）の間に瓦器・土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器の破片を多数含む暗褐色砂混粘質土〔4層〕が続く。

さらに、地表下0.65m～0.9m（T.P.+15.75m～15.5m）の間には、弥生土器やサスカイト剝片のみ多数出土する暗褐色砂混粘質土（4層よりやや暗め）〔5層〕がある。これが弥生時代中期の遺物包含層と考えられる。そして、地表下0.9m（T.P.+15.5m）の淡明褐色砂質土をベースとして直径約0.1m～0.2mの小穴状の遺構（深さ約0.1m）を3点検出した。埋土の暗褐色粘砂中より弥生土器の細片が出土している。遺構の性格は不明であるが、弥生時代中期の何らかの遺構である可能性がある。

以下、地表下1.15m～1.3m（T.P.+15.25m～15.1m）の暗褐色小礫混砂質土〔6層〕中にも少量の弥生土器片が含まれていたものの、上層ほど多くは出土しなかった。

5. 出土遺物

出土遺物は、旧耕土直下の層から、すでに弥生土器を中心として、須恵器・瓦器・土師器など多数出土している（コンテナ約1箱弱）ものの、そのほとんどが破片であり、遺構に伴うものではなかった。そのため、第1調査区、第2調査区とも



第10図 出土遺物実測図（土器：1/4・石器1/2）

図化できたのは、すべて遺物包含層の遺物である。

第1調査区の遺物— 図化できたものは、(1～6)の6点あり、すべて破片である。古墳時代後期～飛鳥時代(Ⅲ型式)の須恵器杯蓋(1)・同じく古墳時代後期の須恵器壺口縁部(2)は、[5層]の暗褐色砂混粘質土からの出土である。そして、弥生時代中期(IV様式)の弥生土器の破片(3：大型鉢口縁部、4・5：底部片)、サヌカイト製の石錐(6)は、[6層]の暗灰色粘質土からの出土である。

第2調査区の遺物— 図化できたものは、(7～28)の24点ある。これらはすべて、[4・5層]の出土遺物である。中世の土師皿(7～9)、古墳時代中期の須恵器高杯脚部(10)、弥生時代中期(IV様式)の弥生土器の破片(11：壺蓋、12～14：壺破片、15：鉢口縁部、16：高杯口縁部、17：高杯脚部、18：壺口縁部、19：不明口縁部、20：壺口縁部、21～24：底部)・石器類(石槍：25・角錐状石器26・石鎚27・スクレイバー28)がある。これら出土遺物の層位から、弥生時代～中世の遺物が混在して出土していることがわかる。

6.まとめ

今回の調査では、建物建築予定地内に東西2箇所の調査区を設定して調査を行ったが、2ヶ所ともほとんど同様の結果が得られた。層位の対応では、第1調査区の[4層]と第2調査区の[4層]がほぼ同時期の層となり、今回の調査地内に中世以降の遺物包含層が広がっている事が分かった。また、第1調査区の[5層]には瓦器・須恵器が含まれており、中世に削平を受けているものの、第2調査区の[5層]が弥生時代の遺物のみを含む層であることから、本来このレベル高(T.P.+15.5m前後)に弥生時代の遺物包含層及び遺構面が存在していた可能性が高い。

現在の恩智遺跡においては、その集落想定域のほとんどが宅地化されている現状では、面的な調査を行うことが困難である。そのため、弥生時代の遺構面が良好に検出される例が少ない。しかし、「天王の森」ほぼ真南側に位置する今回の調査のように、遺物の出土量から想像される該期の集落域内の調査に、今後も注意を要する必要があろう。

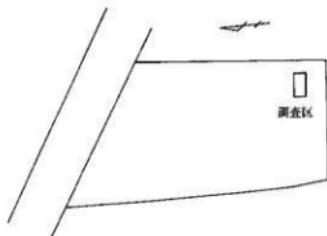
(藤井)

2-2. 恩智遺跡（96-747）の調査

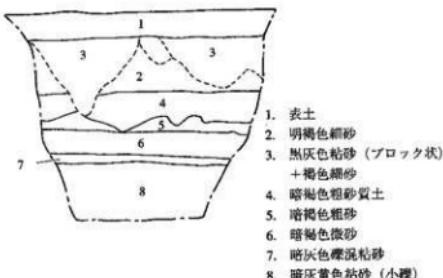
1. 調査地 恩智中町3丁目11
2. 調査期間 平成9年3月3日
3. 調査方法 浄化槽掘削に伴い約2m×1mの調査区を設定し、地表下約1.7mまで人力による掘削を行い地層観察を中心とした調査を行った。
4. 調査概要 調査地は「恩智遺跡」として府の指定史跡となっている天王の森から道路をはさんで北側に隣接しており、また本市教育委員会が昭和61年に実施し縄文時代中期～晩期・弥生時代にいたる遺物が多量に出土した地点の西隣に位置する。こうしたことから濃厚な包含層と遺構の存在が予想された。しかし、後に述べるように実際には異なった結果となった。
- 表土下約0.3mの明褐色細砂上面で灰黒色粘砂とベースとなる細砂が混じりビットあるいは土坑状を呈していた。しかし、いずれも灰黒色粘砂のみに遺物が含まれており、ベース層とみらる明褐色細砂に灰黒色粘砂でブロック状に入り込む状況が確認できる箇所もあり、これらを遺構としてとらえることはできないものと考えられた。ただし、灰黒色粘砂からは細片ではあるが弥生時代の土器及び石器が多量に出土している。
- そして、ベース層下部の暗褐色粗砂質土と粗砂を取り除いた地表下0.95mの暗褐色微砂以下では遺物は極少量となるが縄文土器を含む土層となり、地表下1.2mにある暗黄灰色小礫混粘砂層でも小片であるが土器が散見された。しかし、これがプライマリーな包含層となるかは現時点では不明である。
5. 出土遺物 ここでは多くの遺物が出土した灰黒色粘砂出土遺物を中心に図化した。しかし、



第11図 調査地周辺図 (1/5000)



第12図 調査位置図（1／400）



第13図 調査位置図（1／40）

前述しているようにいずれも細片ばかりであり、土器の全容がわかるものは無かつた。

1は太頸の広口壺で、復元口径約8.0cm、暗灰褐色を呈する。口縁端部外面に刻み目を有し、体部はヘラミガキ、内面は口縁部は横位のハケ、体部は板状工具によるナデである。2は広口壺の底部で、復元底径約12.1cmを測る。外面にはヘラミガキを施す。3は壺口縁部で、口縁端部に刻み目を入れている。外面はハケ、内面口縁にはヘラミガキを施す。茶褐色を呈する。4は広口壺の口縁部で、端部に3条の沈線が巡る。復元口径約31.0cmで、暗茶褐色を呈する。非生駒西蘆産とみられる。5は鉢で口縁端部は平坦をもち、内側に肥厚する。外面には刻み目を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。復元口径18.2cm、橙褐色を呈すし、非生駒西蘆産とみられる。

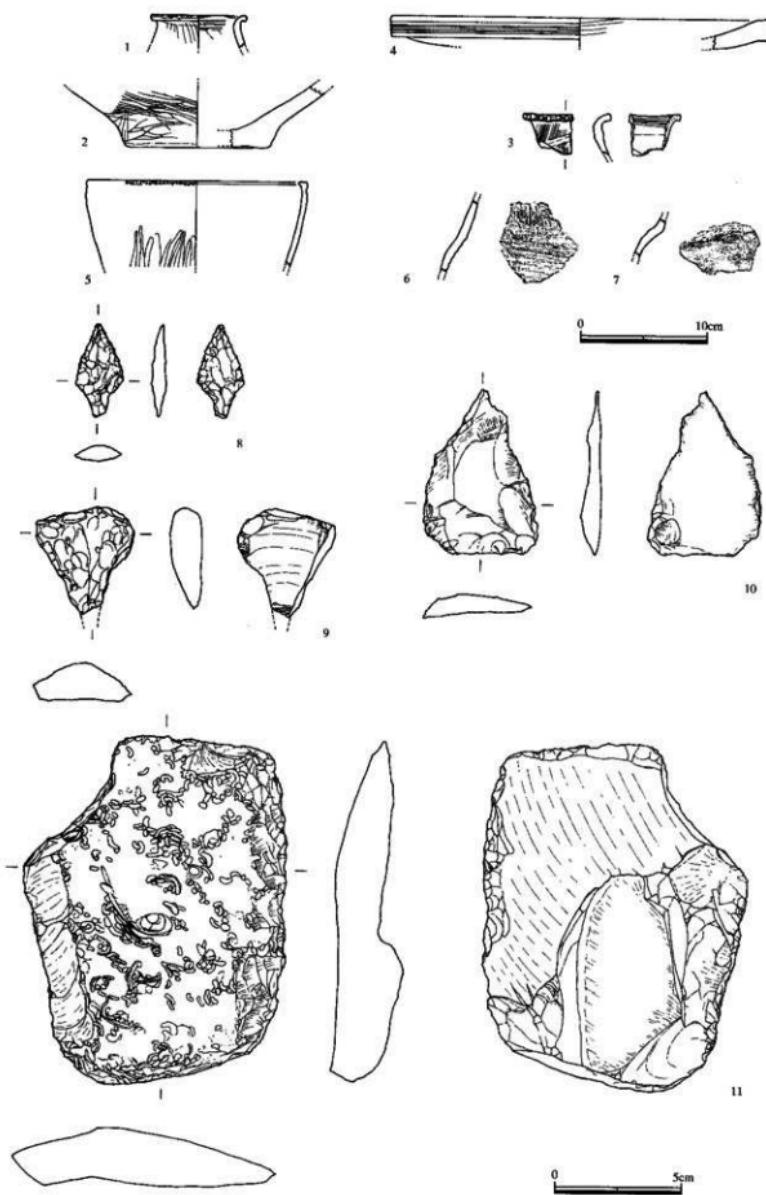
6と7は縄文土器で、6は暗褐灰色微砂から、7は暗灰黄色小礫混粘砂から出土したものである。6深鉢は外面を二枚貝条痕文、内面はナデ調整を行っている。7深鉢は内外面ともにナデを行う。いずれも小片で明確ではないが滋賀里式とみられる。

8~11は石器である。8は有茎式石鎌で、鎌身長2.4cm、茎長1.4cm。9は石錐で錐部が欠けているが、頭部と錐部の境が明確なものである。10は尖頭器状石器で、長さ6.7cm、幅4.6cmである。11は石鋏で長さ14.5cm、幅10.5cmである。刃部と側部に調整がみられるが、刃部の一部は使用により欠損したものではなく、当初よりこの状態であった。

これらの遺物からこの調査地点における遺物は縄文晩期と弥生時代中期前半のものであることがわかる。

先述しているように本調査地は昭和61年度に当教育委員会で行った調査地点の西隣に位置する。この時の調査では今回確認した弥生時代の包含層が既存住宅のため削られており、遺存していなかった。しかし、一部残存していた遺構構築層で弥生時代の小穴17個、縄文時代晩期の落ち込み1基、土器集積小穴5個と3層の包含層

6.まとめ



第14図 出土遺物実測図・土器 (1/4)・石器 (1/2)

より多量の縄文時代の土器、石器、動植物遺体が見つかっている。

詳しい土層関係などは次の調査（97-310）のまとめで行いたいが、61年度調査では黄色粗砂上面で弥生時代のピットを検出したとあるが、その多くの埋土は黒色シルト混粘土とされている。今回、弥生土器が含まれていたのは灰黒色粘砂であり、同--の可能性もあるが、61年度報告書を見るかぎりは砂層に灰黒色粘砂がブロック状に混じる状況ではないようで、ここでは異なったものと判断せざるをえない。また、多量の縄文土器が出土したとされる黒茶色シルト、黒茶色粘土混じりシルト、黒茶色シルトは本調査地では確認されていない。ただ、落ち込み検出層が黄茶色粘土混じり細砂であり、これは本調査地の暗灰黄色小砾混粘砂と対応すると推定される。

こうしてみると61年度調査の包含層としている3つの層は遺構の可能性をもつか、あるいは同時期の遺構の中心が本調査地より東に広がるものとして考えられる。恩智遺跡については不明な部分が多いが、今後周辺調査を行うことによってこれが解明されるものと思う。

(消)

〔参考文献〕

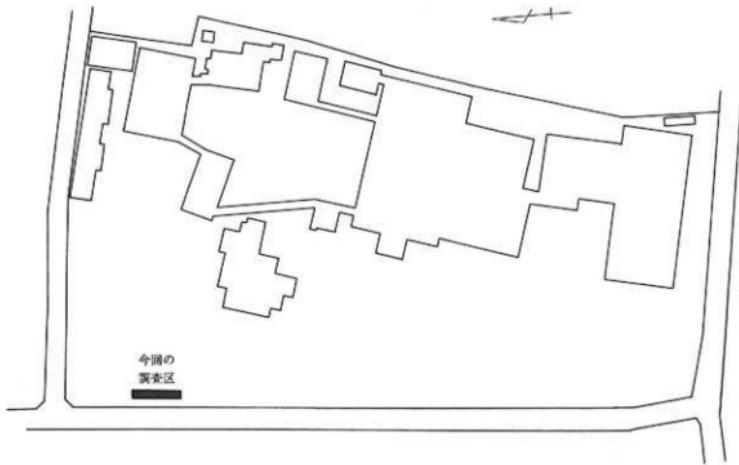
鷲村友子『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』八尾市教育委員会1987

2-3. 恩智遺跡（96-518）の調査

1. 調査地 恩智南町2丁目94番地
2. 調査期間 平成9年3月24日～28日・5月12日
3. 調査方法 「天王の森」の北側に位置する教会建物に付随する浄化槽施設の設置箇所について、東西1.6m×南北10mの範囲で調査区を設定し、遺構確認調査を行った。調査方法は、盛土の範囲内の地表下約1mまでを重機により掘削し、以下地表下2.2mまでを人力掘削により行った。一部、地表下2.55mまで掘削を行い、下層を確認している。後日、浄化槽設置工事の掘削時に立会調査を行い、土層の確認と遺物の収集を行った。
4. 調査概要 (基本層序) 本調査区の現況は、更地となっており、一部近年の搅乱を受けている部分があつた。そして、現地表面（T.P.+18.15m）から層厚約0.7m前後の盛土層を除去すると、茶褐色砂質土〔1層〕があらわれた。層厚は、約0.15mある。この層からは、瓦器・須恵器・土師器・弥生土器等の土器片・サヌカイト剥片など多数出土している。以下、1層から地表下1.0m前後までは、顯著な遺構等は確認できず、瓦器・須恵器・土師器・弥生土器の破片を含む層が続く。
- そして、地表下1.05m～1.4m（T.P.+17.1m～16.75m）にかけての暗褐色系の粘質土層〔7層～9層〕には、多数の瓦器・土師皿等の鎌倉時代頃までの土器が含まれており、中世の遺物包含層と考えられる。層厚は約0.35mある。そして、この遺物包含層の直下となる地表下1.4m前後（T.P.+16.7m）の暗褐色～暗灰褐色砂混粘質土〔10・11層〕をベース面として、遺構面を検出している〔第2調査面〕。検出した遺構は、溝（SD02）と小穴（Pit2）がある。



第15図 調査地周辺図 (1/5000)



第16図 調査位置図（1／1000）

さらに、この遺構面中【10・11層】にも須恵器・土師器・弥生土器が含まれており、遺構面構築以前の遺物包含層と考えられる。時期は、古墳時代後期以降であろう。遺構等は確認できなかった。

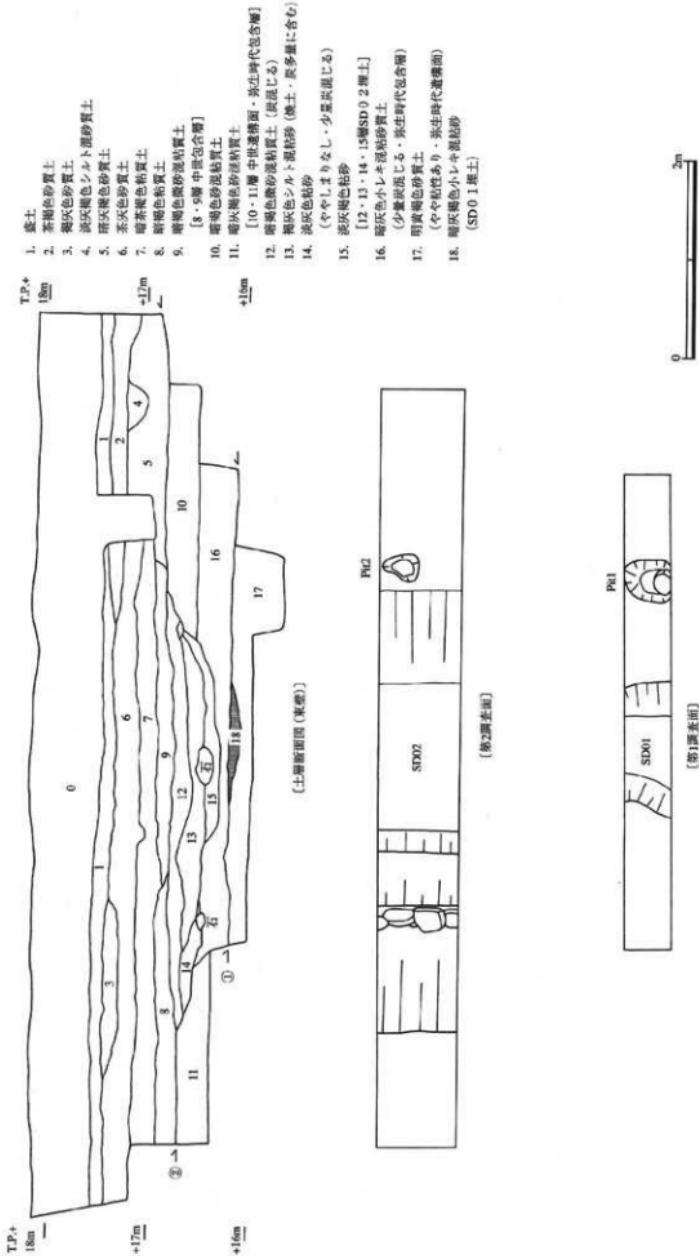
以下、地表下1.65m～2.0m(T.P.+16.5m～16.15m)の暗灰色小レキ混粘砂質土【16層】が、弥生時代中期～後期の土器片やサヌカイト剥片のみを多数含む遺物包含層となる。層厚は、約0.35mある。そして、地表下2.0m (T.P.+16.5m) の明黄褐色砂質土【17層】の上面が遺構検出面となる【第1調査面】。検出した遺構は、溝(S D 0 1)と小穴(P i t 1)がある。

この遺構構築面中には、遺物は含まれておらず、下層確認の結果、地表下2.55m (T.P.+15.6m)までは、この層が続くと考えられ、今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物は確認できなかった。

5. 検出遺構・出土遺物

[第1調査面] 弥生時代中期遺構面：第17図 第1調査面平面図 参照
S D 0 1 第2調査面の南側中央部で検出した。南北幅約1.2m～1.4m・深さ約0.1～0.2mの東西方向の溝である。断面は、皿状を呈する。調査面積が狭いため、その詳しい方向で不明であるが、立会調査時にこの溝の続きの確認を行った結果、東側には、やや北西よりに方向を変えて続くようである。埋土は、暗灰褐色小レキ混粘砂の單一層であった。

出土遺物は、溝西側底面で出土した広口壺の破片(1：第18図 出土遺物実測図参照)がある。口縁部から肩部にかけて残存しており、口縁部はほぼ完周する。口縁端部に凹線文を施し、口縁部に2孔1対の円孔を2組もつ。外面体部はタテ方向のハケ調整である。色調は、明赤褐色であった。非生駒西麓産土器であると考えられる。その他の出土した弥生土器は、すべて破片で、壺底部(2)のほか、団化で



第17図 土層断面図及び遺構平面図 (1/50)

きるものはなかった。これら出土遺物から、弥生時代中期（IV様式）の遺構であると考えられる。

Pit 1 第1調査面のSD01の北側で検出した。この小穴は、トレンチ外に西側に若干続くと思われるが、ほぼ東西長約0.4m・南北長約0.44mの稍凹形を呈する。深さは約0.15mある。SD01に関連する遺構かは、不明である。小穴の底面中央には、約0.2m大の円礫が据えられた状態で出土している。埋土は暗灰色粘砂である。出土遺物は、簾状文を施した壺の破片など弥生土器の細片が3点出土しているが、図化できるものはなかった。立会調査時にもこのPit 1とほぼ同様のビットを北東約1.0mの所で確認している。

【第2調査面】 中世遺構面：第17図 第2調査面平面図 参照

SD02 調査区中央部で検出した溝状遺構で、トレンチ方向に直交しており、東西方向に続くと考えられる。南北幅約4.5mで、最深部は約0.45mを測る。溝断面は、北肩部側からは一度やや傾斜する平坦面を持ち、そして緩やかな逆台形を呈する。さらに、溝北側から約1.1mの溝肩部平坦面の始まるところに東西一列に並んだ状態で石列を検出している。この石列の性格が、溝を区画するものかは溝の全容が明らかでないため不明である。

溝の埋土は、上層から、暗褐色砂混粘質土(12層)・褐灰色シルト混粘砂(13層)・淡灰色粘砂(14層)・淡灰褐色粘砂(15層)である。埋土は、すべて炭混じりで、特に褐灰色シルト質粘砂(13層)は、多量の炭とブロック状の焼土を含んでいる。この溝は、周辺での火災等の整地時に埋められた可能性がある。

SD02の出土遺物 【第18図 出土遺物実測図 参照】

SD02からは、瓦器楕の細片を中心として、その他に、土師器・丸瓦・須恵器・弥生土器の破片が出土している。すべて破片で、そのうち図化できたのは、3～11の9点ある。3～6は、口径約8cm～10cmの小型の土師皿で、7は口径12cmの中型の土師皿である。8は、瓦器楕で、底部のみであるが、内面に格子状のヘラミガキを施す。高台は、やや低い台形状を呈する。9は、大和型の羽釜の破片で、口縁部が一部残存していたのみであるが、復元径28cmは測る。外反する口縁部から端部をつまみ上げる形態のものである。10・11はやや摩滅を受けた弥生土器の底部の破片である。

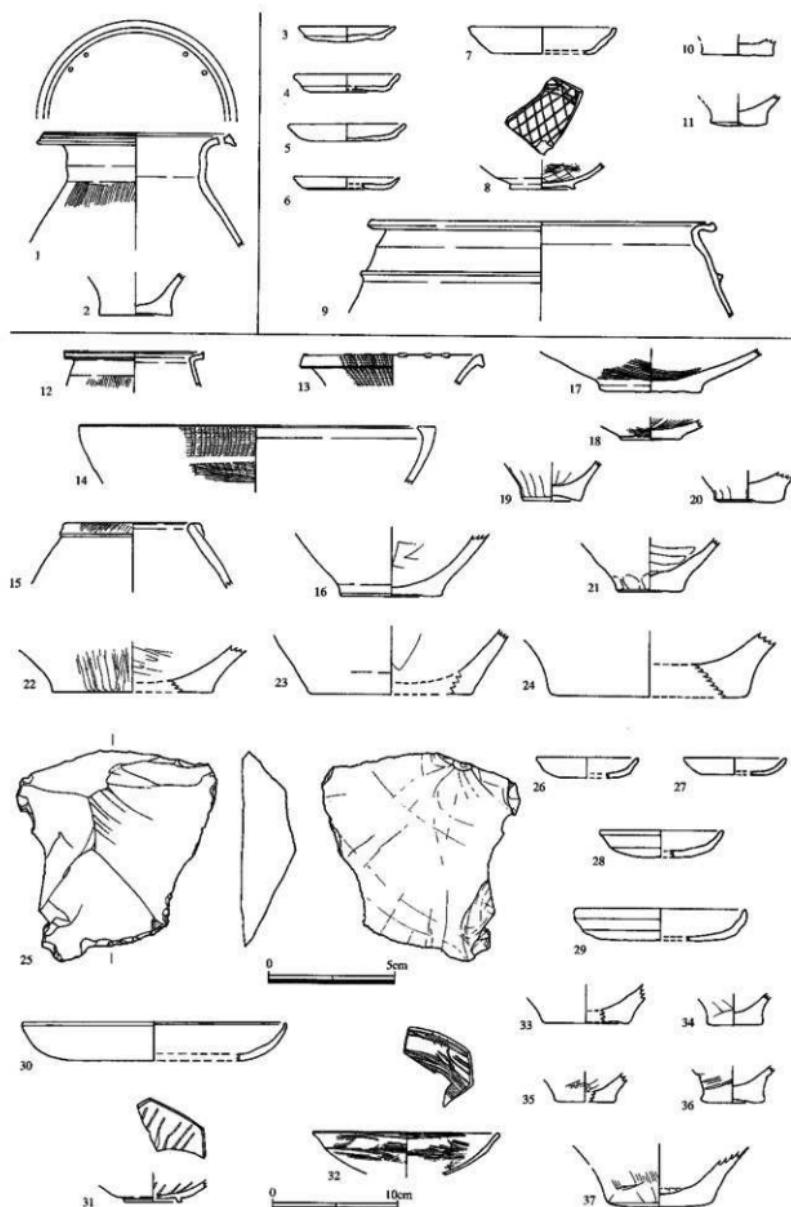
これら出土遺物から、鎌倉時代後期（13世紀～14世紀代）の遺構であると考えられる。

Pit 2 SD02南側で検出した東西長約0.36m・南北長約0.28mの不定形の小穴である。深さは、約0.4mある。埋土は、暗青灰色粘質土である。出土遺物は、少量の土師器小片・弥生土器小片がある。図化できるものはなかった。

【遺物包含層の出土遺物】

その他、遺構に伴わない出土遺物がコンテナにして、1箱あるが、ほとんどが破片で、そのうち図化できたのが、26点ある。

12～25は、弥生時代後期の遺物包含層である〔16層〕の出土遺物である。12は、壺の口縁部で、短く端部をつまみ上げる。13・14は簾状文を施す広口壺の口縁部と大型鉢の口縁部である。15は、無頸壺の口縁部、16から24まではそれぞれ底部の破片



第18図 出土遺物実測図（土器：1／4・石器：1／2）

である。25は、表面の風化の著しいサヌカイト剥片である。

26～37は、中世の遺物包含層である〔7層～9層〕の出土遺物である。26～28・29・30は、土師皿である。30・31は、瓦器椀の底部である。33～37は、中世の遺物包含層に含まれていた弥生土器の底部の破片である。

5. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代後期（第2調査面：T.P.+16.7m）と弥生時代中期（IV様式・第1調査面：T.P.+16.15m）の2面の遺構面を確認できた。弥生時代中期以前の遺構等は確認できなかった。

まず、弥生時代中期の遺構面については、今回の狭小な調査面積では、溝とピットの一部をそれぞれ検出できたのみであるので、遺構の性格・全体像は不明である。しかし、恩智遺跡の弥生集落の範囲が、北に広がる事を知る資料の一つとなるだろう。現況の地形では、今回の調査地東側は高台になっており、集落域が東側に広がるとは考えにくく、また、これまでの周辺の調査から考えても今回の調査地は、集落域の北端部に位置していると考えられる。

次に、上面で検出した鎌倉時代後期の溝は、幅約4.5mの規模で東西方向に続くものであった。そして、溝の埋土には、多量の炭やブロック状の焼上・粘土が含まれていた。溝のほんの一部を検出ただけで、その性格については不明であるが、今回の調査区南側に位置する現在の「天王の森」付近にあったとされる中世ごろの恩智神社との関連する遺構とは考えられないだろうか。もし仮に恩智神社が中世にこの地にあったとすれば、神社の範囲等を示す北端を区画する溝であった可能性もある。そして、恩智神社移転以後に、今回検出した溝も整地時に埋められたものと推測できよう。

今までに、この地における中世の恩智神社の場所・範囲を示す資料等は全く明らかでないため、実際のところは不明であるが、今後該期の遺構・遺物にも注意する必要があろう。

(藤井)

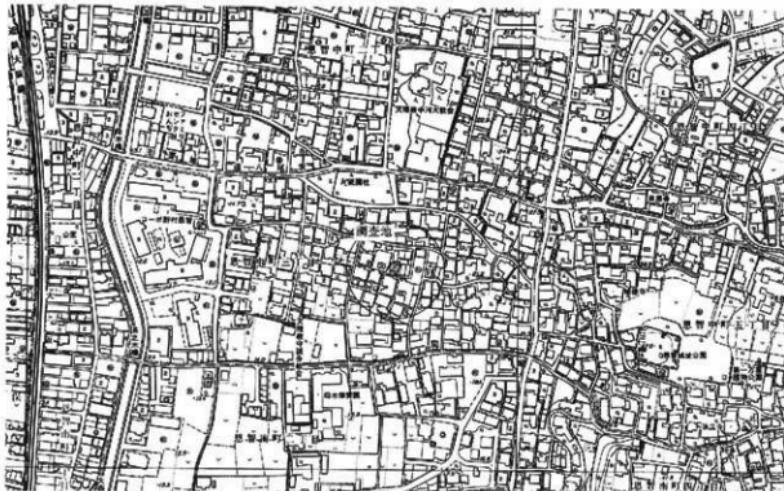
【参考文献】

瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡I・II』

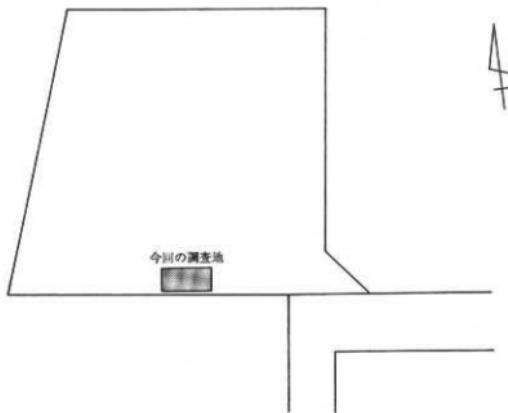
八尾市史編集委員会 1988『八尾市史（前近代）本文編』

2-4. 恩智遺跡（97-38）の調査

1. 調査地 恩智中町3丁目81・82
2. 調査期間 平成9年4月16日
3. 調査方法 専用住宅の浄化槽設置部分について、1m×2mの範囲を重機と人力掘削を併用して、地表下約1.5mまで遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 今回の調査区の現況地盤は、周辺道路面から約0.4mほど高い位置にあり、現況地盤からでも地表下0.5mまでは盛土層であった。そして、旧地表面（褐色砂質土）が確認できた。このことから、この周辺では、現況の道路面直下にそれ以前の旧地表面が存在している事が分かる。
- そして、この旧地表面から約0.6m掘り下げたところに、須恵器・土師器・弥生土器の破片を含む暗褐色粘質土〔1〕層がある（層厚約0.2m）。さらに、旧地表面以下約0.8mのところに、自然礫を多数含む暗褐色粘質土〔2〕層がある（層厚約0.2m）。この層からも須恵器壺片・土師器片・弥生土器片・サヌカイト剥片等が混在して出土している。すべて破片で、固化できるものは出土しなかった。これらの2層が、遺構等は確認できなかったものの、出土遺物から古墳時代後期以降の遺物包含層になると考えられる。
5. まとめ 今回の調査地は、「天王の森」の南側約90mの所にあって、弥生時代の集落の範囲内に位置していたと考えられる場所であった。しかし、該期の遺物は、多数確認できたものの、そのほとんどは遺物包含層内から土器破片が出土するのみで、明確な遺構等に伴うものではなかった。これは、おそらく、弥生時代から古墳時代にかけての遺構面が、中世以降の耕作等によって、削平・改変を受けたことによるもの



第19図 調査地周辺図 (1/5000)



第20図 調査位置図 (1/200)



第21図 土層断面図 (1/40)

と考えられる。

恩智遺跡の弥生時代における集落は、土器等の出土量からも、密度の高い集落であったことはこれまでの調査で明らかあるが、その内容については、まだまだ不明な点が多い。今後、部分的にでも、集落の様相が明らかになることを期待したい。

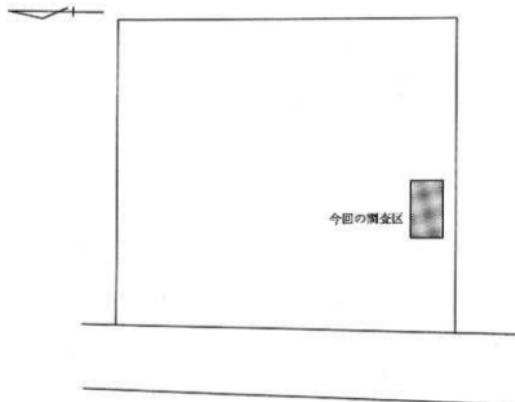
(藤井)

2-5. 恩智遺跡（96-657）の調査

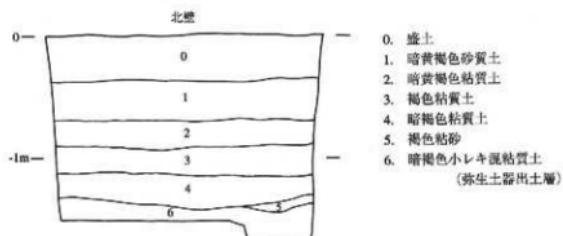
1. 調査地 恩智中町3丁目143
2. 調査期間 平成9年6月12日
3. 調査方法 個人住宅の浄化槽設置工事に伴い、設置箇所東西2.2m×南北1.5mの範囲を地表下約1.5mまで遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 層厚約0.35mの盛土層以下、地表下1.1mまでは少量の土師器細片は出土しているものの遺構等は確認できなかった。そして、地表下1.1m～1.3mの暗褐色粘質土から、瓦器・須恵器・土師器の破片が出土している。時期については、中世ごろの遺物包含層と考えられる。
- そして、地表下1.3m～1.6mまでの暗褐色小レキ混粘質土層から、弥生土器片やサヌカイト剥片が多数出土している。この層は、一部中世ごろに削平を受けている部分もあるものの、弥生時代中期の遺物包含層と考えられる。
5. 出土遺物 遺物は多数出土しているものの破片がほとんどで、図化したのは弥生土器2点とサヌカイト1点で、すべて弥生時代中期（IV様式）の遺物包含層である暗褐色小レキ混粘質土層からの出土である。1は、蓋（壺用）で、口縁部が約1/5残存している。茶褐色を呈し、内外面ともヘラミガキが施されている。2は、壺底部の破片で、底径約10cmを測る。約1/2が残存している。わずかに縦方向のハケの痕跡を残している。3は、サヌカイト剥片である。
6. まとめ 今回の調査では、弥生時代中期の遺物包含層の確認にとどまり、遺構等は、検出できなかった。弥生土器の出土量から、遺構等が存在している可能性が高いが、浄化槽設置部分のみの調査であったため、全容は明らかにできなかった。（藤井）



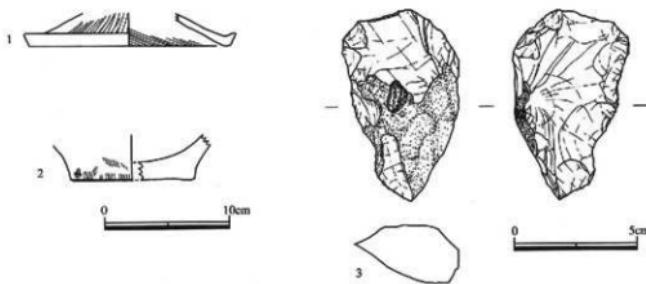
第22図 調査地周辺図（1/5000）



第23図 調査位置図（1／200）



第24図 土層断面図（1／40）



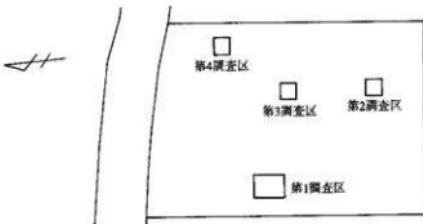
第25図 出土遺物実測図（土器：1／4・石器：1／2）

2-6. 恩智遺跡（97-310）の調査

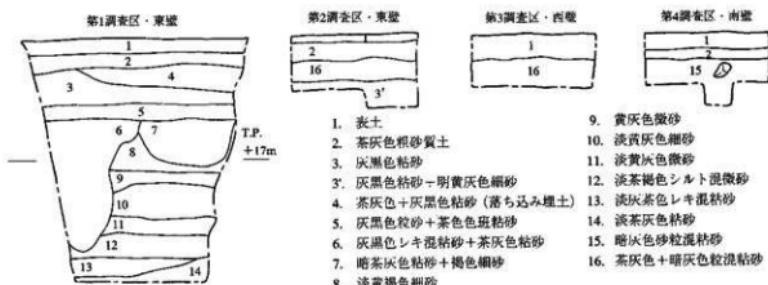
1. 調査地 恩智中町3丁目128・130
2. 調査期間 平成9年8月19・20日、9月5日
3. 調査方法 調査地は大阪府指定史跡である「天王の杜」から南に60mの地点に位置している。今回は住宅の建て替えに伴い浄化槽部分に2m×1.5mの調査区を設け、地表下2mまで人力による掘削を行い調査を実施した。この結果、多くの遺物の出土がしたため再度1m×1mの調査区を3ヶ所設定し、建築物の基礎深度（約40cm）までの土層の観察と遺物の採取を中心とした調査を行った。
4. 調査概要 調査区については浄化槽部分を第1調査区、のちに設定したものを第2～4調査とした。最初に第1調査区について記述し、次に第2～4調査区をまとめて概説していきたい。なお現況はT.P.+18.0m前後であった。
- 表土層（層厚約0.13m）と下部の茶灰色粗砂質土（層厚約0.12m）を除くと遺物がみられ、この時点では近現代のものは含まれなくなる。そして、弥生時代の包含層である灰黒色粘砂上面で東西方向の溝状遺構の南肩を検出した。深さは約0.18m、埋土は茶灰黒色砂質土で、弥生土器（第30図1・2）に混じって須恵器、土師器の細片が出土していることから古墳時代後期以降の時期のものと考えられる。
- 弥生時代の包含層である灰黒色粘砂は約0.4～0.5mの層厚があり、幾層かに分かれられるものと思われるが明確な遺構面として見出すことはできなかった。しかし、地表下0.54mで東側と西側で若干の土質の変化が認められたため、西側への落ち込みとしてこれを面として捉え、第2遺構面とした。落ち込み内の土は砂質が強く、茶灰色砂質土が班点状に混じっており、深さ約0.12mであった。出土遺物は壺、甕、



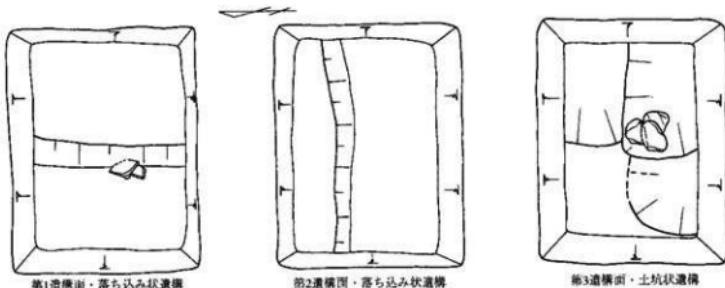
第26図 調査地周辺図（1/5000）



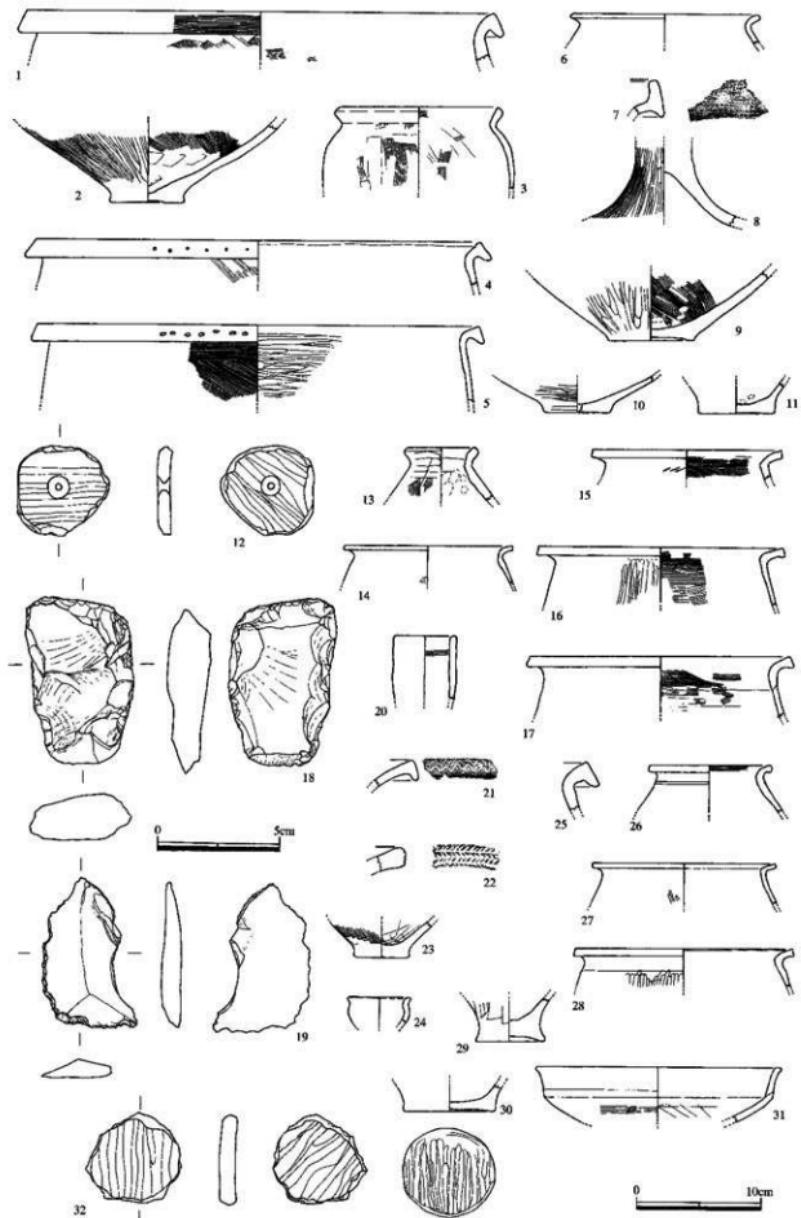
第27図 調査位置図 (1 / 600)



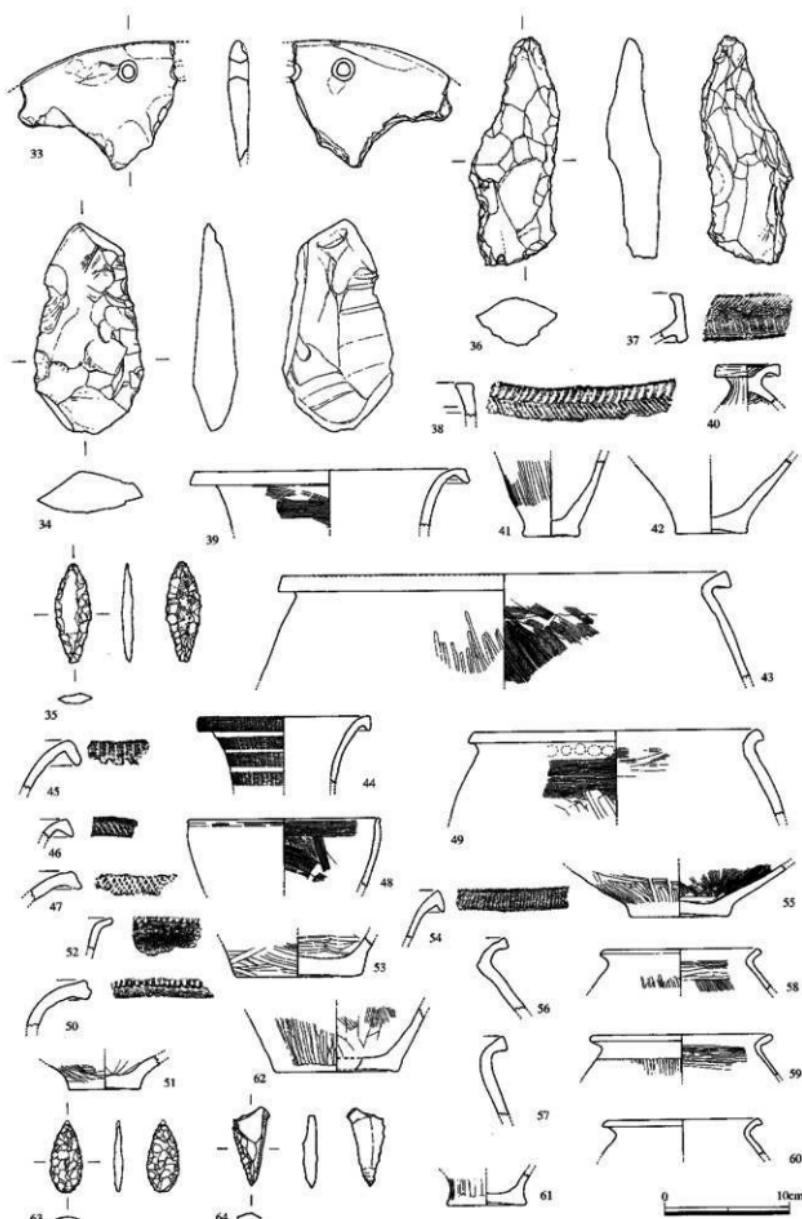
第28図 土層断面図 (1 / 40)



第29図 第1調査区 遺構平面図 (1 / 40)



第30図 出土遺物実測図 土器（1／4）・石器・円盤状土製品（1／2）



第31図 出土遺物実測図 土器(1/4)・石器(1/2)

高杯（3～12）や有孔円盤（13）などであるが、いずれも小破片ばかりである。

第3遺構面は淡黄褐色細砂層の上部層である地表下0.65m付近の灰黒色細砂混粘砂上面から切り込む土坑状の遺構を検出した。これは灰黒色礫混粘砂と茶灰色粘砂を壌土として、深さ約1.1mを測る。底面には径約0.25～0.3mの石が置かれていた。出土遺物はやはり破片のみであったが、第2面の落ち込みや包含層などと比べると全体にやや大きい遺物片であることが観察される。

その他、遺構面下部の細砂層に暗茶灰黒色粘砂が混じる土質が2ヶ所あった。これは本調査地から西北へ25m離れた地点で行った今年度の恩智遺跡の調査[97-474]でもみられたものと似通っているものである。しかし、97-474ではブロック状に混じる灰黒色粘砂に遺物が含まれることが顕著であったが、ここでは遺物はほとんどみられなかった。

そして、地表下1.8m前後の淡灰茶色礫混粘砂中には縄文土器の極細片がわずかに出土している。

次に第2～4調査区の概要についてまとめておく。ここでは地表下約0.4mまで掘削したが、表土層は約0.2～0.25mであった。以下暗灰色砂粒混粘砂に茶灰色粘砂が混じる土層が堆積する。これは第3区において顕著であった。第2区においては地表下約0.37mで灰黒色粘砂に明黄色細砂がブロック状に混じる土層が確認でき、ここでは多くの遺物が出土している。しかし、第4区では暗灰色砂粒混粘砂のみの堆積であり、茶灰色粘砂の混じりはみられない。遺物片は3区などと比べると大きな破片も含まれていた。

5. 出土遺物

遺物についての調整、色調については遺物観察表に譲り、ここでは各遺構や包含層出土遺物（第30図及び第31図）について概観だけしておきたい。

第1面、溝からは屈曲して面をつくる口縁をもち、内外面をハケ調整している壺（1）と外面をヘラミガキする壺底部（2）が出土している。

第2面、落ち込みで出土遺物は（3～12）で、口縁が屈曲して面をもつ壺（4・5）や短く外反する壺（3）が混じる。また底部から上外方に底部がのびる壺（9）や底部に重心をもち算盤形の壺（10）、そして紡錘車（12）が出土している。

第3面、土坑状遺構からは（13～19）の土器、石器が出土している。ここでは（13）のように口縁が短く、端部が丸く納まる壺の存在や、壺でも「く」の字状に屈曲しておさまるものばかりで、大きく屈曲して面をもつものがないことなどが特徴である。石器は石斧（18）とナイフ形（19）がある。

包含層については明確な分離ができなかったが、上部・下部・その両者の混じる中間層に分けた。

上部は包含層に上面からおよそ15cm程度で（20～35）である。壺（20～24）やミニチュアの鉢（25）、壺（26～30）、高杯（31）、円盤状土製品（32）が出土している。石器では石包丁（33）、尖頭器形石器（34）、凸基無茎式石鎌（35）がある。

下部は（36～44）で石檜形の石器（36）、や壺（37～40）、壺（41・42）、そしてミニチュア高杯（40）が見つかっている。

中間層は（44～49）で、壺（44～47）、鉢（48）、壺（49）などである。

これら以外に石包丁片や叩き石と思われる石材が見つかっている。（図版15上）

以上が第1調査区出土遺物を概観した結果、第3面は弥生時代中期のなかでも古い特色を備えており、第2面は中期の中でも新しいものが多く含まれる。こうしたことから第3面と第2面とは分離されるべきものであり、包含層がさらに分層することも可能かもしれない。ただし、その時期幅は大きなものではなく、中期のなかで行われるものと考えられる。

(50~53)は第3調査区、(54~62)は第4調査区から出土したものである。石器では円基無茎式石鎌(63)や石錐(64)があり、甕は口縁が「く」の字状に屈曲する器壁の薄い甕(58~60)がある。また圓化していないが、第3区からは石包丁の破片と綠泥変岩の剥片が、第4区からは石包丁の作製するための結晶片岩の石材が出土している。

6. まとめ

恩智遺跡は大正6年の梅原末治、島田貞彦氏の調査を初めとして、鳥居龍藏氏による調査、そして昭和16年には藤岡謙二郎氏の史前遺跡調査事業、昭和23年には今里幾次氏の繩文土器出土の報告などがあり、また遺跡の背後の垣内山より大正7年に流水紋銅鐸が、昭和24年には都塚山より袈裟棒紋銅鐸が発見されたことなどにより古くから周知された遺跡であった。しかし、いずれも多くの弥生土器と石器や繩文土器の出土を確認したものであり、明確な遺構の検出は昭和50年の瓜生堂遺跡調査会による恩智川河川改修に伴う調査まで待たなければならなかった。

恩智川の調査では弥生時代に限定すれば70~80cmの前期から中期にいたる大量の遺物包含層の下、T.P.+10~9m前に遺構面が遺存しており、ピットや土坑のほか20条以上の溝、木棺墓、土器棺墓、土器溜まりが検出されている。

ここで問題となるのは一つは時期的な集落域の変遷、そしてもう一つは堆積している土層についてである。

時期的な問題については恩智遺跡の集落内での移動についてである。最も恩智遺跡の集落の範囲が確定されているわけではない。しかし、これまでの調査のなかで数条の溝の検出をもって環濠とし、集落の範囲を示唆する資料も提出されている。だが、ここでは集落内での遺構の配置状況を掲示することはできないので集落範囲を云々することはしない。すなわち、恩智川周辺と天王の社周辺に限定して居住域の移動を考えてみたい。

まず、恩智川周辺の状況であるが瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅲ』に記されているように出土遺物についていえばⅡ~Ⅲ様式が6割を占め、Ⅰ・Ⅳ様式が少ない。検出遺構の時期をまとめた表1からもわかるように遺構もこれに比例している。溝出土遺物が多く単独のものは少ない。そしてこの表からいえることは恩智川周辺はⅠ様式期から集落が形成され、Ⅱ様式期に人口の集中が伺われ、Ⅲ様式期にかけて集落として最盛期を迎える。しかし、Ⅳ様式期に衰退に向かい、Ⅴ様式期にから古墳時代前期に村が再構築されることが読み取れる。

さて、こうした状況と天王の社周辺、つまり今回の調査を比較するとまず大きな違いは前期の土器及び中期古段階の土器がほとんど見られないことである。例えば最も古い時期である第3遺構面の出土遺物でも前期の土器は含まれてはおらず、明確に中期古段階に位置づけられるものもない。そして、多くの遺物は中期中段階から新段階にいたるものである。もう1点後期後半から布留式期にかけての遺物が皆

無であり、これが恩智川周辺で見つかっていることは重要である。

すなわち、前期の段階では恩智川周辺の低湿地に集落の基礎を築き、中期古段階から中段階にかけて拡大していく様子がわかる。この時期に天王の杜周辺まで集落規模が広がるのである。しかし中期中段階から新段階にかけての時期だけであり、一旦居住痕跡が途切れた後、新たに後期後半から布留式期に再度低湿地に移動する。こうした中期中段階から新段階にかけての天王の杜周辺への居住域の拡大はそのまま低湿地から高地への移動を意味する。確かに市域の中期の遺跡のなかでは現時点でも最も高地に位置するものである。そこで、問題となってくるのは高地性集落との関係である。この時期恩智遺跡では打製石器、とくに凸基式の石族が粗製される様子がうかがえる。しかし、これをもって高地性集落と確定することはできない。遺構の配置関係を明確にすること並びに集落城を特定することが先決であり、ここから集落の性格を探ることができる。恩智遺跡では建築物の関係から大きな調査は希であるため小さな調査を積み重ね資料の蓄積をしていくしかないが、今後こうしたことが詳細に論じられるときがくるものと思う。

第2の問題として天王の杜周辺の土層堆積について考えてみたい。今年度、天王の杜周辺では6件の調査を行ったが、本調査と(97-747)、そして昭和61年度に当教育委員会が行った調査を取り上げたい。まず各調査の遺構構築面についてみていく。本調査では既に述べているようにT.P+17.46mの灰黒色細砂混粘砂であるが、この層は5cm程度の厚みしかなく、下部は淡黄褐色細砂層が堆積していた。そして細砂層の下1.25mで縄文時代の遺物が見つかっている。

次に(97-747)の調査では本調査で確認された弥生時代の包含層は遺存しておらず地表下0.3mの明褐色細砂層に灰黒色粘砂がブロック状に混じり、遺構を形成しているような状況を呈していた。しかし、遺物は灰黒色粘砂のみの含まれており、細砂層からは1片も見つからなかった。この細砂層下部は粗砂質土、粗砂層が堆積しているが、これらを除いた地表下0.95m以下で縄文土器が出土している。

昭和61年度調査は(97-747)の調査の東隣に位置しており、縄文土器や石器が多く出土している。またニホンジカ等の歯骨片も見つかっている。とくに土器では滋賀里式、船橋式、長原式に混じって東北地方の亀ヶ岡式や中部瀬戸内地方の原下層式が出土しており、この時代の交流の一旦をうかがえる資料となっている。しかし、ここでも弥生時代の包含層は既に搅乱されていたが一部残存していたT.P+15.25m前後の黄灰色粗砂層でピット17基を検出している。その埋土の多くは黒色シルト混粘土であった。粗砂層以下では、前述の縄文時代の遺物が出土しており、T.P+14.65m前後の黄茶色粘土混じり細砂で、落ち込み状遺構を検出している。

以上3件の調査について概要を述べたが、考えてみたいのは天王の杜周辺の弥生時代の遺構構築層は何であるのか、またその時期はいつなのかということだが第1点、さらに包含層下部の砂層はどのようにして堆積したのかということである。

本調査での所見は層厚0.4m前後の遺物包含層が分層できること、そして弥生時代の最終遺構面が砂層上に位置していたことである。これは言い換えれば天王の杜周辺での弥生時代に最初に形成された遺構面ということになる。この遺構面は正確には砂層上に直接形成されるのではなく、約5cm程度の厚みをもつ灰黒色細砂混

粘砂上面に形成されていた。(97-747)でも砂層内にブロック状に遺物を含む粘土が入り込んでいた。しかし、上記いずれの調査でも砂層は無遺物層であり、(97-747)では遺物を含むブロック土があったが、これは掘り込み面を確認できず、周りの土質の変化を捉えられなかったため遺構として考えることはできなかった。

すなわち、砂層上面にわずかな厚みで堆積する灰黒色細砂混粘砂が天王の杜周辺の最初の普遍的な遺構築層であるかどうかは現段階では保留せざるおえない。今後周辺の調査ではこれを十分に意識して調査を行っていかなければならない。

次に遺物包含層下部の砂層についてであるが、これについて今回の調査から得た所見を述べておきたい。そもそも恩智遺跡周辺は扇状地形となっており、遺跡の背後には銅鐸が見つかった都塚山と垣内山がある。この山々の谷地形を幾筋かの河川が流れ、これらが運ぶ土砂によって形成された扇状地先端部の恩智川近辺に最初期の集落が営まれる。

天王の杜付近の砂層が堆積した時期については縄文晩期末の長原式期の範疇として考えられてきた。しかし、今回の調査から上限については言及できる資料は得られなかつたが、下限は弥生時代中期前半と考えてよいと思われる結果がでた。また、この堆積が土砂崩れによって一氣にもたらされたとの意見もあるが、少なくとも本調査と(97-747)の調査では土砂崩れを示す堆積層は確認できなかつた。土層観察ではシルト層、粗砂層、微砂層など明確に区別でき、扇状地を形成していく河川などの流路による堆積によって徐々に堆積していき、弥生時代中期中頃に生活面として整っていくものと考えられる。

以上、問題の整理というよりも問題提議をするほうが主となってしまったが、学史的に著名である当遺跡が実は何もわかっていないというのは我々の怠惰以外なものでもない。小面積の調査から何を引き出すのか、十分な問題意識をもって取り組んでいくことを念頭にこれからも遺跡調査を行っていきたいと思う。

(道)

〔参考文献〕

瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』1980

瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡Ⅲ』1981

鷲村友子『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』八尾市教育委員会1987

恩智遺跡 (97-310) 出土遺物観察表

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整・形態等の特徴	色調	焼成	備考
1	第1区 1面 溝状遺構	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 38.0 残存高 4	外面 ハケ 内面 ナデ、一部ハケ	茶褐色	良好	
2	第1区 1面 溝状遺構	弥生土器 壺 底部	底径 6.1 残存高 6.5	外面 ヘラミガキ 内面 ハケ、イタナデ	茶褐色	良好	
3	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 壺 口縁～体部	復元口径 13.8 残存高 6.7	外面 ナデ、ハケ 内面 ハケ後ナデ	暗茶褐色	良好	
4	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 36.0 残存高 3.3	外面 口縁部に刺突文、ハケ 内面 ナデ	暗灰褐色	良好	
5	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 3.6 残存高 6.2	外面 口縁部に刺突文、ハケ 内面 ナデ、ヘラミガキ	暗茶褐色	良好	
6	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 15.4 残存高 3.0	外面 ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	良好	
7	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 広口 壺	残存高 3.0	外面 柳描文 内面 ナデ、指押え	黒褐色	良好	
8	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 高杯 脚部	残存高 6.5	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
9	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 広口 壺 底部	復元底径 7.0 残存高 5.6	外面 ヘラミガキ 内面 ハケ後指押え	暗茶褐色	良好	
10	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 広口 壺 底部	復元底径 5.4 残存高 3.0	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
11	第1区 2面 落ち込み	弥生土器 壺 底部	復元底径 6.2 残存高 2.5	外面 ナデ 内面 ナデ、指押え	黒褐色 茶褐色		
12	第1区 2面 落ち込み	紡錘車	直径約 3.7	中央に約2.1mmの穿孔有り	橙褐色	良好	
13	第1区 3面 上坑状遺構	弥生土器 短瓶 壺 口縁部	復元底径 6.0 残存高 4.3	外面 ナデ、ヘラナデ、ハケ 内面 ナデ、指押え	暗茶褐色	良好	
14	第1区 3面 上坑状遺構	弥生土器 壺 口縁部	復元底径 13.8 残存高 3.0	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ナデ	淡茶褐色	良好	
15	第1区 3面 上坑状遺構	弥生土器 壺 口縁部～体部	復元底径 15.6 残存高 2.5	外面 ハケか 内面 ハケ	淡茶褐色	良好	
16	第1区 3面 上坑状遺構	弥生土器 壺 口縁部～体部	復元底径 20.0 残存高 4.7	外面 ヘラミガキ 内面 ハケ	暗茶褐色	良好	
17	第1区 3面 上坑状遺構	弥生土器 壺 口縁部～体部	復元底径 21.8 残存高 4.9	外面 ナデ 内面 ハケ	暗茶褐色	良好	
18	第1区 3面 上坑状遺構	彫形石器	縦6.8 横4.3 重さ 65.8g	サヌカイト			
19	第1区 3面 上坑状遺構	ナイフ形石器	縦6.0 横3.8 重さ 16.1g	サヌカイト			
20	第1区 3層上部	弥生土器 長瓶 壺 口縁部	復元口径 残存高	外面 表面剥離により調整不明 内面 一部ハケ	淡乳褐色	良好	
21	第1区 3層上部	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 2.1	外面 波状文、ヘラミガキ、ナデ 内面 ヘラミガキ	淡橙褐色	良好	
22	第1区 3層上部	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 1.9	外面 2条の綾杉文 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	

番号	出土地点	器種	法量(cm)	調査・形態等の特徴	色調	焼成	備考
23	第1区 3層上部	弥生土器 壺 底部	復元口径 4.6 残存高 3.0	外面 ハケ、ナデ 内面 イタナデ	暗茶褐色	良好	内面 すす痕跡
24	第1区 3層上部	弥生土器 鉢 ミニチュア	復元口径 5.2 残存高 2.1	外面 ナデ 内面 ナデ	茶褐色	良好	
25	第1区 3層上部	弥生土器 壺 口縁部	残存高 4.0	外面 ナデ、ハケ 内面 ナデ、ハケ	暗茶褐色	良好	
26	第1区 3層上部	弥生土器 壺 口縁～体部	復元口径 10.0 残存高 3.7	外面 ナデ、頸部に1条の沈線有り 内面 ハケ、ナデ	暗茶褐色	良好	
27	第1区 3層上部	弥生土器 壺 口縁～体部	復元口径 15.0 残存高 3.3	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
28	第1区 3層上部	弥生土器 壺 口縁～体部	復元口径 18.0 残存高 3.0	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
29	第1区 3層上部	弥生土器 壺 底部	底径 5.5 残存高 3.4	外面 イタナデ、ナデ 内面 刃離により不明	暗茶褐色	良好	
30	第1区 3層上部	弥生土器 壺 底部	底径 7.4 残存高 2.3	外面 ヘラミガキ 内面 刃離により不明	暗茶褐色	良好	
31	第1区 3層上部	弥生土器 高杯 杯部	復元口径 20.0 残存高 4.5	外面 ナデ、ハケ 内面 ナデ、イタナデ	暗茶褐色	良好	
32	第1区 3層上部	土製円盤	直径約 3.7	裏表ヘラミガキ	橙褐色		
33	第1区 3層上部	石包丁	残存縦 残存横 5.2 6.4	約6mmの穿孔2箇所有り			
34	第1区 3層上部	尖頭器形石器	縦8.5 横4.4 重さ 63.4g	サヌカイト			
35	第1区 3層上部	石鐵	縦8.5 横1.4 重さ 2.45g	サヌカイト			凸基無茎式
36	第1区 5層	石槍形石器	縦9.4 横3.9 重さ 55.3g	サヌカイト			
37	第1区 5層	弥生土器 広口 壺 口縁部	復元底径 22.0 残存高 5.1	外面 機括列点文、唐状文 内面 ナデ	暗橙褐色	良好	
38	第1区 5層	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 2.7	外面 線杉文 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
39	第1区 5層	弥生土器 広口 壺 口縁～体部	復元底径 22.0 残存高 5.1	外面 ヘラミガキ 内面 イタナデ	暗橙褐色	良好	
40	第1区 5層	弥生土器 高杯 ミニチュア	復元底径 5.25 残存高 3.2	外面 縦状文、ハケ 内面 ナデ	茶褐色	良好	
41	第1区 5層	弥生土器 壺 底部	復元底径 4.0 残存高 5.1	外面 ヘラミガキ、ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
42	第1区 5層	弥生土器 壺 底部	復元底径 5.8 残存高 6.0	外面 表面刃離により調整不明 内面 タ	茶褐色	良好	
43	第1区 5層	弥生土器 壺 口縁部～体部	復元底径 36.0 残存高 22.8	外面 刃み目、ヘラミガキ 内面 ナデ、ハケ	茶褐色	良好	
44	第1区 3層・5層	弥生土器 壺 口縁部～体部	復元口径 22.0 残存高 5.1	外面 ナデ、ハケ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	

番号	出土地点	器種	法量(cm)	調整・形態等の特徴	色調	焼成	備考
45	第1区 3層・5層	弥生土器 広口 壺 口縁部	復元底径 14.0 残存高 5.5	外面 縱状文 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
46	第1区 3層・5層	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 4.0	外面 縱状文、刻み目 内面 ヘラミガキ	暗茶褐色	良好	
47	第1区 3層・5層	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 1.6	外面 楠描列点文、ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
48	第1区 3層・5層	弥生土器 鉢 口縁～体部	残存高 2.4	外面 格子文、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗茶褐色	良好	
49	第1区 3層・5層	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 15.6 残存高 5.7	外面 ハケ、ナデ 内面 ハケ	灰茶褐色	良好	
50	第1区 3層・5層	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 15.6 残存高 5.7	外面 ナデ、指押さえ、ハケ 内面 ナデ、ハケ	茶褐色	良好	
51	第3区 16層	弥生土器 壺 口縁部	残存高 24.0	外面 波状文、刻み目 内面 ヘラミガキ	暗橙褐色	良好	
52	第3区 16層	弥生土器 広口 壺 口縁部	復元口径 7.1 残存高 3.8	外面 ヘラミガキ 内面 イタナデ	茶褐色	良好	
53	第3区 16層	弥生土器 壺 口縁部	残存高 5.8	外面 刻み目、指押さえ、ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
54	第3区 16層	弥生土器 壺 底部	底径 2.8 残存高 2.7	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	暗茶褐色	良好	
55	第4区 15層	弥生土器 広口 壺 口縁部	残存高 10.4	外面 縱状文、ナデ、ハケ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
56	第4区 15層	弥生土器 広口 壺 底部	復元底径 3.4 残存高 3.9	外面 ヘラミガキ、ナデ 内面 ハケ、ナデ	橙褐色	良好	
57	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁～墨部	残存高 8.2	外面 刻み目、ハケ 内面 イタナデ、ナデ	暗黒褐色	良好	
58	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁部	残存高 4.2	外面 イタナデ 内面 ハケ	橙褐色	良好	
59	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁部	復元口径 5.1 残存高 6.4	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ナデ、ヘラミガキ、ハケ	暗茶褐色	良好	
60	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁部	復元底径 13.0 残存高 3.4	外面 ハケ後ナデ 内面 ナデ、ヘラミガキ	茶褐色	良好	
61	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁部	復元底径 14.8 残存高 3.4	外面 ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
62	第4区 15層	弥生土器 壺 口縁部	底径 12.8 残存高 3.0	外面 ヘラミガキ、ナデ 内面 ナデ	暗茶褐色	良好	
63	第4区 15層	石錐	縦2.7 橫1.3 重さ 1.25g	サスカイト			円基無茎式
64	第4区 15層	石錐	縦3.2 橫1.5 重さ 2.35g	サスカイト			

3. 薩振遺跡（97-299）の調査

1. 調査地
2. 調査期間
3. 調査方法
4. 調査概要

緑ヶ丘3丁目110

平成9年7月30日～31日

専用住宅建築に伴い2m×2mの調査区を設定し、地表下約2mまで人力による掘削を行い、地層観察を中心とした調査を行った。

5. 出土遺物

調査地はT.P+6.9mを測るが、表土及び盛土は約0.2～0.4mで調査地が微高地状にあることが分かる。地表下1.3m前後の11層灰色シルト質粘土上面では調査区東南隅で12層暗灰色微砂混粘土が切り込む状況が観察された。これはおよそ1m以上続いていることから素掘り井戸の可能性をもつ。覆土の上部にはやや磨滅した瓦器片が出土していることから14世紀前半頃を下限とする時期が与えられよう。

この11層中には須恵器、土師器片がみられるが、下部層である13層明灰色粘土上面では遺構は確認されなかった。さらに地表下1.7m (T.P+5.2m) の14層灰黒色砂混粘土層中には弥生中期の壺、鉢等の部位が出土している。下部の15層緑灰色砂混粘土 (T.P+5.05m) が生活面と推定されるが、遺構を検出するにはいたらなかった。

ここでは井戸状遺構上部出土の瓦器(1)と土師皿(2)、灰黒色砂混粘土出土の弥生土器(3～6)について述べる。

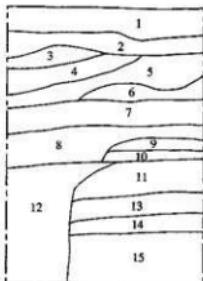
1は底部を欠失しているが、復元口径15.6cmを測る。口縁部を強くナデしており、外面に段が見受けら、体部は指押さえ。残存部分ではヘラミガキは確認できない。
2は復元口径8cm、器高1.6cmを測る。直立気味にのびる口縁端部はナデ。外面底部には指押さえがみられる。



第32図 調査地周辺図 (1/5000)

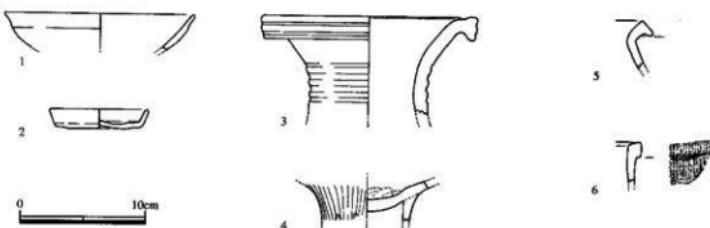


第33図 調査位置図 (1/300)



1. 灰土
2. 暗灰色砂質土
3. 淡茶灰色小標混粗砂質土
4. 茶灰色小標混砂質土
5. 淡茶灰色微砂質土
6. 暗茶灰色粘砂
7. 暗灰白色シルト混細砂
8. 淡黃褐色シルト
9. 淡茶褐色粘砂
10. 淡灰色粘質土
11. 灰色シルト質粘土
12. 明灰色暗灰色微砂混粘砂
13. 明灰色粘土
14. 灰黑色砂混粘土
15. 暗綠灰色砂混粘質土

第34図 東壁土層断面図 (1/40)



第35図 出土遺物実測図 (1/4)

3は広口壺は復元口径17.8cm、残存器高8.1cmで暗茶灰色を呈する。口縁部は下に小さく肥厚する。口縁外面に2条、頸部に3条の凹線を施している。このような凹線を施す広口壺は本地域では一般的ではなく、瀬戸内地域の遺物とみられる。4は高杯の受部底で、円盤充填を行っている。外面はヘラミガキ調整で竹管文を飾り、受部はナデ。暗茶褐色を呈する。

5の壺は体部より屈曲し、下部に肥厚する口縁もち、暗茶褐色を呈する。

6は鉢の口縁部で、外面に簾状文を施す。角閃石を含む河内の土器である。

6.まとめ
今回は2m×2mの調査区にもかかわらず弥生時代中期の遺物と中世の素掘りの井戸状遺構を検出した。本調査地の西隣には大阪府営住宅があり、昭和57年・58年にかけて1次・2次にわけて調査が行われている。この際中世遺構面はほぼ全城で確認されている。しかし、弥生時代の遺構面は古墳時代の自然河川と中世の流路によって削られており、2次調査のCトレーン東寄りで見られたに過ぎなかった。明確な遺構はⅢ様式の土器棺墓のみであったが、土器片も出土している。構築層は緑灰色～褐灰色シルトとされており、本調査の暗緑灰色砂混粘質土がこれに相当するものと考えられる。こうしたことから、弥生時代の遺構面は本調査地を含めて東寄りに遺存しているものと推定され、小さな調査区であったがこうしたことが確認できたことは成果であったといえる。

(消)

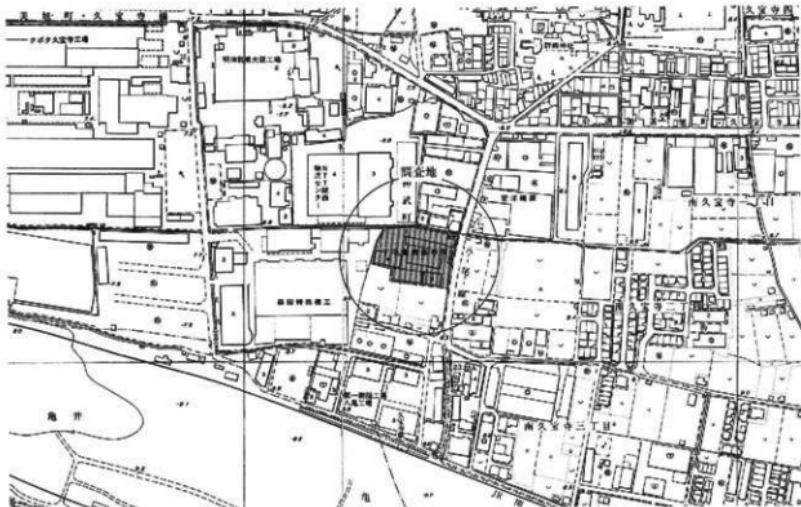
[参考文献]

大野薰『萱振遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会 1983

阪田育功『萱振遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会 1984

4-1. 久宝寺遺跡（96-641）の調査

1. 調査地 神武町79・80・81
2. 調査期間 平成9年3月13日
3. 調査方法 工場建設予定地内（現地表T.P.+7.5m）に、2m×3mの調査区を3ヶ所設定（第37図 調査区設定図参照）し、地表下約1.5mまで、重機と人力を併用して遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 第1調査区— 盛土層以下、地表下0.6mにおいて、旧耕土層が確認できた。そして、地表下0.85mにおいて、落ち込み状の遺構を確認した。出土遺物は土師器細片のみである。時期は近世のものであると考えられる。さらに、地表下1m以下は粗砂層が続き、掘削限界を超えてこの砂層が続く。
第2調査区— 現地表面直下から整地層が地表下0.9mまで見られ、さらに地表下0.9m以下は粗砂とシルトの互層状の堆積がある。これらの層からは、遺物は出土していない。河川堆積層の上面であると考えられる。
第3調査区— 第1調査区で見られた旧耕土面は確認できず、第2調査区と同様に盛土層直下に暗褐色～明褐色シルト質粘土の整地層が地表下0.7mまで続く。そして、地表下0.7m以下には粗砂層があり、今回掘削した地表下1.5m以上は続くと考えられる。この粗砂層からは、須恵器壺片や土師器片が出土している。
5. まとめ 今回の調査では、顕著な遺構等は確認できなかつたが、3調査区すべてで地表下1m前後以下に古墳時代中期～後期の遺物を含む粗砂層の堆積が見られた。この堆



第36図 調査地周辺図 (1/5000)

積層は、調査区全域に広がる幅30m以上の河川の堆積層と考えられ、その層厚は少なくとも1m以上はあると考えられる。

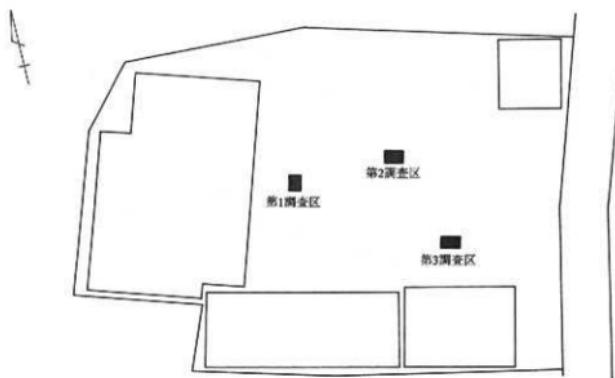
この河川の方向は、今回の調査範囲では判然としないが、おそらく南東から北西へと流れる河川であったと推測される。この付近では、古墳時代以降の自然流路が多く存在していたと考えられ、特に、本調査地の南方ではJR久宝寺駅の発掘調査で検出された古墳時代の「堰」と河川（後藤1996）がある。今後周辺の調査によって、これらの河川の方向や規模を明らかになることを期待したい。

(藤井)

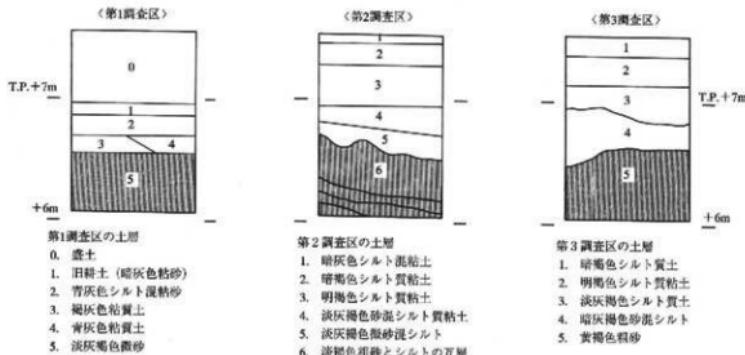
[参考文献]

後藤信義 1996『久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書』

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集



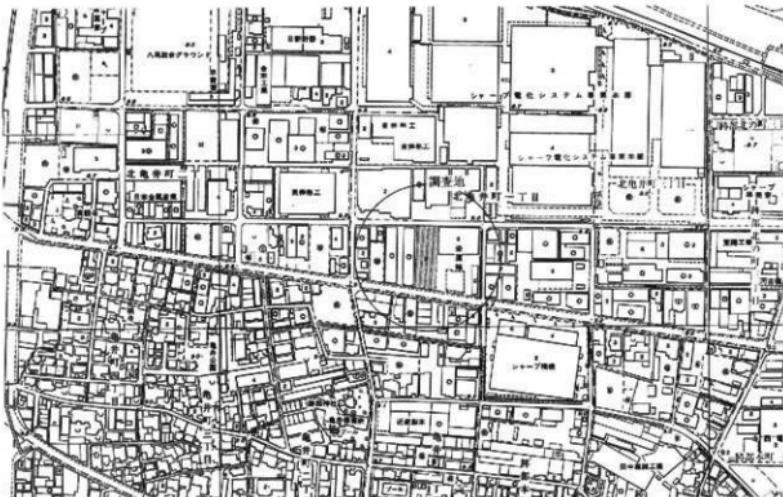
第37図 調査区設定図 (1/800)



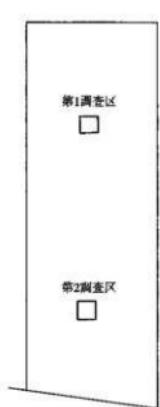
第38図 土層模式図 (1/40)

4-2. 久宝寺遺跡（97-298）の調査

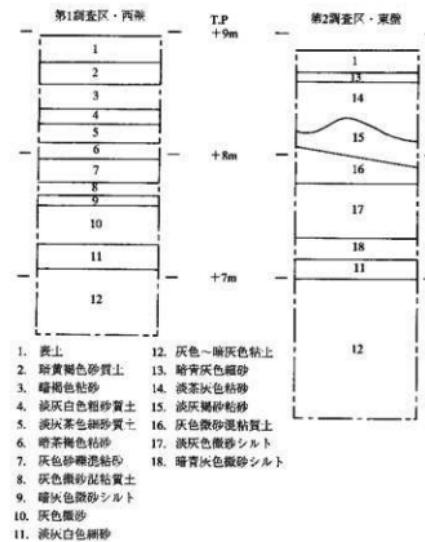
1. 調査地 北龜井町1丁目42番地1
2. 調査期間 平成9年7月29日
3. 調査方法 事業計画地に3m×3mの調査区を2か所に設定し、北側を第1調査区、南側を第2調査区とした。そして、各々地表下2.5m～3mまで掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。現況は畑作地で、第1調査区は北側道路とほぼ同レベルであったが第2調査区付近では南側道路面とは0.5m低くなっている。
4. 調査概要 第1調査区・・地盤高T.P.+8.97mで、表土以下黄褐色系の砂質土～灰茶色系の粘砂が約1.2m堆積している。包含層はT.P.+7.75m前後の灰色微砂混粘質土で、平瓦・土師皿・瓦器等が含まれている。そして、その下部層であるT.P.+7.66m暗灰色微砂シルト上面で南北方向の畦畔状遺構と共に平行する杭列を検出した。畦畔幅25～28cmで、東側に細砂を埋土とする流路があり、西側は耕作土とみられるがここにも遺物が若干含まれている。遺構面以下では湧水層となる微砂～細砂が0.55mの厚さで堆積しており、洪水砂あるいは河川内堆積土と思われる。
5. 出土遺物 第2調査区・・地盤高はT.P.+8.87mで、表土以下の堆積土は第1調査区とは異なり、淡茶灰色系の粘砂がみられる。遺物は地表下約0.8m (T.P.+8.07m) の灰色微砂混粘質土で、土師器の極細片が出土したが、下部層では遺構を確認することはできなかった。
(1) 土師皿（復元口径7.7cm・器高1.6cm）と(2) 平瓦（凸面斜格子文タタキ〈はなれ砂〉、凹面ナデで重ねたときの凸面のタタキが残る）と(3) 平瓦（凸面斜格子文タタキ〈はなれ砂〉、凹面ナデ）が灰色微砂混粘質土から出土した。(4) 須



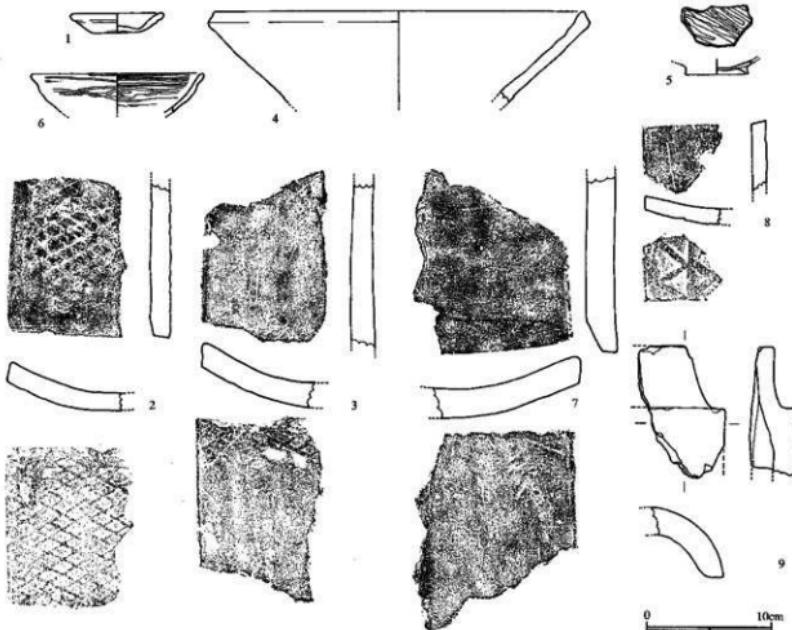
第58図 調査地周辺図 (1/5000)



第40図 調査位置図 (1/800)



第41図 土層断面図 (1/40)



第42図 出土遺物実測図 (1/4)

恵質の練鉢（復元口径31.2cm）、(5) 瓦器椀（底部径5.2cm）、(6) 瓦器椀（復元口径13.9cm）と平瓦（7）（凸面板状工具によるナデ、凹面2次焼成により表面剝離しているがナデ）と(8)（凸面斜格子文タタキ（(2)・(3)よりも大）、凹面ナデ）、そして(9)玉縁を持つ丸瓦（2次焼成の痕跡有り）が暗灰色微砂シルトから出土した遺物である。これらの遺物から時期を推定するのは困難であるが瓦器椀と土師皿から凡そ13世紀後半から14世紀前半とみられる。

6. まとめ

今回は13世紀～14世紀の杭列とともに添った畦畔状遺構を検出した。出土遺物では瓦類が目をひく。調査地周辺はかつて専光寺町と呼ばれ、片岡紫峰の『中河内郡廃寺』（大正13年）には「真宗大谷派に属し村の中央に在りしが、近年廃寺となれり。百三十三坪の寺域を有せり、開基創建不詳。」とある。また、調査地から北西約200mには畠山氏が建てたと伝えられる釈迦寺の跡とされる土段状の塚があり、さらに西350mには応永年間（1394～1428）に畠山満家の発願によって創建されたと伝えられる薩濟宗南禪寺金地院末の真觀寺が存在する。出土遺物などから真宗寺院のとしての専光寺とは直接の関係を考えることはできないが、真宗がはいる以前の別宗派としての専光寺あるいは専光寺成立以前の寺院がこの調査地に存在していたと推定できる。今回の調査では十分な遺構と遺物を見つけることはできなかったが、今後これらの遺構が見つかる可能性は十分にあると思われる。

（消）

5. 郡川遺跡（96-691）の調査

1. 調査地

郡川5丁目24番地の一部

2. 調査期間

平成9年2月27日・8月7日

3. 調査方法

事業計画地に約 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を設定し、地表下0.7mまで掘削した。その結果、古墳時代の遺構・遺物を検出した。このため建物については設計変更の協議を行い、浄化槽部分については掘削時に調査を実施することとした。ここでは最初の調査区を第1調査区、浄化槽部分を第2調査区として報告する。

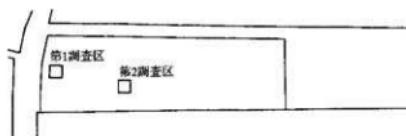
4. 調査概要

第1調査区・現況地盤高T.P+約40.96mで、最近まで畑作地として利用されていたが、いまでは若干の盛土がなされている。遺物包含層は畑作地下0.45mの淡灰茶色砂質土以下で土師器盤底部(1)・須恵器杯(2)が出土している。また0.63m(T.P+40.33m)暗茶灰色礫混砂質土では円形の土坑を検出した。土坑は一部が調査区外にのびるが長径1.02m、短径は推定で0.75m前後、深さは約7.5cmを測る。埋土は暗灰色粘砂で、土師器片が出土している。この遺構検出面のベース層では弥生時代後期の壺底部と口縁部(3・4)が出土しており、同時期の遺構が周辺に存在したものと推定される。

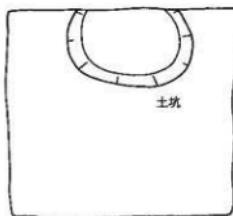
第2調査区・ここでは地表下2mまで掘削し、土層観察を中心とした調査を行った。地表下0.6mで第1調査区⑤層に対応するとみられる土層があり、土師器・須恵器片が細片であるが含まれている。そして下部の灰茶色礫粘砂上面で、深さ10cm前後の土坑状の掘り込みを確認した。暗茶灰色粘砂を埋土とし、弥生時代後期に位置づけられる高杯脚柱部(5)が出土している。上部の包含層とは時期が異なることから弥生時代後期以降に上層部分が削平を受けていると推定される。



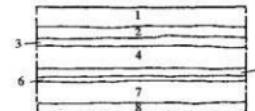
第43図 調査地周辺図 (1/5000)



第44図 調査位置図 (1/800)

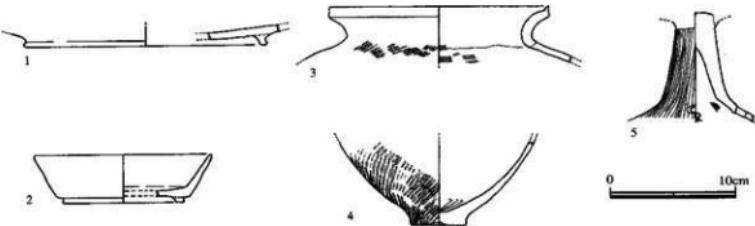
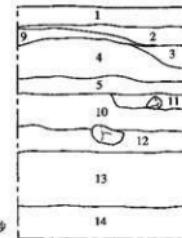


第45図 第1区遺構平面図 (1/40)



1. 表土
2. 淡褐色砂質土 (堆作土)
3. 淡褐色砂質土
4. 淡灰白茶色砂質土
5. 淡灰茶色砂質土
6. 灰白色細砂
7. 茶灰色砂質土
8. 結茶灰色礫混砂質土
9. 明褐色砂質土
10. 灰茶色礫混砂
11. 細茶灰色粘土
12. 灰白茶色粘土
13. 流黃褐色粘土 + 灰褐色粘土
14. 淡茶褐色微砂質土

第46図 土層断面図 (1/40)



第47図 出土遺物実測図 (1/4)

5. 出土遺物

1 土師器盤は復元底部径19.8cmで、高台は外方に肥厚する。底部外面はヘラナデ内面は調整不明。2 須恵器杯は復元口徑14.6cm、器高は3.9cm。底部に回転ヘラケズりが確認される。高台は杯部屈曲部の内側にある。

3 の甕は復元口徑18.2cmで、暗茶褐色を呈する。口縁端部はつまみあげられ、小さな面を作る。外面はタタキ、内面はナデを施す。4 は底部径4.6cmで、暗茶褐色を呈する。外面はタタキ、内面はていねいにナデしており、底部はヘラによる調整痕が残る。5 の高杯脚柱部は外面はヘラミガキ、内面にハケメを施し、裾部が緩やかに広がっており、裾上部に穿孔を行っている。

6. まとめ

出土遺物でとくに2の須恵器杯より8世紀中頃の時期が考えられる。この時期は平野部でも遺構は検出されているが、それらの性格的な位置付けとなると明瞭にはされていない。今回の調査は遺構を検出してないが、高安山において人的な活動があったことを示している。

山手では調査は少ないが、新たに弥生時代後期の遺構が検出されたことはその生活圏の広がりを考える上で資料を提供できるものといえよう。

(道)

6. 小阪合遺跡（97-175）の調査

1. 調査地 青山町4丁目204
2. 調査期間 平成9年6月9日
3. 調査方法 分譲住宅建設に係る人孔設置工事に伴い、2m×3mの調査区を東西に2か所設け、地表下1.6m～1.8mまで重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 現況地盤は道路地盤とほぼ同じレベルであり、第1・第2調査区とともに、地表下1.0mまでは盛土および旧耕作土であった。
- 第1調査区 地表下1.4mで直径約40cmのピットを検出したが、遺物は少量で中世以降の攪乱と考えられる。また、地表下1.4～1.55mの黄褐色弱粘質土層には土師器が含まれ、地表下1.55～1.65mの暗黄褐色弱粘質土層内からは土師器・弥生土器が出土している。
- 第2調査区 地表下1.25m～1.5mの黄褐色弱粘質土層上層では土師器・須恵器が出土し、また地表下1.5m～1.6mの暗褐色粘質土層内からは、庄内式土器およびV様式系の弥生土器が出土する。
5. 出土遺物 図化できた遺物は、第2調査区で5点あり、いずれも暗褐色粘質土層から出土した遺物である。1・2は庄内式土器の壺で、内面はヘラケズリ、口縁部外面はナデ調整が施され、体部外面はタタキがみられる。3は高杯の杯部で、磨滅が激しいが、外面ハケ調整である。4・5は、弥生土器のV様式系の壺の底部で、外面にタタキがみられる。
- 6.まとめ 第1・第2調査区とともに、明確な造構は検出できなかったが、それぞれ対応すると考えられる、古墳時代後期および弥生時代後期～古墳時代前期の、2時期の



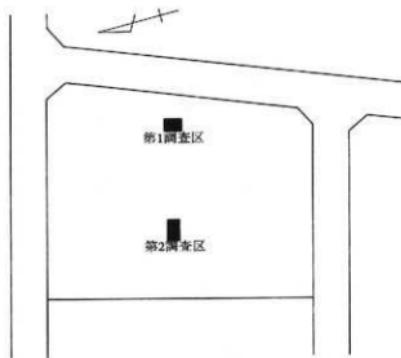
第48図 調査地周辺図 (1/5000)

遺物包含層が確認できた。本調査区の南東の調査では庄内期の住居址などが検出されており、これに続く集落域の一部であると考えられる。 (吉田珠己)

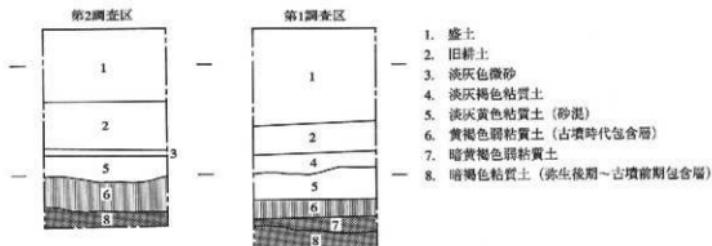
〔参考文献〕

(財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡(第19次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」

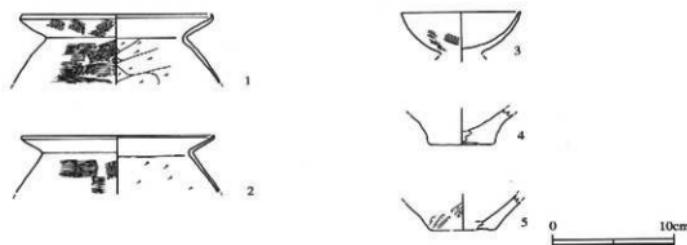
1993年



第49図 調査位置図 (1/800)



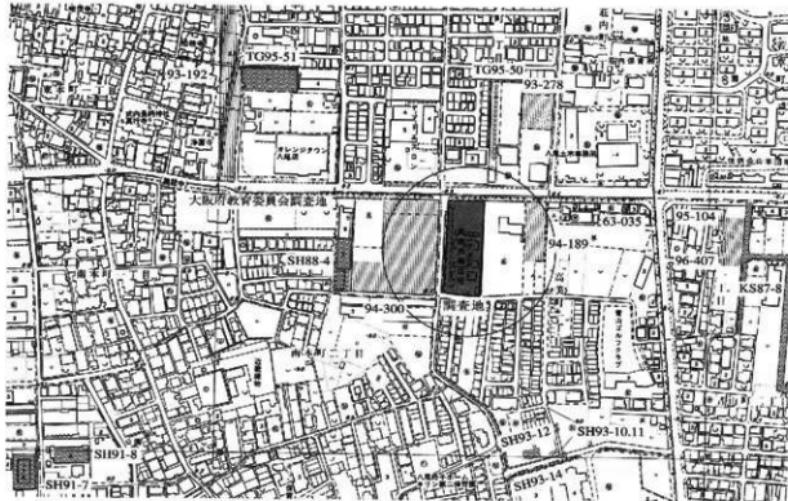
第50図 土層断面図 (1/40)



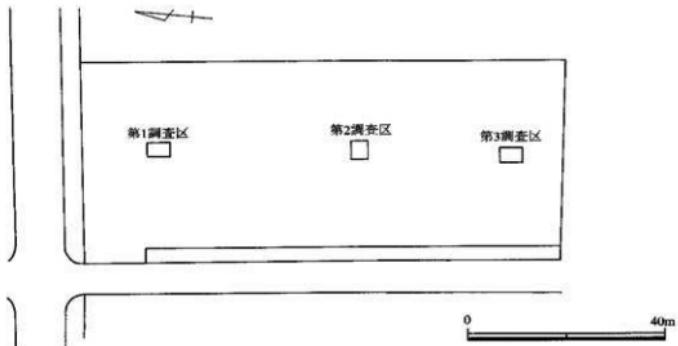
第51図 出土遺物(第2調査区)実測図 (1/4)

7. 成法寺遺跡（97-156）の調査

1. 調査地 高美町1丁目37-1・38-1
2. 調査期間 平成9年6月19日・23日
3. 調査方法 社員寮建築に先立ち、計画予定地内における遺構・遺物の有無等の確認のために南北方向に30m~40m間隔で3ヶ所の調査区を設定し、それぞれ重機と人力を併用して調査を行った。
4. 調査概要 第1調査区 計画予定地内北側の調査区で、東西3m×南北4.7mの範囲で、地表下約3.4mまでの調査を行った。現地表面（T.P.+8.8m）から地表下1.4mまでは盛土層（T.P.+7.4m）が続く。そして、旧耕土層（暗灰色砂混シルト）が約0.15mの層厚で確認できる。以下、地表下1.55mの暗青灰色シルトにかけて、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の細片が少量出土している。
以下、地表下2.7m（T.P.+6.1m）までは、顕著な遺構・遺物等は確認できなかつた。そして、地表下2.7m~2.9m（T.P.+6.1m~5.9m：層厚約0.2m）の灰色粘土質シルトから弥生時代中期の土器片が出土している。この層は、植物遺体を含んでおり、遺物量もさほど多くないものの、南側2ヶ所の調査区の状況から弥生時代中期の遺物包含層に対応する層と考えられる。
そして、地表下2.9mから3.4m（T.P.+5.9m~5.4m）までは、シルトと微砂が互層状に堆積する河川堆積層（青灰色シルト混粗砂）が続き、以下、この層が続くようであった。今回の掘削範囲内では、その河床は確認できなかつた。また、出土遺物は確認できなかつたものの、時期については、弥生時代中期以前の自然流路であると考えられる。



第52図 調査地周辺図（1/5000）



第53図 調査区設定図 (1/1000)

第2調査区 今回の調査区では中央部分にあたり、東西3.6m×南北3.6mの範囲で、地表下約3.5mまでの調査を行った。現地表面 (T.P.+8.72m) から地表下1.25m (T.P.+7.47m) までは盛土層が続く。そして、旧耕土層（暗褐色シルト）が約0.1mの層厚で確認できた。

以下、地表下1.8m～2.0m (T.P.+6.92m～6.72m : 層厚約0.2m) の暗灰褐色粘土質シルトにおいて、弥生土器の破片が出土しており、何らかの遺構の覆土の可能性が高いが、その性格等は確認できなかった。出土した土器は、そのほとんどが破片であったが、2点を図化できた（第55図：1・2）。時期は弥生時代後期のものであろう。出土遺物から、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層である可能性が高い。

そして、地表下2.9m～3.35m (T.P.+5.85m～5.4m : 層厚約0.45m) にかけては、黒灰色小礫混粘質土が続き、多数の弥生土器片やサヌカイト剝片が出土している（第55図：2～6）。この層は、出土遺物から弥生時代中期の遺物包含層であると考えられる。

そして、地表下3.35mから3.5m (T.P.+5.4m～5.25m) まで河川堆積層（淡灰色粗砂）が続き、以下、この層が続くようであった。今回の掘削範囲内では、その河床は確認できなかった。また、出土遺物は確認できなかったものの、時期については、弥生時代中期以前の自然流路であると考えられる。第1調査区で確認した河川堆積層に対応するものと考えられる。

第3調査区 今回の計画予定地内では、南端の調査区で、東西3m×南北4.7mの範囲を、地表下約3.1mまでの調査を行った。第3調査区では、第2・3調査より盛土層が少なくなっており、現地表面 (T.P.+8.62m) から地表下0.8m (T.P.+7.82m) までは盛土層となる。そして、旧耕土層（暗褐色シルト）が約0.25mの層厚で確認できた。

そして、第2調査区で確認した弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層に対応

すると考えられる層（褐灰色粘性シルト）を地表下1.6m～1.75m（T.P.+7.02m～6.87m：層厚約0.15m）において確認している。

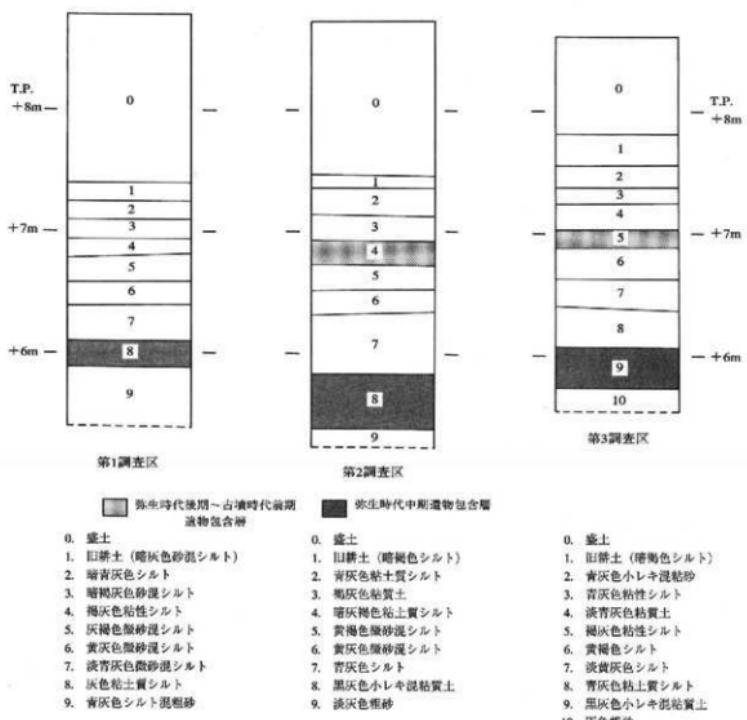
さらに、地表下2.55m～2.9m（T.P.+6.07m～5.72m：層厚約0.35m）においては、第2調査区で確認した弥生時代中期の遺物包含層に対応する黒灰色小礫混粘質土を確認している。この層からも、第2調査区と同様に弥生土器片やサヌカイト剥片（第55図：7～18）が多数出土している。

以下、地表下2.9mから3.1m（T.P.+5.72m～5.52m）まで河川堆積層（灰色粗砂）が続き、以下、この層が続くようであった。今回の掘削範囲内では、その河床は確認できなかった。出土遺物は確認できなかったものの、時期については、第1・2調査区と同様に弥生時代中期以前の自然流路であると考えられる。

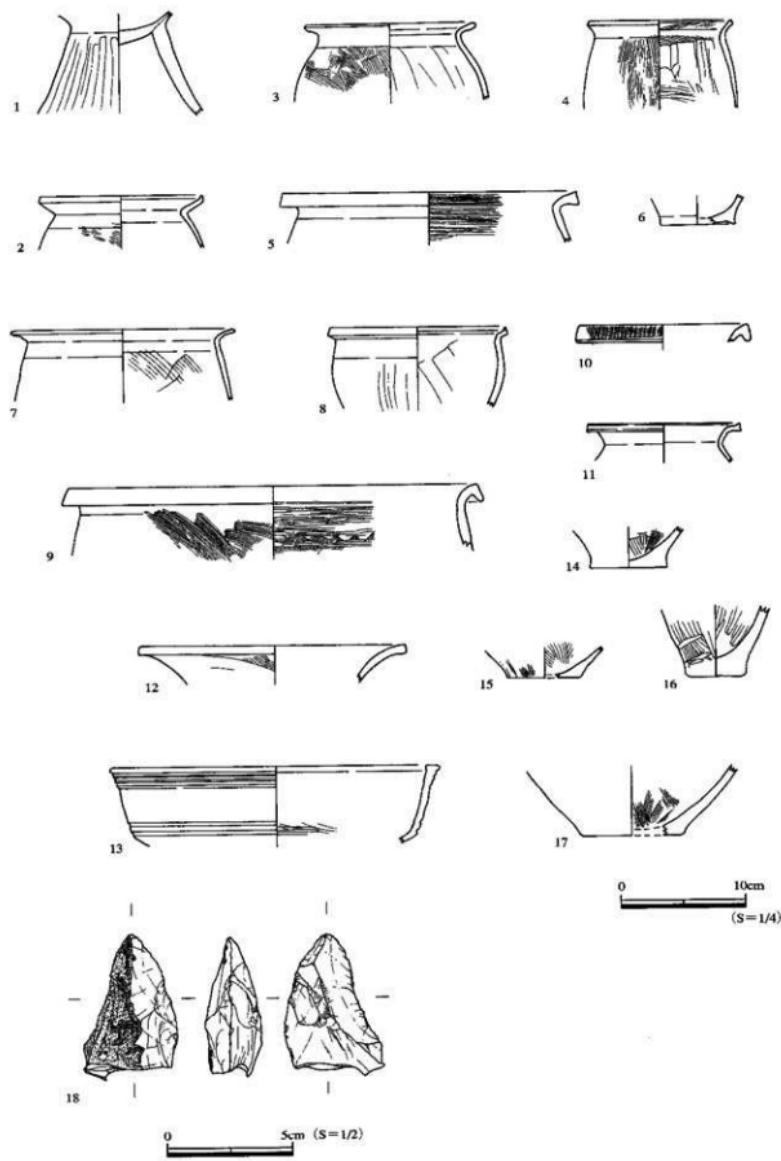
5. 出土遺物

先述したように、今回の調査では遺構に伴う遺物は確認できず、すべて遺物包含層の出土の遺物である。第1調査区においては、図化できるものではなく、第2・3調査区の出土遺物を中心として、18点を図化した。

第2調査区の出土遺物 1～6が、第2調査区の出土遺物である。1・2は、弥生時代後期（V様式）から古墳時代初頭の遺物包含層である暗灰褐色粘土質



第54図 土層模式図（1／40）



第55図 出土遺物実測図（1～6：第1調査区・7～18：第2調査区）

シルトの遺物である。1は、壺底部に付くと考えられる脚部状の部位である。外面は、やや摩滅しているものの、おそらくタテ方向のナデ調整であると考えられる。色調は、淡茶褐色を呈す。2は、壺の口縁部で、外面調整にはタタキの痕跡を残し、そして口縁部は端部をつまみあげる形状となる。

3～6は、弥生時代中期（IV様式）の遺物包含層である黒灰色小砾混粘質土の遺物である。3・4は、壺の口縁部である。3は、外反する口縁に、端部を丸く治める形状である。肩部からやや膨らみ気味の体部をもち、外面はハケを施す。4は、短めの口縁で、あまり外反しない。外面は縱方向のハケを施す。5は、大型壺で、短く外反する口縁の破片である。6は壺の底部の破片である。

第3調査区の出土遺物 7～18が、第3調査区の遺物で、すべて弥生時代中期（IV様式）の遺物包含層である黒灰色小砾混粘質土の出土である。7は壺の口縁部の破片で、口縁部は短く外反する。8は壺もしくは小型の鉢の破片で、口縁部を短くつまみあげる。9は大型壺のやや垂下する口縁部で、外面はヘラミガキを施す。10は、口縁部に簾状文を施した広口壺の口縁部である。11は、外反する口縁部をもつ広口壺の口縁部である。12は、残存している部位が少ないものの、広口壺の口縁部であると考えられる。13は、大型の高杯の杯部の破片で、凹線を施す。14～17は底部の破片である。18は、サスカイト製の刃器である。

6.まとめ

今回の調査地は、「成法寺遺跡」に属しているものの、東西に走る府道平野中高安線を境にして北側には東郷遺跡、南北に走る府道八尾道明寺線を境にして東側には小阪合遺跡・中田遺跡と、八尾市内でも遺跡の集中する地域に位置している。これまでに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会によりこれら遺跡での多くの発掘調査が行われており、弥生時代中期から古墳時代前期・中世・近世にいたる遺構・遺物が検出されている。そして、今回の遺構確認調査でも、以下のような成果が得られた。

1. 第2・3調査区で確認したように、T.P.+7.0m前後（調査区全域ではなく地表下1.8m前後）において、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層が広がっている。その層厚は約0.2mであった。ただし、この遺物包含層の時期は、周辺の既往の調査から古墳時代前期の遺物包含層・遺構面である可能性がある。

2. 第1・2・3調査区すべてで確認した弥生時代中期（第IV様式）の遺物包含層は、やや層厚に幅があるものの、T.P.+6.0m～5.4m前後（調査区全域ではなく地表下2.5～3.3m前後・層厚約0.5m前後）において、調査区全域に厚く堆積しており、何らかの遺構が存在していると考えられる。

今回と同様の成果は、平成6年度に今回の調査区に隣接する西側で行った調査（[八尾市教育委員会1995]）においても、確認されている。また、調査区北東の府道拡幅工事に伴う発掘調査では、弥生時代中期の方形周溝墓（T.P.+約6.4m：[大阪府教育委員会1989]）が検出されている。このことからも、弥生時代中期における「成法寺遺跡」の集落域・墓域がかなりの範囲に広がることを予想され、今後の調査で集落域の性格が明らかになることを期待したい。

3. 弥生時代中期の遺物包含層の下層は、中期以前の河川堆積層が広がり、その河床の深度は不明であるものの、調査区全域に広がることを確認できた。流路

の方向・幅等は、今後の調査によって明らかになるだろう。

以上の結果から、本調査区域においては、少なくとも弥生時代中期の遺構面と、
弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面の2時期が存在していることがわかり、お
そらく該期の集落域が調査区全域に広がっていると考えられる。

(藤井)

〔参考文献〕

大阪府教育委員会 1986・1987・1989・1990・1992・1994

『成法寺遺跡発掘調査概要 I・II・IV・V・VI・VII』

1995 「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要VIII」

1997 「東郷・成法寺遺跡発掘調査概要IX」

(財)八尾市文化財調査研究会 1991 「成法寺遺跡 第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書」

1996 「東郷遺跡第50次調査(T G95-50)」

『平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

八尾市教育委員会 1995 「成法寺遺跡(94-189)の調査」

「成法寺遺跡(94-300)の調査」

『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書I』

8. 神宮寺遺跡（97-49）の調査

1. 調査地

神宮寺5丁目184番の一部

2. 調査期間

平成9年4月24日・6月3日（浄化槽部分立会）

3. 調査方法

コンビニエンスストア建築に先立ち、計画予定地内の南北2ヶ所に2m四方の調査区を設定し、地表下約1.2mまでの遺構確認調査を行った。さらに、浄化槽設置箇所（東西2.6m×南北1.6m）について、工事着工時に立会調査を行った。なお、北側の調査区を第1調査区とし、南側を第2調査区、浄化槽設置箇所を第3調査区とする。

4. 調査概要

第1調査区 現地表面は、畠地として使用されていた（現地表T.P.+15.4m）。そのため、地表下0.2mまで耕土層が続く。そして、地表下0.2m～0.5mの淡灰褐色粘質土に、少量の土師器小片が出土している。

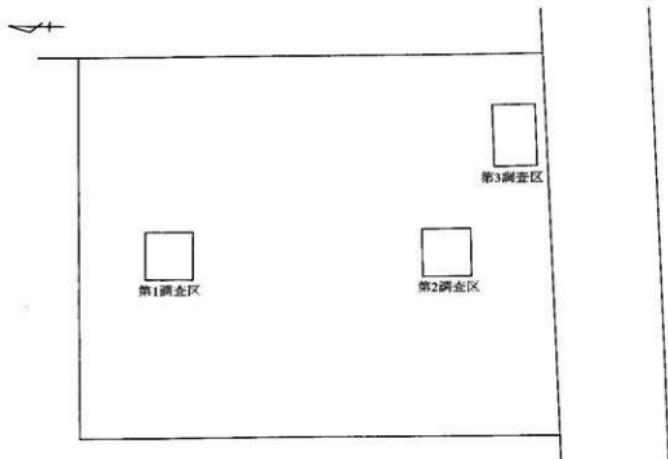
続いて、地表下0.5m～0.7mの暗褐色小レキ混粘質土からは、奈良時代以前の土師器（杯など）・須恵器（壺・杯蓋など）の小片が出土している。以下、地表下0.7m～1.2mの茶灰褐色砂混粘質土・褐灰色砂混粘質土まで、遺物は出土していない。

第1調査区では、全体に攪拌されたような土層で、しまりがなく、遺物は含まれているものの、遺構等は検出できなかった。

第2調査区 現地表面は、第1調査区と同様に畠地として使用されており、地盤高もほぼ同じであった（現地表T.P.+15.4m）。地表下0.16mまで耕土層が続く。以下、地表下0.16m～0.68mの淡灰褐色粘質土では、遺構・遺物を確認できなかった。



第56図 調査地周辺図（1/5000）



第57図 調査区設定図 (1/200)

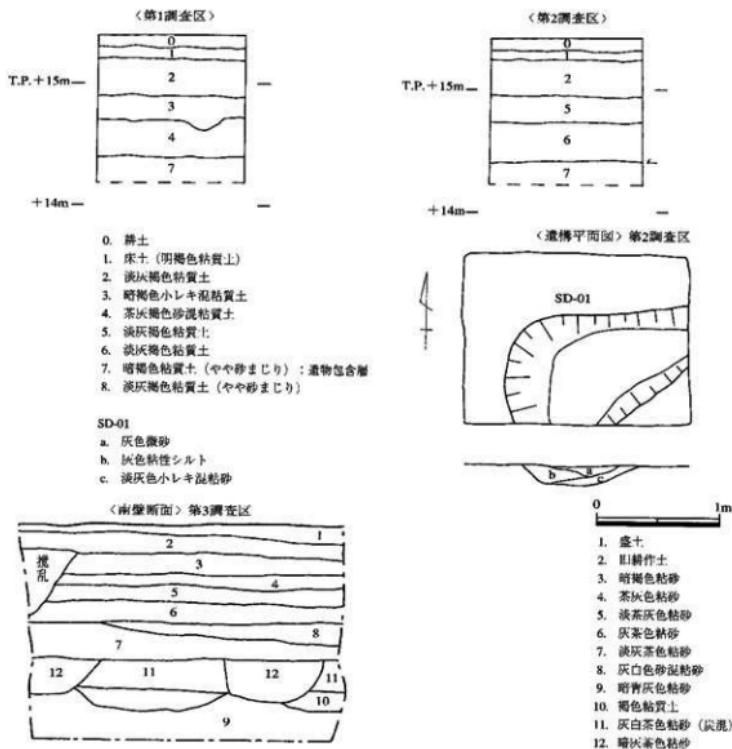
統いて、地表下0.68m～1.0mの暗褐色砂混粘質土（T.P.+14.74m～14.42m：層厚約0.3m）が遺物包含層と考えられ、奈良時代を中心とした土師器（皿・杯・高杯・羽釜など）・須恵器（壺・杯など）の破片が多数出土している。その他に、古墳時代後期の須恵器や弥生土器の破片も出土している。

そして、地表下1.0m（T.P.+14.42m）の淡灰褐色砂混粘質土が遺構面となり、溝（[S D 0 1]）を1条検出している。調査区の南壁から東壁へと続く溝で、検出したのは、ちょうどその屈曲箇所であったと考えられる。幅約0.5m～約0.85m、深さ0.15mを測り、断面は逆台形の溝である。埋土は、下層から淡灰色小レキ混粘砂・灰色粘性シルト・灰色微砂である。溝内の出土遺物は、土師器には、皿・杯身・杯蓋・壺・鉢付壺があり、須恵器には、壺・杯・碗などがある。その他、製塩土器などが出土している。これらすべて破片であった。

遺構面ベース層以下は、青灰色粘質土が続くことを一部確認している。

第3調査区 地表下0.85m前後にある淡茶灰色粘砂は須恵器の壺胴部の小片や土師器片が出土していることから古墳時代後期以降の包含層とみられる。なかでも（10）の須恵器片の内面には軒丸瓦の連弁を思わせる当て具が用いられている。こうした意匠が軒丸瓦からとられると仮定すれば内区と外区の関係から7世紀後半の時期が推定されるが、現状では断定できない。この包含層の下部には灰白茶色粘砂をベースとして暗灰茶色粘砂を埋土とする掘り込みが確認でき、土師器や須恵器の細片が出土している。

また、ベース層中には外面にタタキをもつ壺片や口縁が口縁部をタタキ成形によって作り出している壺片が出土しており弥生時代末期から古墳時代前期の遺物包



第58図 土層断面図・遺構平面図 (1/40)

含層となっている。そして下部の暗青灰色粘砂では褐色粘質土を埋土とする深さ1.7cm前後掘り込みがみられた。

さらにこの暗青灰色粘砂中には縄文土器片や土師器細片が含まれていたが、地表下1.6m付近で偏平な石の上面に加工木が載っている状態が観察されたが、須恵器片1点も見つかっていることから、切り込み面は分からなかったが、上部層すなわち古墳時代後期の面からの遺構と推定される。

5. 出土遺物

南北2つの調査区及び浄化槽設置箇所より、多数の遺物が出土している。第1・第2調査区については、遺構・遺物包含層とも奈良時代の遺物を中心としている。その中で、第2調査区の出土遺物が、9点(1~9)図化できた。そして、第3調査区では、1点(10)が図化できた。

(1~5)が、溝〔SD 01〕に伴う遺物である。(1~4)が土師器、(5)が須恵

器である。(1)は、杯Bの蓋の破片で、復元径27cmを測る。内外面のミガキは確認できなかった。(2)は、杯Aの破片で、復元径18cmを測る。口縁端部はほとんど肥厚しない形状であった。(3)は、外反する口縁の杯Aの破片で、外面は横方向のミガキで、内面は、放射暗文を確認できた。(4)は、杯Cの破片で、復元径12cmを測る。内外面ともミガキは施されていなかった。(5)は、杯の口縁部の破片で、復元径16cmを測る。これら出土遺物から、すべて破片であるが、奈良時代の遺物が含まれており、奈良時代の中頃（8世紀中葉）の遺構であると考えられる。

(6~9)が上記の遺構面に対応する奈良時代の遺物包含層である暗褐色砂混粘質土の遺物である。すべて須恵器である。(6)・(7)は、杯Bの破片である。(8)は、壺の口縁部である。(9)は、壺の底部の破片と考えられる。

6.まとめ

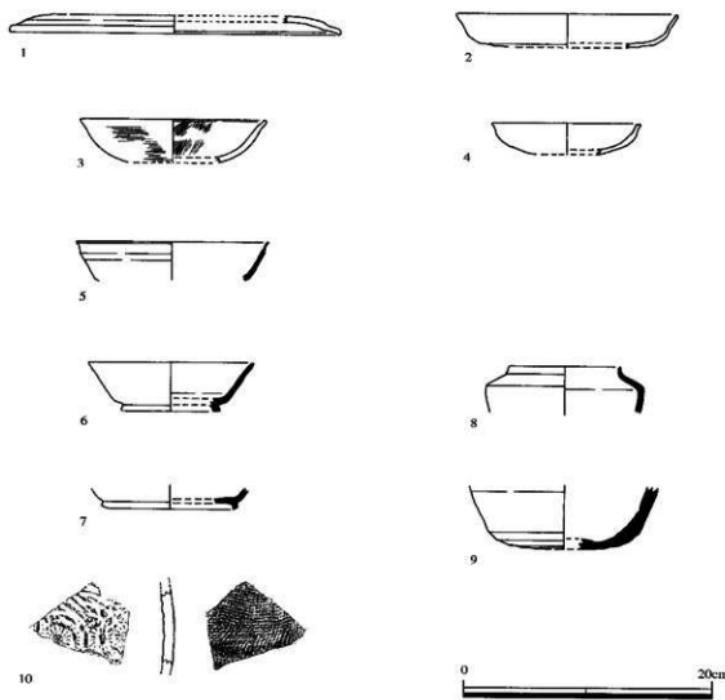
今回の調査では、地表下1.0m付近(T.P.+14.4m前後)において、奈良時代中頃の遺構面を検出できた。これは、今回の調査区から南西約40mの地点で実施された大阪府教育委員会による発掘調査(山上1994)でも同様の時期の遺構面が検出されており、この周辺に奈良時代の遺構が広がっていることを示している。これは、平安時代の創建されたとされ、遺跡の名称でもある「神宮寺」跡との関連、さらには式内社である「常世岐姫神社」との関連が注目される。

また、調査区東約30mの地点では、(財)八尾市文化財調査研究会(岡田1997)により発掘調査が行われている。この調査地は、現在の「常世岐姫神社」に隣接している。弥生時代中期から室町時代にかけての多くの遺構を検出しているが、奈良時代ごろの遺構面は確認していない。今回の調査区とは、現地表面のレベル高で約1mほど高いところにあり、奈良時代以降に遺構面が削平を受けたものか、あるいは地形的な関係があると考えられる。そして、第3調査区で確認した弥生時代末期~古墳時代前期の遺物包含層及び(財)八尾市文化財調査研究会調査の弥生時代中期の遺構が、下層において多数存在している可能性がある。今後周辺での調査においても留意すべきであろう。

(第1・2調査区・まとめ 藤井／第3調査区 潟)

〔参考文献〕

- 八尾市史編集委員会編 1988『八尾市史(前近代)本文編』
山上 弘 1994『神宮寺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
岡田清一 1997『神宮寺遺跡第1次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告57』



第59図 出土遺物実測図（1／4）：第2調査区1～9・第3調査区10

9. 太子堂遺跡（97-441）の調査

1. 調査地
2. 調査期間
3. 調査方法
4. 調査概要

八尾市太子堂4丁目1-1の一部

平成9年10月15日

施工予定地内の西と東に2.5m四方の調査区を設定し、地表下3.0m前後まで重機と人力を併用して掘削した。

西側調査区では地表下2.24m (TP + 7.3m) 以下で、布留式土器片を含む灰青色及び暗灰緑色の粘土層を確認した。これらの土層は有機物を含む。灰青色粘土層には、暗灰色と暗灰緑色の粘土がブロック状に含まれていた。

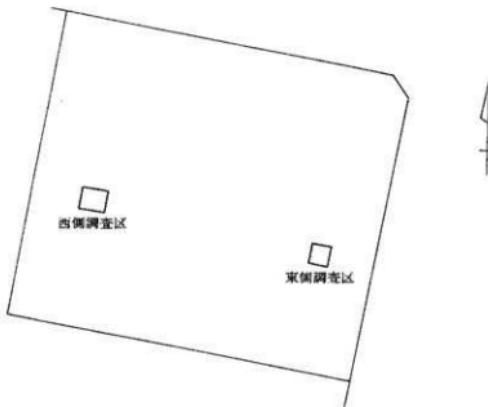
東側調査区では地表下2.04m (TP + 7.56m) 以下で、これと対応する灰色有機物混粘土層とこれに挟まれた灰緑色微砂層を確認した。この土層は灰緑色及び灰色の粘土をブロック状に含む。ここでは布留式土器片は、少量であった。また、西側調査区では地表下1.25~1.5mで土師器片、瓦器片を少量確認した。東側調査区では、地表下1.22~1.4mの灰青茶色粘砂層で土師器小片を、その下の地表下1.4~1.6mの灰茶褐色粘土層で土師器と瓦器の小片を確認した。

ここで確認した布留式土器片を含む古墳時代前期の包含層は、一部、粘土がブロック状に含まれている部分があるものの、有機物を含むこと、微砂層が挟まれていること等、低湿地状の堆積ともみえる。さらに明確な遺構面を確認することができなかった。東側に近接する位置での調査でもこれと対応する土層が確認されているが、沼沢地ではないかと考えられている。が、調査地北東側の近接位置での調査では古墳時代前期の遺構面が確認されており、本調査地での遺跡の性格は、判然としない。今後の調査データの増加を待ちたい。

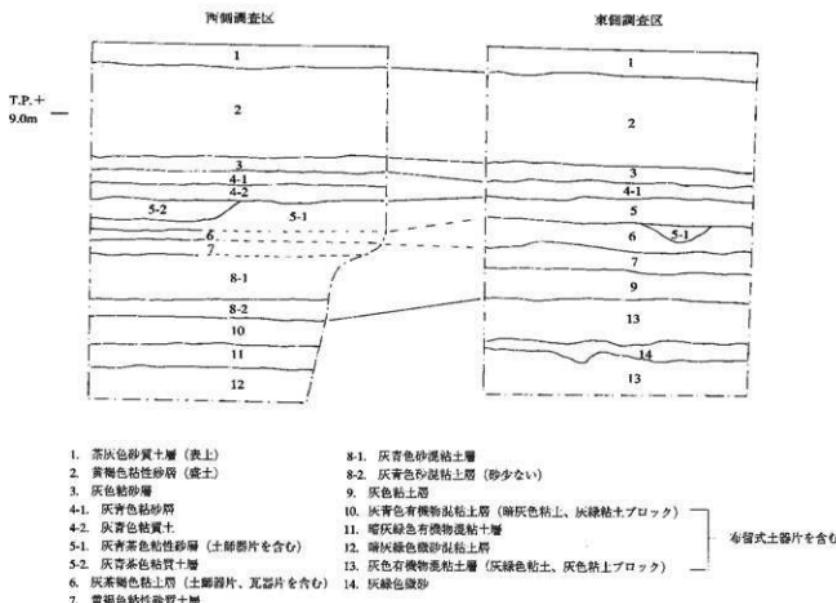
(吉田野々)



第60図 調査地周辺図 (1/5000)



第61図 調査区設定図



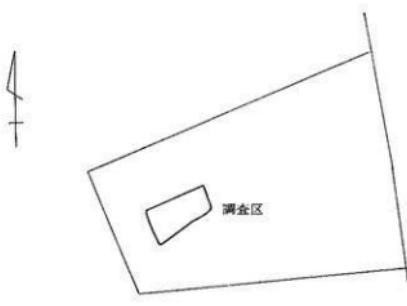
第62図 調査区土層断面図 (1/40)

10. 東郷遺跡（96-768）の調査

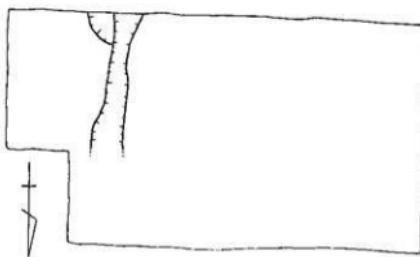
1. 調査地 八尾市桜ヶ丘2丁目223
2. 調査期間 平成9年3月25日
3. 調査方法 施工予定地内の西寄りに東西5.0m、南北3.0mの調査区を設定し、地表下2.7m前後まで重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 地表下1.7m、TP+7.24m前後の茶灰色砂質土A層上面で、茶灰色粘性砂質土層等を埋土とする土坑状遺構を確認した。さらにその下の地表下2.0m～2.3mで瓦質羽釜片を含む茶灰色砂質土C層を確認した。さらに地表下2.3m～2.4m前後、TP+6.5m～6.6m前後で、暗茶灰褐色粘性砂質土層を確認した。この層は硬質で土師器小片を多く含み、硬質である。遺物は平安時代以降の整地層とみられる。この層の上面でピット1基、溝1条を検出した。ピットの埋土は暗茶褐色粘性砂質土、溝の埋土は淡茶褐色砂質土である。溝がピットを切っている。この下には厚さ18cm前後の土師器小片を含む灰色有機物混微砂シルトが堆積していた。さらに下は灰白色粗砂層であり、上面で奈良時代とみられる坏小片が出土した。
- 当調査地の東側に近接した位置で、東郷廃寺跡とみられる遺構、遺物が確認されている。ここでは、白鳳時代から平安時代にかけての遺構とこれの直上に堆積する、平安時代以降の整地層がTP+7.3～7.4m前後で確認されている。今回の調査で確認した整地層はこれと対応する可能性が高い。今回はこの土層を1m前後低いところで確認している。
- (吉田野々)



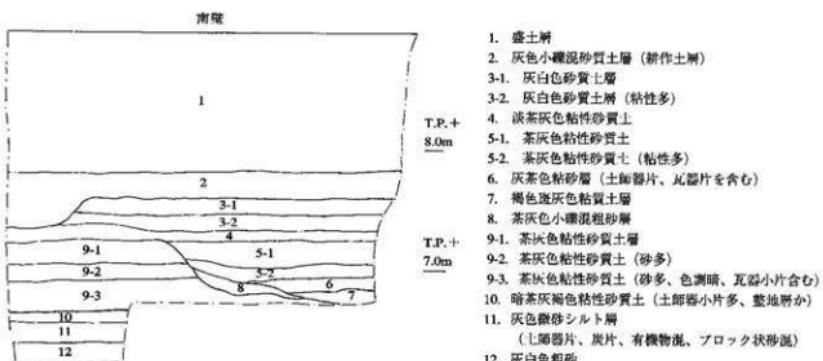
第63図 調査地周辺図 (1/5000)



第64図 調査区断面図 (1/200)



第65図 遺構平面略測図 (1/40)



第66図 土層断面図 (1/40)

11. 中田遺跡（96-718）の調査

1. 調査地
2. 調査期間
3. 調査方法
4. 調査概要

中田3丁目54-3

平成9年3月5日

宅地開発に係る人孔部分2個所に対して $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を設定し、人力と重機を併用して第1区は地表下1.7mまで、第2区は約2.1mまで掘削し、遺構の検出に努めた。また、調査終了後管路の埋設時に立会調査を行った。

ここでは第1区及び第2区の調査を中心に記述し、立会調査の結果についても若干触れておきたいと思う。

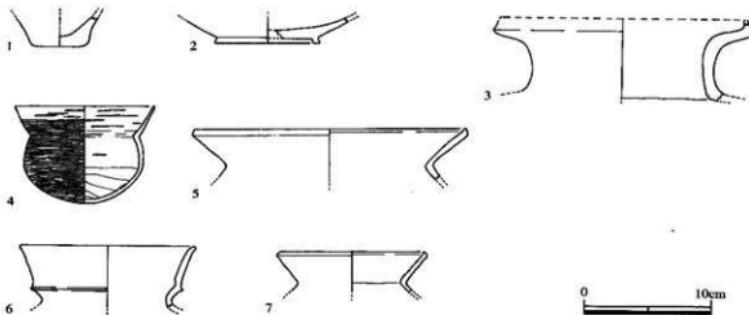
第1区・・・約0.75mの盛土層を除くと旧耕作土がみられ、地表下1m前後の褐色粘砂とその下部の淡灰褐色粘質土で土師器や須恵器片がみられた。そして、地表下1.4m前後の褐灰色粗砂混粘砂で土師器片が出土した。しかし、これらの遺物が対象となる遺構は検出できなかった。

本調査区の北側で立会を行ったときには地表下1.3m前後の灰色砂質土～暗灰色砂混粘質土が包含層であり、中世遺物の出土が出土しているが、この包含層は南側ほど薄く、北に向かうにつれて厚くなり、ピット等が確認できる。こうしたことから調査地南側では同時期の遺構は希薄であるといえる。

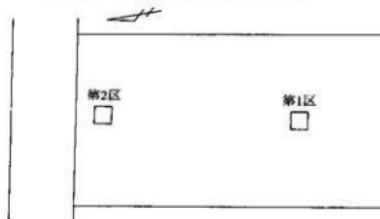
第2区・・・ここでは3期の遺構面を確認した。第1面は地表下1.07mの暗灰色砂混粘質土（層厚約0.26m）を包含層とし、T.P.+8.47mの灰色粗砂混粘砂上面が遺構面となる。ここでは調査区北側で蛇行する溝ともいえる落ち込みとピット1基を検出した。落ち込みは東肩を確認したのみで深さは検出部分で0.12mあり、暗灰色粘質土を埋土として瓦器、土師器の小片が出土している。ピットは円形を呈すると



第67図 調査地周辺図（1/5000）

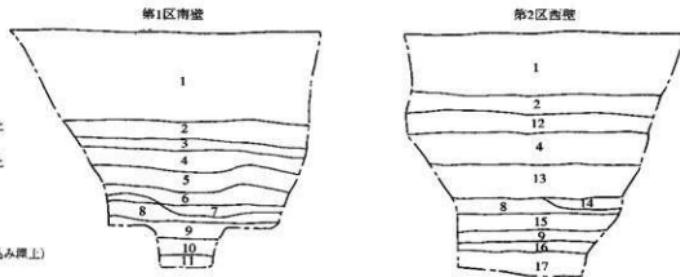


第68図 出土遺物実測図 (1/4)



第69図 調査位置図 (1/600)

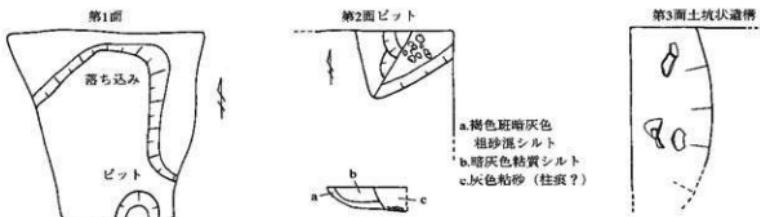
1. 盛土
2. 旧耕土
3. 淡緑灰色粘質土
4. 淡灰灰色粘砂
5. 深灰色粘砂
6. 淡灰褐色粘質土
7. 暗褐色粗砂混粘質土
8. 灰色粗砂粘砂
9. 暗褐色粗砂粘砂土
10. 灰白色細砂粘砂
11. 淡紫灰色粘質土
12. 深灰色粘砂
13. 暗灰色粘質土 (落ち込み壁上)
14. 暗褐色粘質土
15. 暗褐色粘質土
16. 暗褐色透灰色粘砂
17. 暗褐色透灰色粘砂シルト (遺構堆土)



第70図 土層断面図 (1/40)

みられるが、一部が調査区外に伸びる。径約0.35m、深さ約0.07mで暗茶灰色粘砂を埋土とする。層中より遺物は出土していない。

第2面は地表下1.5m前後の暗褐色粘質土（層厚約0.14m）を包含層とし、T.P.+8.2mの暗褐色斑灰色粘砂上面の北西角で方形を呈すると推定されるピットの一部



第71図 第2調査区 遺構平・断面図 (1/40)

を検出した。ピットは深さ約0.18mで褐色班暗灰色粗砂混シルトと暗灰色粘質シルトを埋土とし、底部中央には小礫が敷かれていた。礫上部には柱痕とみられる灰色粘砂が断面で確認できた。ピットから遺物は出土していないが、包含層からは灰釉陶器が出土しており、9世紀の遺構面と考えられる。

第3面は地表下1.8m前後(T.P+8m)の暗黃灰色砂混シルトを切り込む褐色班灰色微砂シルトがあり、これより小型丸底壺を含む布留期の土器が出土している。灰色微砂シルト層は完掘できなかったが、層厚0.2m以上あり、溝あるいは土坑と推定される。さらにベース層である暗黃灰色シルトにも庄内式期の土器片が若干みられることから下部に遺構の存在が推定される。

以上の3時期のうち立会調査では中世の包含層はほど全域で確認され、ピットなども断面で見つかっており、布留期についてはやはり2区近辺ではシルト層中より、壺などの破片が出土している。しかし、9世紀の遺構面については同一層を確認したが遺構や遺物は見られなかった。

5. 出土遺物

1が第1調査区、2~7が第2調査区出土遺物である。1は褐色班粗砂混粘砂出土の土師器壺底部で復元底径4.3cm、内面ヘラナデ、外面調整不明。

2は暗褐色粘質土出土の灰釉陶器の皿底部である。高台をもち、復元底径8.6cm、回転ナデ成形。

3~6は第3面の溝状遺構出土遺物である。3は受け口状になっている広口壺で、直立する頸部をもつ。内外面の調整は剥離のため不明。ただし、受け口になった口縁部分に焼成痕がある。4の小型丸底壺は完形で口径11.4cm、器高7.9cm。外面は横位のヘラミガキ、内面は底部を板状工具によるナデ、体部から口縁にかけてはヘラミガキとナデを施す。5は庄内壺の口縁部で復元口径22.2cmと大型である。6は複合口縁の壺の口縁部で、復元口径14.2cm。内外面の調整は剥離のため不明。淡橙褐色を呈する。

7は第3面遺構面のベースとなる暗黃褐色砂混シルト出土の庄内壺の口縁部で復元口径11.8cmを測る。

6.まとめ

今回は中世、平安時代前半、そして庄内~布留期の包含層と遺構面を検出した。中田遺跡は弥生前期からの複合遺跡であるが、奈良~平安時代の遺構は検出事例が少ない。これは中世段階での削平が著しいためとみられるが、本調査地のようにわずかながら遺存しているものもあることから今後慎重な調査が必要である。

(道)

12. 東弓削遺跡（96-565）の調査

1. 調査地 八尾木2丁目49.504丁目90-1,-2,91-1,-2
2. 調査期間 平成9年2月20日～4月10日
3. 調査方法 人孔設置部分8ヶ所には2m×2mの調査区を設け、また一部に幅0.7mのトレチ2本を設定し、地表下1.5～2mまでを断面観察を中心とした調査を行った。
4. 調査概要 本調査地では奈良時代の遺物と中世の遺構、遺物を主に確認した。以下各トレチ毎に概要を述べていこう。

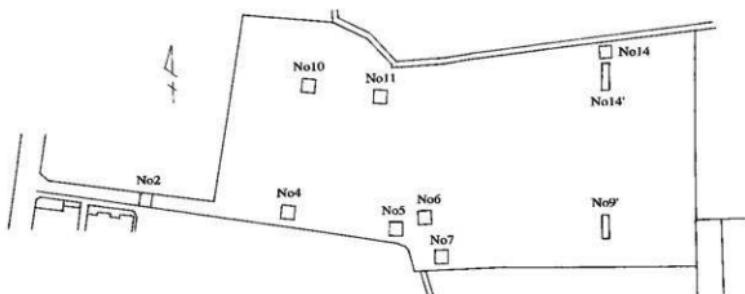
No.2人孔・・・ここでは中世のT.P+10.45mにある⑩層淡茶灰色粘砂で瓦器や土師器の細片が出土している。しかし、この時期の遺構はみられなかった。T.P+10.05mからは⑥・⑨層の砂層が⑩の暗青灰色粗砂混粘砂を挟んで約0.7mの厚さで堆積している。そしてT.P+9.25mの⑩層灰色小砾混粘土では須恵器片数点と高杯とみられる土師器の杯部片などが出土していることから古墳時代後期以降の包含層と考えられる。以下微砂とシルトの互層堆積となる。

No.4人孔・・・T.P+10.39mの⑩層暗褐灰色シルト混粘砂上面で、深さ7cmの溝状遺構の北肩部を検出した。埋土より瓦器片や土師器皿、瓦の小片等が出土している。⑩層以下では砂層が堆積しているが、⑩層では土師器杯が、⑨層ではブロック土から小型器台の裾部片や内面ヘラケズリを施した壺片が見つかっている。

No.5人孔・・・T.P+10.34mで⑩層、⑩層を切り込む土坑を検出した。深さ約28cmで、埋土より羽釜や瓦器、ミニチュアの羽釜等が見つかっている。遺構の上部に



第72図 調査地周辺図 (1/5000)



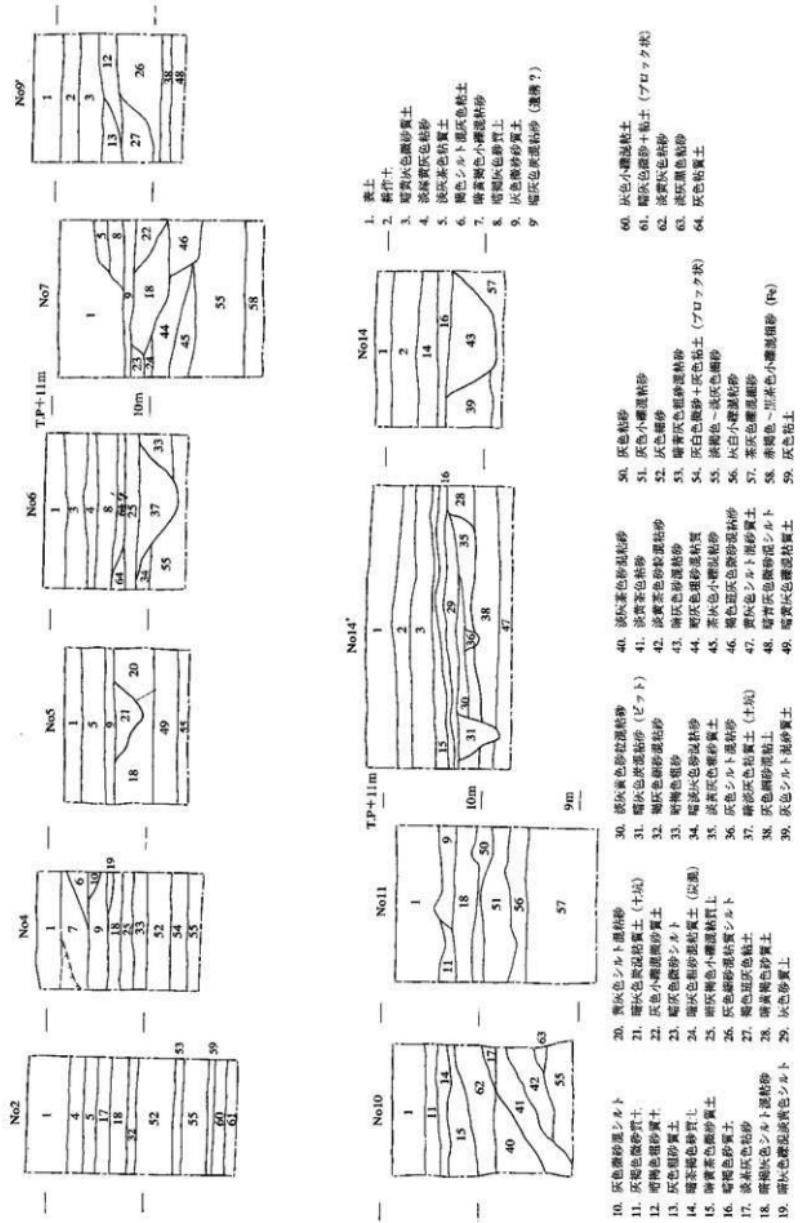
第73図 調査位置図 (1/800)

ある⑨層でも若干遺物が出土している。T.P.+9.7mからは砂層の堆積となる。

No.6人孔・・・T.P.+10.35m前後の⑩層灰色微砂質土を切り込む⑨'層の暗灰色粘砂層には全体に炭化物が含まれており、土師器や瓦器の細片が出土する。No.5やNo.7人孔で確認した⑨層灰色微砂質土とはその炭化物の含まれ方や⑩層を切り込むなどの点が異なっていることから溝ないしは土坑状の遺構と考えられるが、その性格や時期は不明である。またT.P.+10.12mでは土坑を検出した。深さ約38cmを測り、⑩層暗淡灰色粘質土を埋土し、羽釜や瓦器椀、土師器皿が出土している。遺構は砂質土と粗砂層上に構築されており遺構面以下では砂層の堆積となる。

No.7人孔・・・T.P.+10.28mの⑨層灰色微砂質土には東に向かうほど厚くなり、層中に部分的に炭化物がみられ、土師器片や瓦器椀片を包蔵している。しかしNo.6人孔の部分で述べたとおり、炭化物の混入が不均等であり、ここでは掘り込みを確認できなかったことから包含層としておきたい。そしてT.P.+10.08mの⑩層暗褐色粘砂の上面には薄く炭化物がのっており、これより黒色土器A類が見つかっている。T.P.+9.5m以下では砂層の堆積となり、土師器や須恵器片が極少量含まれていた。

No.10人孔・・・ここでは時期は不詳ながら、T.P.+9.85mで骨片埋納状況を検出した。これは0.8m前後の盛土を伴うもので、表面に⑪層淡黄茶色粘砂を盛り、次に炭や小石粒が混じる⑫層淡黄茶色砂混粘砂、そして骨片と炭化物を主とする⑬層淡灰黒色粘砂となり、これが灰白色砂層上に置かれる形となっている。骨片は非常に小さく1cmを超えるものではなく、粘砂層中に極少量の土師器細片が含まれる。前述のように時期は明確ではないが、今回の調査で確認された時代すなわち庄内期奈良時代～平安時代、中世の範囲で考えるならば平安時代以降と推定されよう。



第74図 土壌断面図 (1/50)

No11人孔・・・T.P+10m前後の⑩層灰色砂質土～粘砂では陶磁器片がみられ、以下T.P+9.54mの砂層上面に堆積する⑪層までは土師器片を極少量含んでいた。また、砂層中には弥生後期土器や庄内土器の細片がみられた。

No14人孔・・・T.P+10.37mの⑫層灰色シルト混砂質土で、土坑状の遺構を検出した。深さ約0.57mを測り、⑬層暗灰色砂粒混粘砂を埋土とする。遺物は出土していない。遺構構築層以下は粗砂層となる。

No14' トレンチ・・・人孔から南に向かって管路部分に幅0.7m、長さ4.5mのトレンチを設定した。T.P+10.5m前後の⑭層暗黃茶色微砂質土から遺物片がみられるが、下部の⑮層暗褐色砂質土とやや落ち込み状の堆積を示す⑯層灰色砂質土から瓦器、土師皿や縄目の叩きをもつ瓦片、須恵器片が出土している。そして、T.P+10.25mの⑰層淡黃灰色砂粒混粘砂上面ではピットが検出できた。埋土は⑯層暗灰色炭混土で深さ約0.4mを測る。埋土より遺物は出土していないが、⑯層及び⑰層出土土器より13世紀前半の時期とみられる。さらにT.P+10.15m前後の⑱層灰色シルト混粘砂では8世紀後半から9世紀初頭にかけての土師器杯や須恵器杯、鉢などが出土した。この包含層下部のT.P+9.84mの⑲層淡黃灰色シルト混砂質土が生活面と考えられるが、遺構を検出することはできなかった。

No9' トレンチ・・・No14人孔の南対面にあるNo9人孔から北に向かって管路部分に長さ3.5mのトレンチを設定した。旧耕作土以下ではNo14' トレンチとは異なり、粗い粗砂質土がみられたが、トレンチ以南では灰色系の粘砂が堆積し、瓦器や瓦片が包蔵されていた。この粗砂質土を除いたT.P+10.36mの⑳層褐色斑灰色粘土上面を切り込む㉑層粘質シルトがあり、須恵器、土師器片が若干出土しており、中世以降の落ち込みの可能性をもつ。㉒層中には黒色土器B類、土師器、瓦器が出土しており、瓦器碗の形態から13世紀後半～14世紀初頭の包含層と考えられる。そして、T.P+9.94mの㉓層はNo14' トレンチで確認した8世紀～9世紀の包含層であり、やはり㉒層上面が生活面になると推定される。

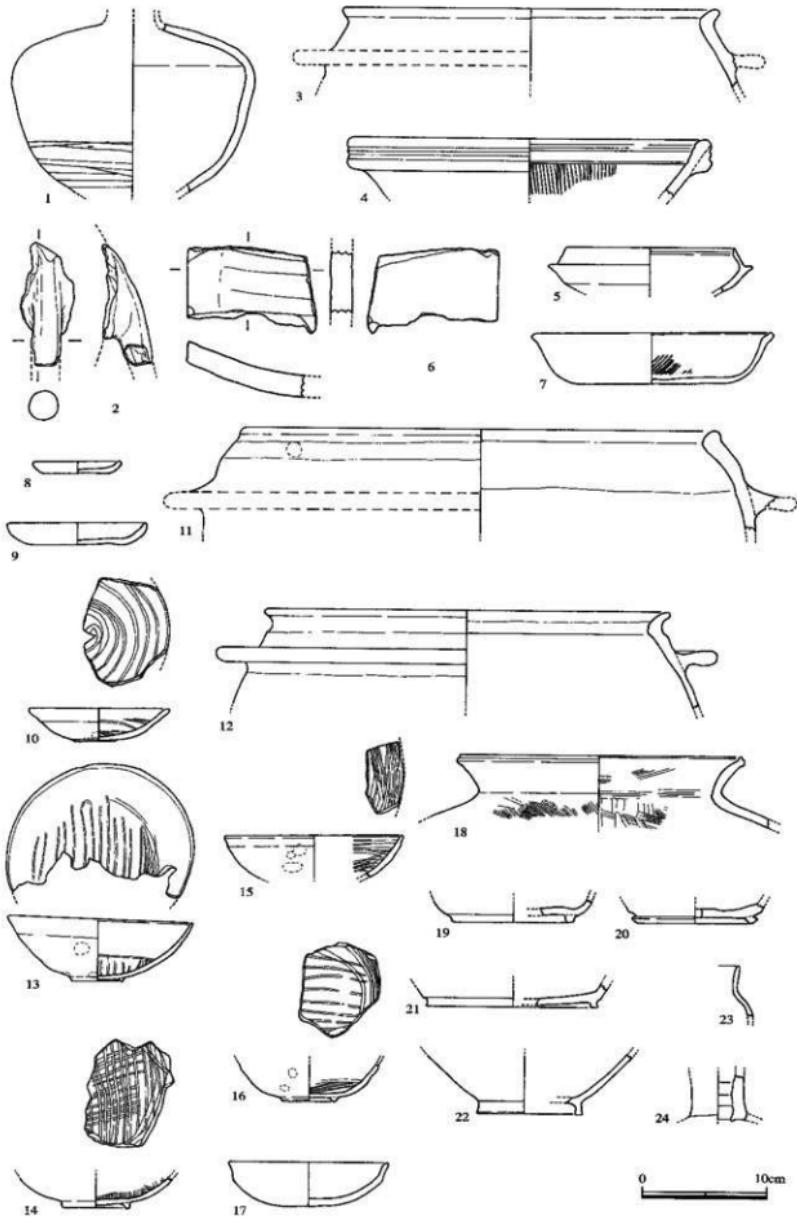
5. 出土遺物

各調査地点で遺物が出土しているが、細片が多く、ここでは岡化可能な25点を掲載している。No2が1個体、No4が7個体、No6が5個体、No14'が10個体、No9が1個体である。

1はNo2の㉔層出土の須恵器壺の胴部で、外面下部約1/3をヘラケズリし、残りを回転ナダ調整を行なっている。

2～8はNo4出土で、瓦質三足羽釜の脚部2、土師質羽釜3、須恵質の擂り鉢4、須恵器杯5に混じって平瓦6（凸面ナダ、凹面イタナダ）が出土している。これらは㉕層から出土した。そして、土師器杯8のみ㉖層の砂層から見つかっている。杯は全体に摩滅気味であり、周辺から流されてきたことがわかるが、外面底部はヘラケズリ痕、内面には放射線状暗文をみることができる。

8～11はNo6の土坑から、12は㉗層から出土した。土師皿は復元口径7.2cmの小型のもの8と復元口径11.4cmのもの9がある。瓦器碗10は復元口径が11.6cm、器高



第75図 出土遺物実測図 (1 / 4)

2.7cmを測り、内面暗文は圓線状となり、外面にはミガキは認められない。土師質羽釜12の口縁端部は丸みをもびているが僅かに上方に肥厚し、復元口径39.0cmを測る。内面調整は不明であるが、外面はナデを行う。もう1つの土師質羽釜12は口縁部で強くナデすることにより段がみられる。端部は屈曲して収まる。復元口径32.8cmを測る。

13~21はNo14' トレンチから出土したもので、13は⑯層、14~16は⑰層、そして17~23は⑱層から出土した。13の瓦器椀は口径12.5cm、器高5.4cmを測る。内外面のミガキは摩滅により不明だが、見込みの暗文は平行線状となっている。14は口径、器高ともに不明だが格子状の見込みの暗文をもつ。15は復元口径14.8cm、器高3.4cm以上で、口縁端部付近には強いナデによる段を有する。外面下半部に指押え痕がみられる。そして16は器高3.1cm以上で見込みの暗文は平行線状である。これら瓦器椀は13世紀前葉に比定されよう。

土師器杯17は口径13.3cm、器高3.7cmで、表面の剥離に調整は不明である。土師器壺18は復元口径23.8cmで、端部は摘みあげるように肥厚する。体部外面はハケ、内面はハケ後ナデ。19~21は須恵器杯だが、いずれも底部のみである。なお復元底径は順に10.0cm、10.4cm、14.1cmである。22は須恵器壺の口縁部、23は底部~体部である。これは奈良時代から平安時代初頭のものと考えられる。

24はNo.9'の⑲層より出土した壺頸部で回転ナデ調整がうかがえる。

6.まとめ

今回は人孔部分数カ所の調査であったが、多くの知見を得ることができた。まず第1にT.P.+9.8m前後に奈良時代から平安時代初頭にかけての遺構面が存在していることが明確となった。この時代の遺構面は平成6年度にすでに本調査地において行われた調査でも実は確認されており、この時は溝状遺構の検出と土師器や須恵器に混じって多くの製塙土器や軒丸瓦が見つかっている。今回は遺物の出土量も少なく、明確な遺構を見出せなかったもののこの遺構面がとくに調査地の東半分において顯著であり、西半部は河川状の砂層の堆積であることが推定されるなど範囲を検討する資料が提供できたものと思う。

第2に13世紀前半の遺構がT.P.+10.15m前後に遺存しており、これがT.P.+10.4mで見つかった14世紀前葉の遺構面まで継続している可能性が指摘できることであろう。

そして第3にNo10で検出された骨片埋納状況の検出である。細かい骨片といっしょに焦げた板片もみられたことから、焼かれた後に埋められたものと思われるが5~10mm程度の砂粒といっしょにされていた。このような埋葬が中世の一般的な形態かどうかは浅学のためわからぬ。今後さらに検討を重ねていきたい。

なお、今年度のもう一つの東弓削遺跡の調査(97-188)は本調査地に近接した場所で調査を行っており、奈良時代や中世の遺構面、そして庄内期の包含層を確認している。

(消)

〔参考文献〕

吉田野乃「東弓削遺跡(94-484)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書』

八尾市教育委員会 1995

13-1. 八尾寺内町遺跡（97-99）の調査

1. 調査地 八尾市本町2丁目149-1
2. 調査期間 平成9年5月9日
3. 調査方法 施工予定地の西と東に3m四方の調査区を2ヶ所設定し、地表下3.5m前後まで重機と人力を併用して掘削を行った。
4. 調査概要 東側調査区では地表下2.6~3.0m前後（TP + 6.4~6.9m）で、瓦器小片布留式土器片を含む暗灰緑色微砂混粘土層を確認した。また西側調査区では地表下2.7~3.1m（TP + 6.45~6.8m）で、布留式土器片を含む暗灰緑色微砂混粘土層を確認した。さらにこの土層の直下の暗灰緑粘土1層にも布留式土器片が含まれていた。東側調査区では暗灰緑色砂混粘土層の直下の白色斑暗灰色粘土層の上面が凹凸状をなしており、中世の水田面となる可能性がある。西側調査区の暗灰緑色粘土層（23-1）は、古墳時代前期の包含層とみられる。東側調査区では地表下3.46m（TP + 6.0m）前後まで、中世の水田遺構が存在することがわかった。この下の灰緑色粘土層が古墳時代前期の包含層となる可能性がある。
- 今回の調査地で確認した古墳時代前期の包含層については、北側近接地の既往の調査において、包含層と溝3条を検出した遺構面を確認しており、これと層位的につながりをもつものであろう。当遺跡の古墳時代前期の集落域を明らかにする重要な資料である。

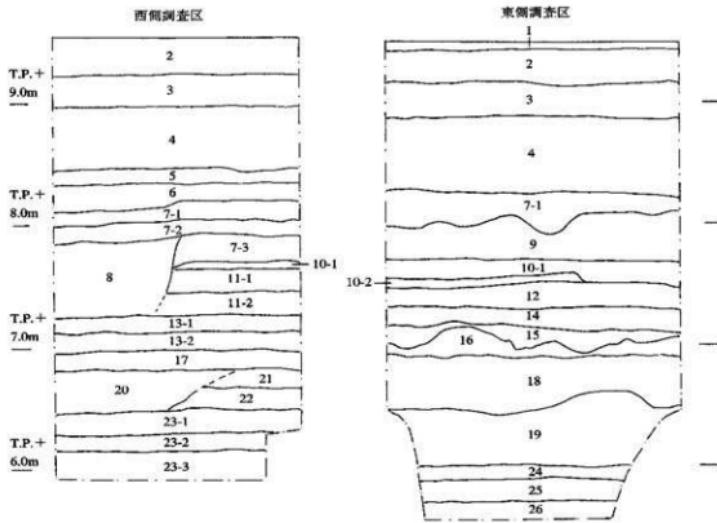
（吉田野々）



第76図 調査地周辺図（1/5000）



第77図 調査区設定図 (1/400)



- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. アスファルト | 14. 灰綠色粘性砂層 |
| 2. クラッシャー | 15. 暗灰色有機物混粘土 |
| 3. 黄灰色粗砂層 | 16. 灰白色粗砂 (土器片含む) |
| 4. 暗灰茶色粗砂層 | 17. 淡灰綠色微砂質粘土層 |
| 5. 暗黑灰茶色粘土層 (耕土層) | 18. 暗灰綠色微砂質粘土 (ブロック状、石器片含む) |
| 6. 灰綠色粗砂質土層 (粗砂混) | 19. 白色暗緑色粘土層 (瓦器片含む) |
| 7. 灰綠色小礫混砂質土層
(砂の粗さ 7-1<7-2<7-3) | 20. 淡灰綠色微砂質粘土層 (布留式土器片含む) |
| 8. 淡灰綠色微砂層 | 21. 淡灰綠色微砂質粘土 (灰綠粘土、暗灰色粘土ブロック) |
| 9. 灰白色砂層 (ラミナ状、土器片含む) | 22. 暗灰色粘土 |
| 10-1. 灰綠色粘土層 (瓦器小片含む) | 23-1. 暗灰綠色粘土 (布留式土器片含む) |
| 10-2. 灰綠色粘土層 (砂多) | 23-2. 暗灰綠色粘土 (微砂混) |
| 11-1. 淡灰綠色砂質シルト | 23-3. 暗灰綠色粘土 (強粘土) |
| 11-2. 淡灰綠色砂質シルト (砂多) | 24. 灰綠色粘土層 |
| 12. 灰綠色粘砂層 | 25. 暗灰色有機物混粘土 |
| 13-1. 淡灰綠色シルト層 | 26. 灰綠色シルト層 |
| 13-2. 淡灰綠色シルト層 (粘性大) | |

第78図 土層断面図 (1/40)

13-2. 八尾寺内町遺跡（97-185）の調査

1. 調査地 本町5丁目55の1, 3
2. 調査期間 1次調査 平成9年10月22日 2次調査 12月9日～15日
3. 調査方法 八尾寺内町は慶長十一年（1606）に久宝寺寺内町の百姓森本氏が下代安井治兵衛の不正を訴えるという争いのなかで成立したものである。すなわち訴訟に敗訴した森本氏等は慈願寺とともに八尾の開発を行った。翌年、新たに大信寺が建立され、この二寺を中心に村作りが行われた。その規模は東西3.5町、南北3.3町の不正形である。

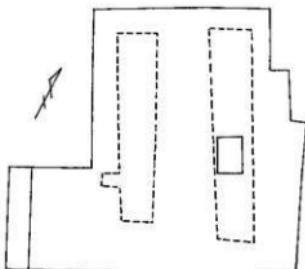
この寺内町の南にはその成立以前に八尾八ヶ村の内の西郷村と東郷村の人々によって建立されたといわれる臨済宗南禅寺派の常光寺がある。今回の調査地はこの常光寺の前の道を挟んだ門前に位置しており、西郷村に属している。すなわち、寺内町とは本来異なるものであり、寺内町より古い時期の中世村落の成立についての資料が得られる可能性をもつ場所である。

まず最初に1次調査として約2m×3mの調査区を設け、地表下約2mまで重機と人力を併用して掘削し、遺構面の検出に努めた。この調査の結果、多くの遺構と遺物の出土をみたので、さらに2次調査として約104m²の調査区を設定した。この2次調査についてはいずれ、担当より報告のあるものと思われるが、今回は1次調査の報告のみ行うものである。

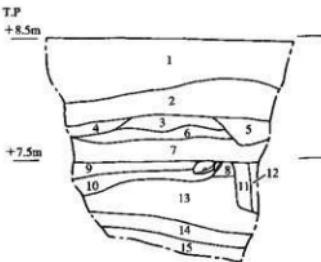
4. 調査概要 近現代の表土層（層厚約0.4m）を取り除くとオリーブ褐色砂質土があり、炭化物が混じる。しかし、北壁と西壁にL字形に灰白色細砂が堆積しており、近世の流路の堆積とみられる。とくに北壁では地表下1.2m前後まで砂層が堆積していた。



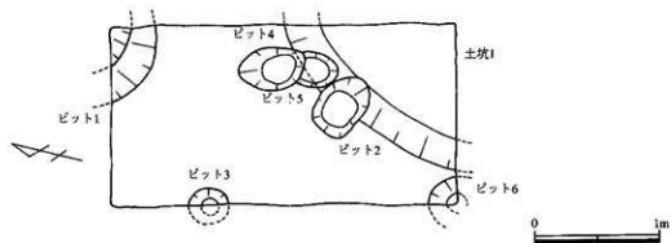
第79図 調査地周辺図（1/5000）



第80図 調査位置図 (1/400)
(実線第1調査区、破線第2調査区)



第81図 西壁土層断面図 (1/40)



第82図 遺構平面図 (1/40)



第82-2図 ピット4・5及びピット2遺物出土状況 (1/20)

地表下0.65m前後の淡茶灰色砂質土ならびに下部の茶灰色粘砂中には土師器、瓦器片が若干含まれていた。

そして、地表下0.85m前後の⑦層暗オリーブ灰色粘砂が遺物包含層であり、瓦器、土師器、瓦片などが多く出土している。遺物は片のみで、時期的には後述するように2つの異なる時期のものが見られた。

遺構面は地表下1.1m前後の⑧層茶灰色砂粒混粘砂をベースとし、土坑1基とピット6基を検出した。

ベース層以下では淡褐色粘質粗砂が約0.4m堆積しているが、無遺物層であった。層厚0.13mの薄いシルト層をはさんで、地表下1.6m以下は湧水の細砂層となる。

- 5. 遺構と遺物について**
- ピット 1**
北東壁付近で検出した。調査区外に伸びるため全容は不明であるが、円形を呈するともみられる。推定径約113cm、深さ約30cmで淡灰褐色粘砂を埋土とし、土師皿(1.2)や瓦器皿(3)が出土している。(1)は口径復元8.6cm、器高1.8cm、(2)は復元口径9.6cm、器高1.75cmで、色調はいずれもにぶい黄橙色から橙色を呈する。(3)は復元口径9.2cm、器高2.3cmで、平行線状暗文を施している。遺物から12世紀後半とみられる。
- ピット 2**
調査区中央南寄りで検出した。土坑1を切って構築されている。楕円形に近い形をしており、長径約60cm、短径約45cm。埋土は暗茶灰色粗砂混粘砂で、深さ約16cm。このピットには瓦器片と共に土師器の小皿(4~13)が重ねられようにして10枚以上廃棄されていた。いずれも、へそ皿と呼ばれる中央部が内に盛り上がったもので、口径は7.8cmを中心として7.4~8cmの間であった。色調は浅黄橙色を呈する。また、平瓦片(14)も見つかっている。瓦器は細片のため判然としないが、「へそ状」を呈する土師器皿などから14世紀前半に比定される。
- ピット 3**
西壁で北寄りで検出した。調査区外にのびるが、円形を呈し、直径約35cmと推定され、深さ32cm。埋土は暗茶灰色粘砂で、柱痕跡が確認できた。底部付近からは陶器の底部片(15)が出土しており、柱の根石代わりに使用したものと推定される。
- ピット 4**
土坑1に切られ、ピット5を切る形で構築されている。楕円形を呈し、長径約56cm、短径約36cm。暗灰茶砂粒混粘砂を埋土とし、深さ約21cmを測る。瓦器椀(16)や土師質羽釜片(17)の他にピット2と同様に口径9.2~9.8cmの土師器小皿(18~29)を12枚以上を重ねるようにして廃棄しており、また口径14.6cmの土師器大皿(30・31)が2枚、口縁の玉縁を大きく肥厚させ、灰白色に近く釉が下半部におよばない白磁椀(31)が出土している。土師器小皿の色調はにぶい黄橙色~橙が主である。羽釜は口縁部のみで剥離が著しく、調整は不明。これらの遺物は12世紀中葉~後半に比定できよう。
- ピット 5**
七坑1に上面を削られており、ピット4に北側を切られている。楕円形を呈し、長径30cm以上、短径28.5cm。本来の切り込み面は不明だが、検出時の深さは約6cmである。埋土は暗茶灰色粘砂で、底の浅い土師器皿片や羽釜口縁部片、瓦器椀(32・33)が出土している。(33)は復元口径15.6cm、器高5.4cmを測り、暗文は平行線状であるが密に施している。(34)は底部を欠失しているが、復元口径15.2cmで、暗文は平行線状である。瓦器椀から12世紀前半~中葉とみられる。
- ピット 6**
南西角で検出した。円形を呈するとみられるが、大半が調査区外にのびるため全容は不明である。直径約45cmと推定される。埋土は暗灰色粘砂で、ピット3と同様に柱痕跡が確認できた。土師器、瓦器の細片がわずかに出土している。遺物も少

なく時期は明確にはできないが、ピット3とは約1間あり、柱痕跡もみられることから同一時期のものと推定される。

土坑1

南西付近検出した土坑で、ピット5及びピット4の後に構築され、ピット2に一部を切られている。大半は区外に伸びるため、全容は不明である。南壁に沿った長さは約1.2m、東壁に沿った長さは約1.36mである。埋土は2層に分けられ、上層が灰色砂粒混粘砂、下層が暗灰色細砂混粘砂で、いずれも炭化物を含んでいた。最も深い位置で約32cmを測る。

出土遺物は土師器皿(35~55)、瓦器椀(56~62)、瓦片(63・64)、宋銭(65)などである。土師器皿は小皿(34~51)と大皿(52~55)に分けられる。細片ばかりであるが、小皿はA)「て」字状口縁系の(35)とB)口縁の立ち上がりが高く、内外面、特に内面を丁寧にナデしている(36~38)、C)口縁の立ち上がりが小さく、浅い(39・40)、D)口縁が斜め上方に緩やかに立ち上がり、全体に均一なナデを行う(41~45)、E)口縁端部を強くナデ、段を有し、底部外面は難なナデと指揮えが顕著な(46~49)、F)いわゆるへそ皿(50・51)の6タイプに分類できる。口径はいずれも復元であるが平均はA) 9.2cm、B) 9.2cm、C) 8.0cm、D) 8.8cm、E) 8.1cm、F) 7.85cmである。これらは形態などからA)→B)・C)・D)→E)に変化するものと考えられ、時期は12世紀前半から14世紀中葉~後半に比定できる。これは瓦器椀の形態からみても、高い高台をもち暗文を密に施すなど古い形態をもつ(56)や(57)と形骸化した高台をもち團線状暗文を施す(59~62)、この両者の中間に位置する(58)が存在するなど、時期的にも同様である。

前述しているように土坑1はピット4やピット5を切って構築されており、またピット2に切られるなど遺構の重複が著しい。こうしたことからみても土坑1はかつて存在していた遺構の上に存在している可能性が高く、土坑1が構築されたのは14世紀後半頃といえるだろう。

宋銭(65)は「熙寧元寶」で、文字は真書であり、裏面には文字はない。この「熙寧元寶」は初鑄が1068年である。

平瓦は(63)が凸面を平行線状のタタキ、(64)は繩目タタキを行っている。

また(66~73)は包含層から出土したものであるが、土師器小皿(66~70)や瓦器小皿(71)、土師器大皿(72・73)などがある。

以上、出土遺物からみて検出遺構の時期は次のようになると考えられる。
すなわち平安時代末期と鎌倉時代末期~南北朝時代の2時期の遺構が遺存していることがうかがわれる。

遺構	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	土坑1
時期	12世紀後半	14世紀後半	14世紀	12世紀中葉 から後葉	12世紀中葉	14世紀?	14世紀中葉 ~後葉

表1 検出遺構時期一覧

6. まとめ

前述しているように本調査地は八尾寺内町成立以前からある集落に属しており、寛政三年（1791）に常光寺が江戸寺社奉行板倉勝政に提出した絵図「境内坪数并建物書上げ」には西郷村と記載されている。常光寺の土地は境内と門前在家と西郷村およびその周辺にあった。今回の調査地は門前在家と道をはさんで対峙しており、少なくとも江戸時代の常光寺の境内ではないことがわかる。

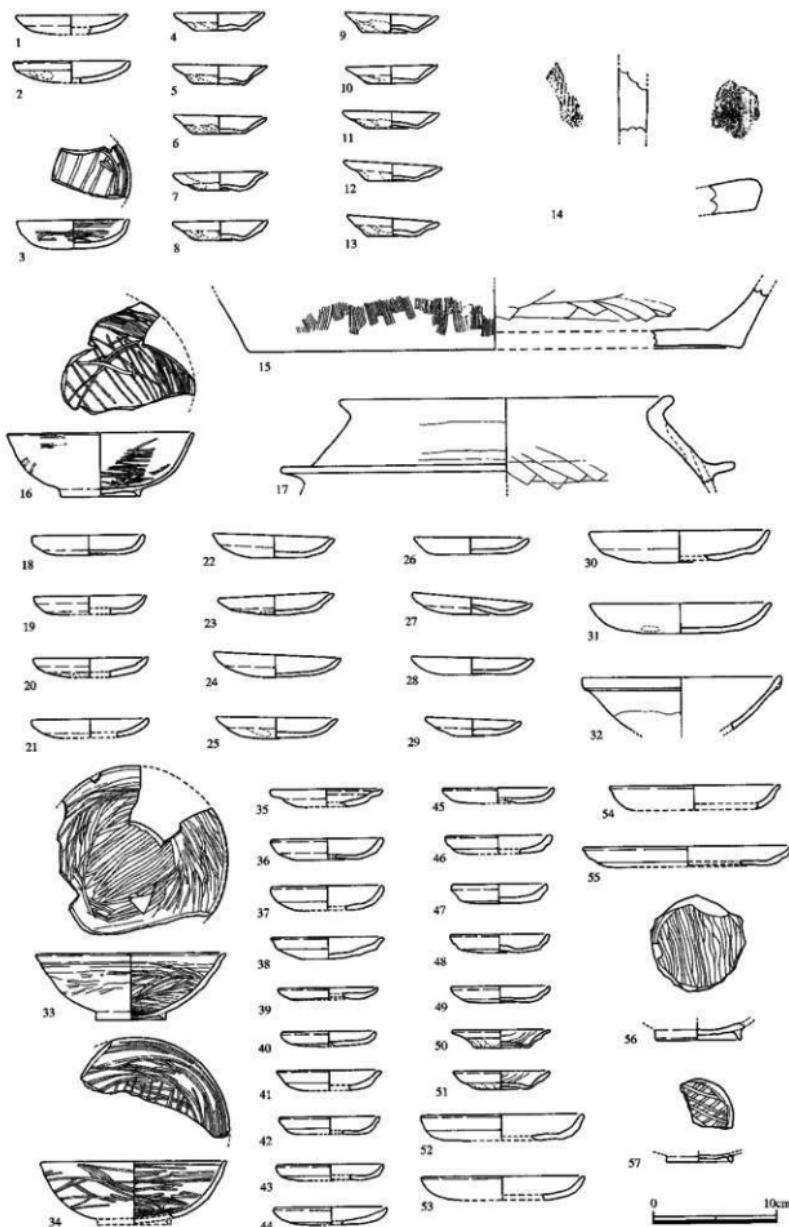
常光寺は臨済宗南禅寺派の寺院で初日山を山号とする。16世紀に住職となった靖叔徳林は南禅寺金地院と八尾の真觀寺の住職でもあったことから、この2寺とのつながりが続いている。次に住職となった以心崇伝は徳川家康の外交・行政を担当していたため幕府と密接な関係をもつようになつた。しかし、その一方で古くから地蔵菩薩信仰で知られており、地蔵菩薩の開帳や出開帳の毎に多くの人が参詣したと記録にあり、その成立に関わった民衆との関係も継続している。これは現在でも地蔵会のときに関帳されており、この時には河内音頭が行われており、多くの人が訪れている。

常光寺の創建は縁起によると次のようなものである。西郷に常光寺の前身である草堂があり、ここに地蔵菩薩が祀られていた。康暦元年（1379）頃に虐病が流行り、これに罹った藤原又五郎太夫が地蔵菩薩を信仰していたためすぐに本懐した。こうしたことから近隣諸衆の参詣が多くなり、至徳二年（1385）に東郷と西郷の住人よって新しい堂が建てられ、近くの新堂寺と呼ばれた阿弥陀堂なども取り入れて寺域が広げられた。この時、室町幕府の將軍であった足利義満は造営事業に協力しており、「常光寺」と「初日山」と書いた扁額も送っている。そして、至徳三年（1386）に新しい堂に地蔵菩薩が安置された。ということである。

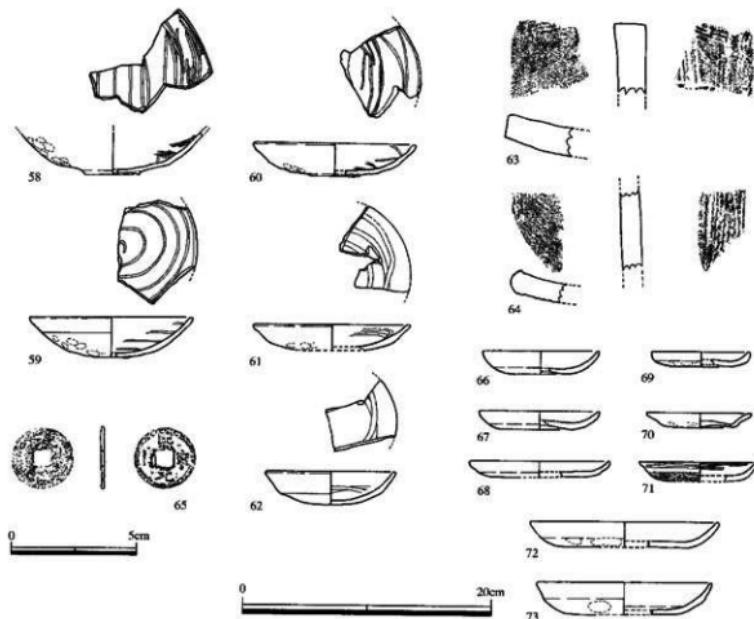
現在、常光寺には南北朝時代の作とみられる地蔵菩薩立像があり、また藤原又五郎太夫盛継像と伝えられる南北朝から室町時代初頭の趺座俗体人物像も地蔵菩薩像の横に置かれている。さらに「檀那又五郎太夫」の銘のある額口に嘉慶二年（1388）の年号が印刻されている。

このような常光寺の縁起およびその歴史遺物をみてみると、今回検出した遺構の時期は大きな意味をもってくるといえよう。表1でみるように遺構は平安時代末期（ピット1・4・5）と鎌倉時代末期～南北朝時代（ピット2・3・6、土坑1）の2つの時期に大きく分けることができる。平安時代末期はこの地に人が生活を始めた時期とすことができ、これが後の西郷村へ発展するものであるかも知れないことから第1期と呼んでおく。次に鎌倉時代末期～南北朝時代は常光寺の成立時期と重なっており、この段階では既に「集村」としての西郷村が形成されているとみられることから第2期としておく。

1期と2期の遺構で注目されるのはピット2とピット4である。これらは時期が異なるにもかかわらず、土師器小皿を重ねて置くなど、地鎮祭等の祭祀に用いたものと考えられるが、その埋納形態が同じであり、しかも両者の位置が25cmと離れていない。言い換れば同一の事柄が行われる場所であったともとれる。ここで思い出されるのが、常光寺の縁起のなかで、東郷村と西郷村の人々が寺を創建したこと、また幾つかのお堂が統合されたことである。すなわち草堂や阿弥陀堂を中心とした一定の聖域が存在しており、これが後の常光寺へと発展していく



第83図 出土遺物実測図 (1 / 4)



第84図 出土遺物実測図 土器（1／4）・古銭（1／2）

たものと考え、本調査地はその1画を占めていたものとみることはできないだろうか。とくに第2期の遺構は常光寺とは直接結びつかなくとも、常光寺の成立時期と時を同じくしており、ピット3・6は建物を構成するものであるところから常光寺を中心として14世紀後半には村としての体裁を成す「集村化」が行われたと考えることができる。

今回の調査は小区画ではあったが、中世の常光寺と村との関係を考える上で、資料を提供できたものと思う。

(道)

〔参考文献〕

- 小谷利明『古文書・絵図にみる近世の常光寺』八尾市歴史民俗資料館 平成9年3月
 安井良三・水野恭一郎他『大阪府八尾市内寺院古文書調査報告書（目録）』八尾市教育委員会
 平成3年3月

14-1. 矢作遺跡（97-218）の調査

1. 調査地 明美町2丁目37-1, (37-3, -4)
2. 調査期間 平成9年7月10日
3. 調査方法 分譲住宅建設に係る人孔設置工事に伴い、2m×2mの調査区を設定し、地表下1.7mまで重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 地表下0.8mまでは盛土および旧耕作土であった。地表下1.2m前後の灰黄色粘砂層および暗黃灰色砂質土層では、瓦・瓦器・土師器・陶器などが見られた。また、地表下1.25m以下の淡黒褐色粘砂層からは、瓦・瓦器・土師器・種子（モモ）などが出土している。いずれも鎌倉時代頃の包含層と考えられる。
5. 出土遺物 図化できた遺物は4点ある。上層の暗黃灰色砂質土層内から、1のすり鉢および3の平瓦が出土したほか、瓦質の羽釜、土師器・陶器の破片などがみられた。また下層の淡黒褐色粘砂層からは、2の瓦質甕および4の丸瓦のほか、瓦質の羽釜・土師器の破片やモモと思われる種子が数個出土している。
6. まとめ 今回の調査区では、遺構は検出できなかったものの鎌倉時代頃の包含層が確認できた。本調査区の北側の調査では、呪符木簡や祭祀の跡と考えられる遺構などが検出されており、鎌倉時代にはこの周辺に集落が広がっていたと考えられる。

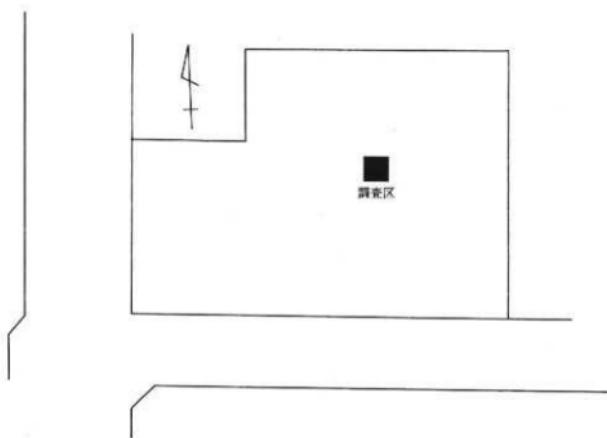
[参考文献]

(財)八尾市文化財調査研究会「竜華寺跡（第2次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1992年
(吉田珠己)

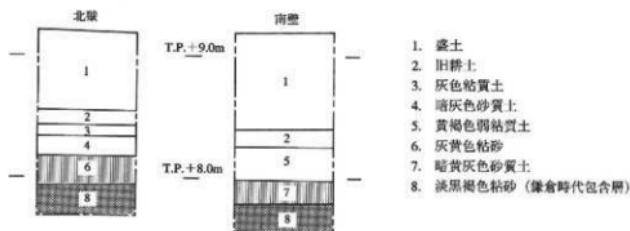
八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ』1992年



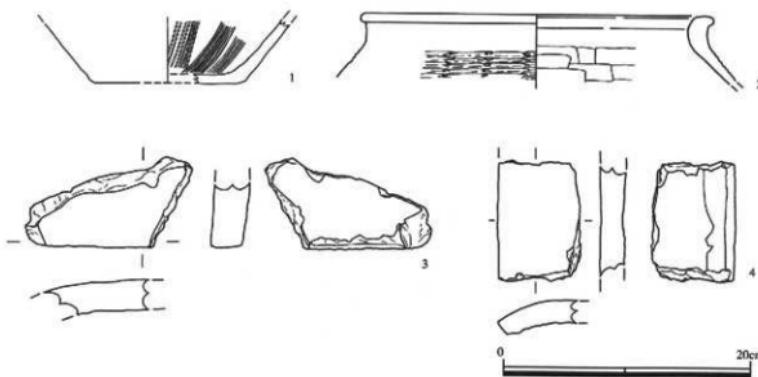
第85図 調査地周辺図（1/5000）



第86図 調査位置図 (1/400)



第87図 土層断面図 (1/400)



第88図 出土遺物実測図 (1/4)

14-2. 矢作遺跡（97-220）の調査

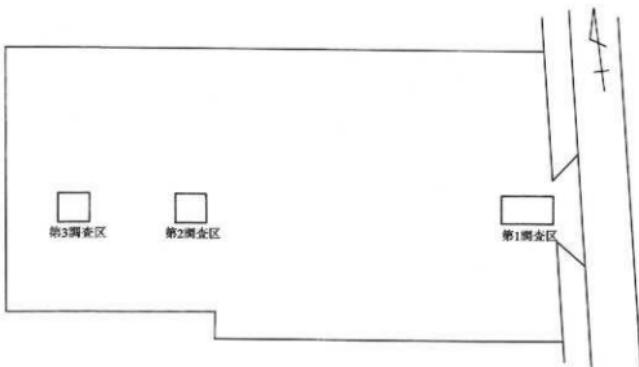
1. 調査地 南本町5丁目18,19,20-2
2. 調査期間 平成9年9月24日
3. 調査方法 共同住宅建設に伴い、人孔設置部分3か所で調査を行う予定であったが、すでに工事着工して、掘削されていたため、3か所とも断面観察を行った。
4. 調査概要 第1調査区では、北壁部分で旧耕土下0.4mのところで、深さ30cmの落ち込みがみられ、古墳時代前期の土師器がかたまって出土した。南壁ではこの落ち込みは見られないことから、溝状ではなく土坑状の遺構になると考えられる。第2・第3調査区では、旧耕土下0.7mまでの掘削で、遺構・遺物は確認できなかった。
5. 出土遺物 図化できた遺物は第1調査区で2点ある。1は土師器の壺で、口縁部の内外面はナデ、体部の内面はヘラケズリの調整を施している。2は、土師器の壺の底部で内外面ともヘラケズリしている。1・2は同一個体の可能性もあり、古墳時代前期頃の遺物である。
6. まとめ 周辺の調査においても、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構や遺物が検出されており、この周辺一帯が集落域であったと考えられる。 (吉田珠己)

〔参考文献〕

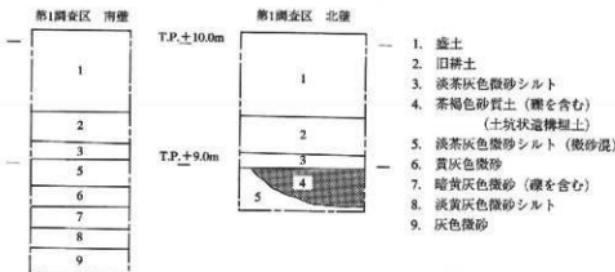
八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987年



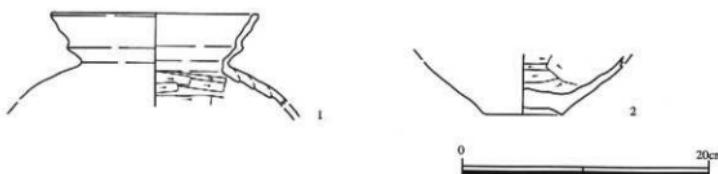
第89図 調査地周辺図 (1/5000)



第90図 調査位置図 (1/400)



第91図 土層断面図 (1/40)

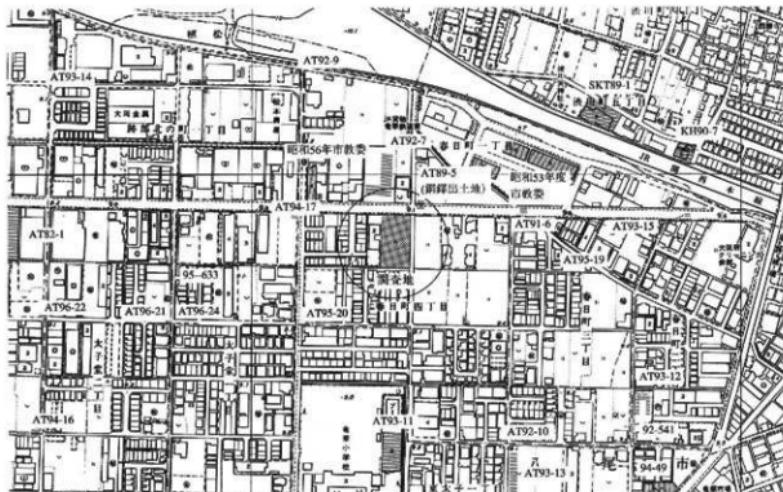


第92図 出土遺物実測図 (1/4)

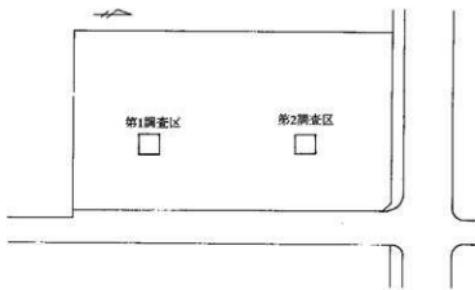
付編. 跡部遺跡（96-580）の調査 [その2]

1. 調査地 春日町4丁目4番
2. 調査期間 平成8年12月12日
3. 前回の報告 本調査については昨年度に概要を報告しているが、出土遺物については整理途中であり、十分な報告が報告ができなかった。そのため、今回は検出遺構と遺物を中心に行うものである。
4. 第1調査区 本調査区では平安時代後期遺構面と弥生時代後期から庄内式期の3層の包含層を確認した。
平安時代後期の包含層は6層暗灰茶色粘砂で須恵器壺片や土師質の鉢壺片、皿(1)等が出土しており、瓦器などは含まれていなかった。検出した遺構面はT.P+7.82mの暗淡褐色細砂混粘砂をベースとし溝1条とピット2基を検出した。ピット1は梢円形を呈し、長径0.84m、短径0.5mで、深さ0.36mを測る。埋土は暗褐色砂混粘砂で、遺物は出土していない。ピット2は円形を呈し、径約0.52m、深さ0.06mを測る。埋土は暗灰褐色砂混粘砂で、須恵器片と土師器片が少量出土している。溝は東西方向で、南肩のみ検出した。検出長1.8m、検出幅0.5mで、深さ約0.12mで、ピット1に西端を切られている。埋土は暗淡灰色粘砂で土師器片が極少量出土している。

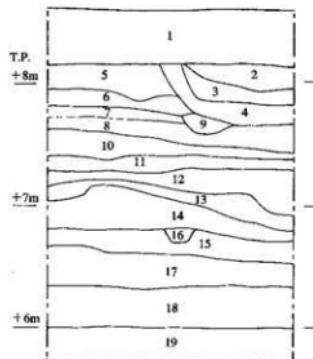
弥生時代後期から庄内式期の包含層はT.P+7.31mの12層茶褐色粘砂以下、13層暗茶褐色砂質土、14層暗灰色粘性シルト(炭化物混じり)の3層で、層厚約0.5mを測る。上部2層からは(2)～(8)、残り1層からは(9)～(12)が出土している。上部2層については弥生時代後期の壺(5)に混じって(6)のように庄内壺が



第93図 調査地周辺図 (1/5000)

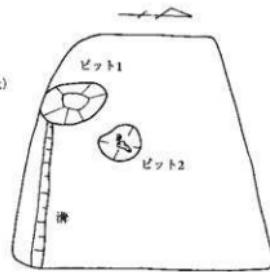


第94図 調査位置図 (1/800)

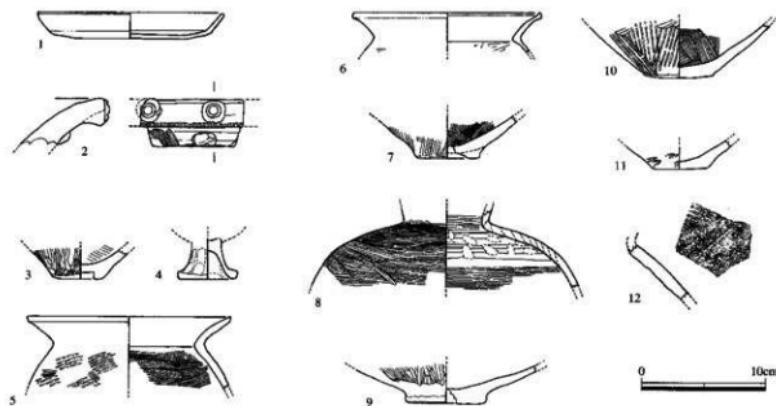


第95図 南壁土層断面図 (1/40)

1. 表土
2. 旧耕土
3. 暗青灰色粘砂
4. 淡灰色・塔褐色砂混粘砂
5. 暗褐色砂質土
6. 暗灰茶色粘砂
7. 暗灰褐色粘砂 (漂植土)
8. 暗淡褐色細砂混粘砂
9. 暗褐色細砂質粘砂 (ピット1埋土)
10. 暗褐色粘砂
11. 墓乳褐色粘質土
12. 灰灰色耕砂
13. 墓茶褐色砂質土
14. 暗灰色粘性シルト
15. 墓綠褐色粘性シルト
16. 暗綠灰色粘質土
17. 墓綠灰色微砂粘質土
18. 暗綠灰色粘土
19. 暗綠灰色微砂シルト



第96図 遺構平面図 (1/60)



第97図 出土遺物実測図 (1/4)

僅かに出土している。ただし、多くの壺の体部はハケ調整を行い、厚い器壁をもつことから庄内期でも古い時期のものと推定される。

また暗灰色粘性シルト層でも(11)の壺底部のように底部が突出しないものも現れていることから、弥生時代でも末期に位置づけられよう。特徴的な遺物としては(12)のように壺体部にへら描記号がほどこされているものも見つかっている。

(第1調査区 済)

5. 第2調査区

前回の報告で述べたように、第2調査区で検出した顕著な遺構・遺物は、弥生時代後期の土器集積である。この地表下1.45m~2.25m(現地表:T.P.+8.55m·T.P.+7.1m~6.25m:層厚約0.85m)の暗灰色粘土層・暗青灰色粘土層で確認した土器集積([SW-96580]と呼称)について、出土した土器を中心に検討を行いたいと思う。

1. 出土状況と土器集積の性格について

弥生土器は、暗灰色粘土から暗青灰色粘土にかけて出土している。特に多く完形品の土器が出土したのは、下層の暗青灰色粘土(層厚約0.6m)に集中している。その出土層位の層厚から考えて遺構内の覆土であることは間違いないだろう。そして、平面的な出土位置は、調査区内のやや北壁よりから中央部にかけて、壺を中心としてほぼ完形品ばかりの土器が積み重なった状態で出土している。これら出土状況から、一括した土器群であることは間違いない。しかし、この土器集積の出土層序や出土状況からは、この土器集積が帰属する遺構の性格については明らかにすることはできなかった。

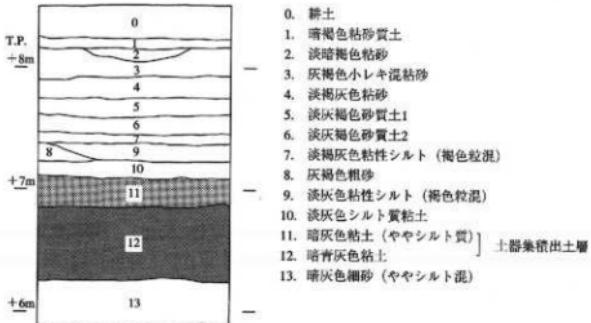
そして、この遺構確認調査以後、平成9年2月に(財)八尾市文化財調査研究会によりこの調査地の発掘調査が行われ、多数の遺構・遺物を検出している。(原田1997〔跡部遺跡第23次調査〕)。ただし、遺構確認調査で行った第1・2調査区ともこの発掘調査時には、調査区設定の範囲の外となっている。特に第2調査区については、南北方向に設定された調査区の間に挟まれた位置になっていた。

[SW-96580]に関連すると考えられる遺構が、この(財)八尾市文化財調査研究会の発掘調査において、検出されている。それが、第2調査区の西側で検出された弥生時代後期の溝である。溝の方向は、南西-北東に伸びるもので、しかもその溝中より[SW-96580]と同様の時期の土器群を確認しているという(原田氏のご教示による)。この溝の延長上には第2調査区があり、[SW-96580]も、おそらくこの溝内の土器集積の一つであると考えられる。ただし、詳しい調査内容は、現段階で正式な報告がなされていないため、溝等の遺構内の土器集積である可能性が高いと、指摘するにとどめておきたい。

2. 出土土器について(第99図~第101図)

[SW-96580]が、一括出土の土器群であることは、前項でも述べた。そして、その出土した土器のほとんどが、復元・図化が可能であった。しかし、残念ながら、諸般の都合により、その出土した土器群のすべてを、取り上げることはできなかった。そのため、今回報告する土器については、その一括性は指摘できるものの、この土器集積の全容すべてでないことをあらかじめ断わっておく。

図化できたのは、計31点ある。その器種構成は、壺22点(12~33)、有孔鉢



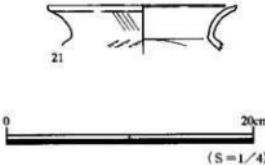
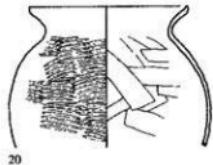
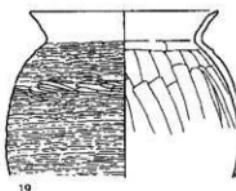
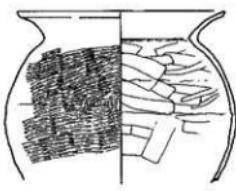
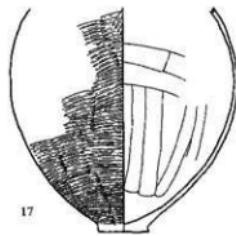
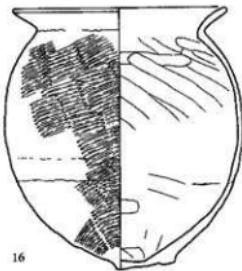
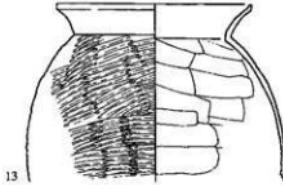
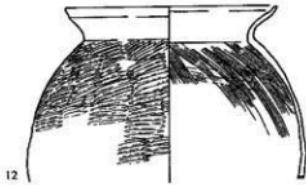
第98図 土層断面図（第2調査区）(1/40)

2点(34・35)、小型鉢1点(36)、壺3点(37~39)、高杯3点(40~42)である。圧倒的に壺の出土数が最も多いことは明らかで、壺を中心とした器種構成の土器集積であったことが分かる。

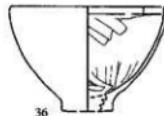
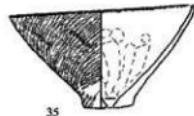
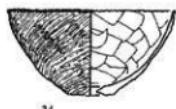
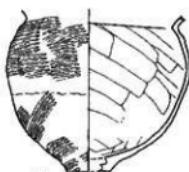
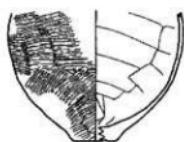
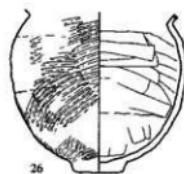
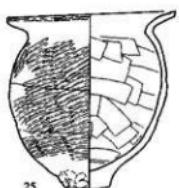
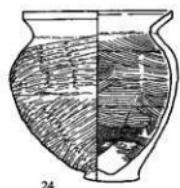
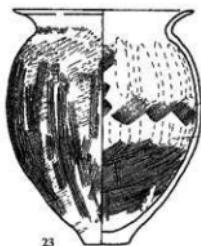
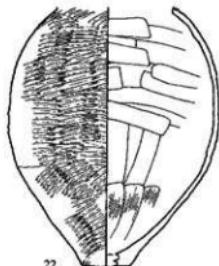
壺は、その口径、器高、形態及び胴部最大径から、大型の壺(12~15)、中型の壺(16~23)、小型の壺(24~30)の3つに分類できる。ただし、大型と中型の分類はあくまでの目安であり、明確な分類ではない。その他に壺底部の破片(31~33)がある。

大型壺(12~15) (12)・(13)は、それぞれ底部及び胴部下半部を欠くものの、口縁部・上半部は残存していた。その器高・形態全体は不明であるが、胴部は球形化しており、その胴部最大径は、中位にある。内面調整は、(12)がナデの後に縦方向のハケを施し、(13)がナデを施す。口縁部の形状は、(12)・(13)とも端部を短くつまみ上げるものである。そして、(14)・(15)は口縁部の破片であるが、その復元径から大型壺に含めた。

中型壺(16~23) 壺の分類中でもっとも多数を占める。内面調整は、(23)を除くとすべてナデもしくイタ状工具によるナデであった。(16)は、ほぼ完形である。中位に胴部最大径をもち、ほぼ球形化した形態である。底部は、ほとんど突出せずに輪台状の粘土紐をわずかにつけたものである。(17)は、胴部~底部が残存しており、球形化は著しいものの、中位よりやや上に胴部最大径をもつ。底部は突出した円板状のものである。(18)・(19)は、口縁部~胴部が残存しており、中位に胴部最大径をもち、球形化が著しい。(20)は、口縁部~胴部が残存している。中位に胴部最大径をもつものの、やや胴長である。また、外面のタタキの単位は不明瞭で、ほとんどが水平方向に施されている。その後一部にヘラミガキを施す。さらに、口縁部の形状が他と異なり、端部がまっすぐに外反する。(21)は、(18)と似た口縁の形状から中型壺に含めた。(22)は胴部~底部の破片である。その形態は、長胴形を呈し、逆円錐台形部分が大きく、3分割成形技法で製作されたと考えられる。V様式の形態を残すものの、ほぼ中位に胴部最大径をもち、

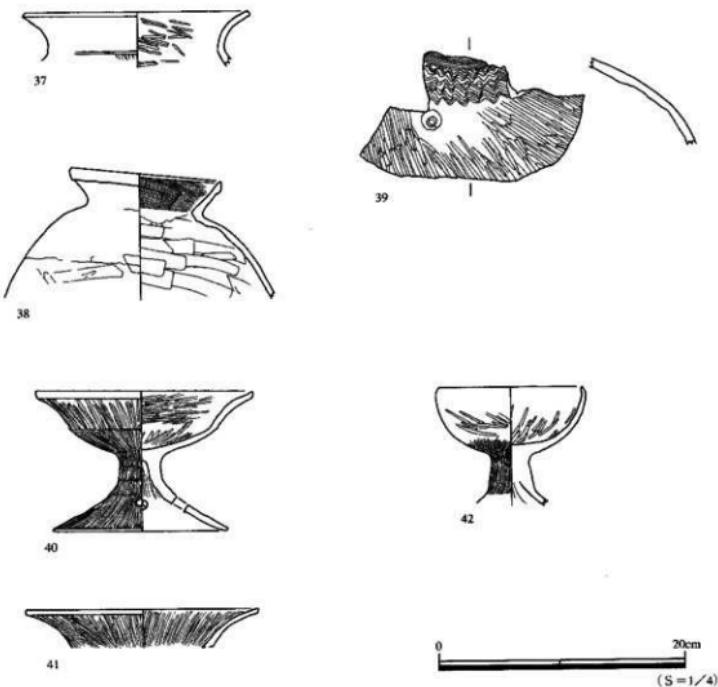


第99図 出土遺物実測図（第2調査区 土器集積 その1）



0 20cm
(S = 1/4)

第100図 出土遺物実測図（第2調査区 土器集積 その2）



第101図 出土遺物実測図（第2調査区土器集積 その3）

突出しない底部をもつ。

(23) は、ほぼ完形である。外側調整にはタタキの後に縦方向のハケをほぼ全面に施し、また内面もハケ調整である。肩部のやや張った形態で、中位上部に胴部最大径をもち、底部はやや突出する。これらは、主流となるその他の中型甕とは異なる特徴を持つ。

これら中型甕は、口縁部の形状から、丸く納めるもの(16)、つまみ上げるもの(18・19・21)、端部がやや外反して尖るもの(20・23)に分けられる。これは、最も球体化の著しい(16)の口縁端部が丸く納めてあることから、体部の球体化に伴って、口縁部の形状も簡略化の方向で変化していることを示している。

小型甕(24~30) 完形もしくは形態の復元できるもの(24~28)と復元口径から小型甕に分類した(29・30)がある。(24~28)は、その体部形態から、やや張った肩部に胴部最大径をもち、内面にハケを施す(24)、中位やや上部に胴部最大径をもち、やや胴長の(25)、中位に胴部最大径をもち、球形化した(26~28)に分けられる。底部には、ややつぶれた円板状の底部の(24)、やや突出し、タタキが底部まで及ばない(25)、突出する底部をもつ(26)、突出せずタタキが底部

まで及ぶ（27）・（28）がある。そして、口縁部の形状には、つまみあげるもの（24）と外反したまま丸く納める（25）がある。また、（29）・（30）は、口縁部までタタキが及ぶ「口縁叩き出し手法」で製作されたものである。

有孔鉢（35・36） （35）・（36）ともほぼ完形である。やや楕形の形状で突出しない底部をもつ（34）と直線状に開き、やや突出する底部をもつ（35）に分られる。両者とも、逆円錐台形底部と同一の形態をもち、タタキを行う工具により刻み目状に口縁端部を処理する。

小型鉢（36） （36）は、平底で、口縁部を丸くおさめたやや深めの楕形の鉢である。内外面ともナデ調整を行う。

壺（37～39） 広口壺の口縁部（37）・口縁～肩部（38）、肩部の破片（39）がある。（37）は、内外面ともヘラミガキを施す。（38）は、やや短めの口縁部に端部外面に肥厚する。口縁内面はハケを施す。体部は内外面ともナデ調整である。（39）は、体部外面全面にヘラミガキを施し、その上部に波状文、貼り付け円形浮文がある。

高杯（40～42） 外反する杯部をもつ（40）・（41）と、楕形の杯部をもつ（42）がある。（40）は、内側気味の杯部下半から大きく外反する口縁をもつ。内外面ともヘラミガキを施す。内面のヘラミガキはやや粗雑である。脚部は、杯部に比して低く、裾部の開きが、かなり進んでいることを示している。（41）は、口縁部の外反する形態から、（40）と同型の高杯と考えられる。（42）は、杯部～脚柱部が残存していた。深めの楕形の杯部で、杯部は内外面ともヘラミガキを施し、杯部から脚部にかけては、ハケを施す。

3. 出土土器から見た【SW-96580】の特徴とその問題点

壺類が主体となるこの【SW-96580】において、壺の特徴には、（1）大型壺・中型壺・小型壺とも胴部最大径が、中位のやや上のものから中位のものが大半を占め、球形化が著しい。（2）底部は、突出する平底のものも存在するが、突出しないものが主体となる。（3）内面調整は、ハケを施すものはほとんどなく、ナデ調整を施すものばかりであった。ヘラケズリを行なうものは存在しなかった。（4）球形化の進む壺の一方で、肩部が張る胴長のV様式の形態を残す壺も含まれている。（5）球形化した小型壺が多数含まれている。（6）土器集積の性格を考える上では、出土した壺の形態からも特徴が共通しており、時期差もほとんどないと考えられる。ただし、溝内の土器集積と考えた場合、これら土器が一括して廃棄されたものと考えられ、その溝の廃絶の時期についての関係を検討する必要があろう。

これら特徴から、弥生時代後期末（寺沢氏のいう第VI様式：寺沢1989）に包括されるものであると考えられる。そして、器種構成の上では、壺以外に高杯・広口壺・有孔鉢・鉢が出土しているが、高杯は、原田氏（原田1993）の分類した高杯A1のみが共存しており、庄内式期古相に先行する弥生時代後期末最終段階の時期の土器集積であると考えられる。

4.まとめ 一跡部遺跡での位置づけ

今回の調査地は、平野部の集落ではきわめてまれな「流水紋銅鐸」の出土した地点から南西約40mに位置しており（安井他1991）、また周辺でも数次にわたる（財）

八尾市文化財調査研究会の発掘調査で同時期の遺構・遺物が検出されている（岡田 1997他）。これら調査成果から弥生時代後期～古墳時代前期の跡部遺跡において、大規模な集落が形成されていたことが予想されている。

そして、今回の調査地周辺は、濃密な遺構・遺物が検出されているもののむしろ該期の集落域の中では、北端部に位置していると考えられる。これを検証するには、銅鐸の埋納坑が、集落内ではどのような位置付けがなされていたかを検討する必要があり、今後の重要な課題となろう。これら集落域で、弥生時代後期末の土器集積が検出できたことは、今後の跡部遺跡北部の集落域の性格を考える上で意義深い資料となろう。

また、今回報告した〔SW-96580〕が溝内の遺物であり、その土器集積の廃棄行為が、集落の廃絶（=溝の廃絶）と時期を同じくして行われたものならば、弥生時代後期末の集落の廃絶と次代の庄内式期以降の集落の形成を考える上でも興味深い。これら、該期の集落の推移・変遷については、この調査地及び周辺における発掘調査によって明らかにされていくだろう。今後、遺構等の関連も含めての報告が期待されるところである。

（第2調査区 藤井）

[参考文献]

- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究20-4』
- 芋本隆裕 1980 「北鳥池遺跡出土遺物の再整理」『東大阪遺跡保護調査会年報1979年』東大阪遺跡保護調査会
- 寺沢薰・森岡秀人 1989 「弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ」 木耳社
- 安井良三他 1991 「跡部遺跡発掘調査報告書 ～大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸～」（財）八尾市文化財調査研究会報告31』（財）八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則 1993 「I. 東弓削遺跡（第4次調査）」・「II. 久宝寺遺跡（第1次調査）」
『（財）八尾市文化財調査研究会報告37』（財）八尾市文化財調査研究会
- 1997 「2. 跡部遺跡第23次調査（AT96-23）」『平成8年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- 岡田清一 1997 「III. 跡部遺跡第15次調査（AT93-15）」『（財）八尾市文化財調査研究会58』
（財）八尾市文化財調査研究会

跡部遺跡（96-580）出土遺物観察表（その1）

番号	出土地点	器種	法量(cm)	調査・形態等の特徴	色調	焼成	備考
1	第1区 6層	土師器 壺	復元口径 15.4 器高 2.1	内面 ナデ 外面 指押さえ、ナデ	内) 浅黄橙色 外) 橙色	良好	
2	第1区 12~13層 口縁部	土師器 壺	残存高 3.9	内面 縦位のヘラミガキ 外面 円形浮文、刻み目、ヘラミガキ	内) 黒褐色 外) 灰黄色	良好	
3	第1区 12~13層 底部	土師器 壺	底径 3.6 残存高 2.4	内面 ハケ 外面 タタキ後ヘラナデ	内) 黄灰色 外) 灰白色	良好	
4	第1区 12~13層 ミニチュア	土師器 高杯	復元底径 4.6 残存高 3.2	内面 指押さえ、ナデ 外面 指押さえ、ナデ	内) 橙色 外) 浅黄色	良好	
5	第1区 12~13層 口縁~肩部	弥生土器 壺	復元口径 16.8 残存高 5.7	内面 ハケ、ナデ 外面 タタキ、一部ハケ	内) 橙色 外) 橙色	良好	
6	第1区 12~13層 口縁部	土師器 壺	復元口径 15.4 残存高 3.1	内面 ヘラケズリ、ナデ 外面 ハケ、ナデ	内) 鈍い黄橙色 外) 鈍い黄褐色	良好	
7	第1区 12~13層 底部	土師器 壺	復元底径 4.9 残存高 3.1	内面 ハケ 外面 ハケ	内) 灰黄褐色 外) 灰黄褐色	良好	
8	第1区 12~13層 縁部~体部	土師器 壺		内面 ヘラミガキ、指押さえ、ハケ 外面 ハケ、ヘラミガキ	内) 灰白色 外) 鈍い橙色	良好	
9	第1区 14層 底部	土師器 壺	復元底径 6.4 残存高 2.7	内面 ハケ 外面 ヘラミガキ	内) 鈍い黄橙色 外) 褐灰色	良好	
10	第1区 14層 底部	土師器 壺	復元底径 5.6 残存高 4.3	内面 ハケ 外面 ヘラミガキ、タタキ	内) 褐色 外) 暗茶褐色	良好	
11	第1区 14層 底部	弥生土器 壺	復元底径 4.4 残存高 1.8	内面 ハケ 外面 タタキ	内) 黄灰色 外) 灰白色	やや 難	
12	第2区 上器集積 口縁~胴部	弥生土器 壺	口径 17.1 残存高 14.3	内面 ヨコナデのち縦方向のハケ 外面 タタキ	内) 淡明褐色 外) 淡明褐色	良好 胴部最大径 22.8cm	
13	第2区 上器集積 口縁~胴部	弥生土器 壺	口径 16.0 残存高 14.4	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡明褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 21.2cm	
14	第2区 下器集積 口縁部	弥生土器 壺	復元口径 18.0 残存高 3.5	内面 ハケ 外面 タタキ	内) 淡褐色黒変 外) 淡褐色	良好	
15	第2区 下器集積 口縁部	弥生土器 壺	復元口径 20.9 残存高 4.0	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好	
16	第2区 土器集積 器高	弥生土器 壺	口径 17.2 器高 21.4	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 19.4cm中位	
17	第2区 土器集積 肩部~底部	弥生土器 壺	底径 4.2 残存高 18.3	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 18.5cm中位	
18	第2区 土器集積 口縁~胴部	弥生土器 壺	復元口径 16.8 残存高 14.0	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色黒変 外) 黑灰色	良好	
19	第2区 土器集積 口縁~胴部	弥生土器 壺	口径 12.8 残存高 11.5	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 17.5cm	
20	第2区 土器集積 口縁~胴部	弥生土器 壺	復元口径 15.2 残存高 13.6	内面 縦方向のナデ 外面 横方向のタタキ・一部ヘラナデ	内) 淡橙褐色 外) 黑灰色	良好 胴部最大径 19.3cm	
21	第2区 土器集積 口縁部	弥生土器 壺	復元口径 15.2 残存高 3.7	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
22	第2区 土器集積 体部~底部	弥生土器 壺	底径 4.2 残存高 21.1	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 暗褐色 外) 暗褐色	良好 胴部最大径 17.2cm	

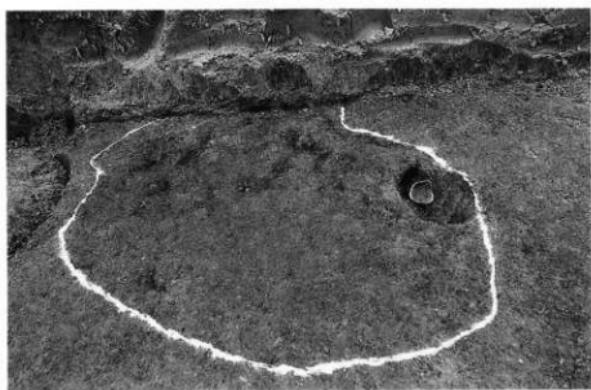
跡部遺跡 (96-580) 出土遺物観察表 (その2)

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整・形態等の特徴	色調	焼成	備考
23	第2区 土器集積	弥生土器 壺	口径 14.8 器高 19.2	内面 ハケのち一部ユビナデ 外面 タタキのち縱方向のハケ	内) 暗褐色 外) 暗褐色	良好 胴部最大径 16cm 中位上	
24	第2区 土器集積	弥生土器 壺	口径 12.1 器高 14.0	内面 ハケ 外面 タタキ	内) 淡灰褐色 外) 暗褐色	良好 胴部最大径 13.6 中位上	
25	第2区 土器集積	弥生土器 壺	口径 13.8 器高 14.4	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 13cm 中位上	
26	第2区 土器集積	弥生土器 壺	底径 4.0 残存高 13.2	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡灰褐色 外) 淡褐色	良好 胴部最大径 14.2cm 中位	
27	第2区 土器集積	弥生土器 壺	復元底径 3.6 残存高 10.6	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好 胴部最大径 14.2cm 中位	
28	第2区 土器集積	弥生土器 壺	復元底径 3.6 残存高 13.2	内面 ナデ 外面 タタキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好 胴部最大径 15cm 中位?	
29	第2区 土器集積	弥生土器 壺	復元口径 12.6 口縁部 残存高 3.5	内面 板ナデ 外面 タタキ	内) 橙褐色 外) 橙褐色	良好	
30	第2区 土器集積	弥生土器 壺	復元口径 14.0 口縁部 残存高 4.7	内面 ユビナデ 外面 タタキ (口縁まで)	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
31	第2区 土器集積	弥生土器 壺	底径 4.7 底部 残存高 3.4	内面 ハケ 外面 タタキ	内) 淡黒灰色 外) 淡褐色	良好	
32	第2区 土器集積	弥生土器 壺	底径 5.2 底部 残存高 2.0	内面 板ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
33	第2区 土器集積	弥生土器 壺	底径 2.9 底部 残存高 3.3	内面 板ナデ 外面 タタキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色黒変	良好	
34	第2区 土器集積	弥生土器 有孔鉢	口径 13.6 器高 7.0	内面 板ナデ 外面 タタキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好	
35	第2区 土器集積	弥生土器 有孔鉢	口径 15.0 器高 8.5	内面 ナデ・ユビオサエ 外面 タタキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好	
36	第2区 土器集積	弥生土器 小型鉢	口径 12.5 器高 8.7	内面 ナデ・一部板ナデ 外面 ナデ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好	
37	第2区 土器集積	弥生土器 壺	口径 18.2 口縁部 残存高 4.6	内面 ヘラミガキ 外面 ヘラミガキ (一部)	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
38	第2区 土器集積	弥生土器 壺	口径 12.3 口縁部 残存高 10.9	内面 口縁内面: ハケ・体部: ナデ 外面 ナデ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
39	第2区 土器集積	弥生土器 壺	体部破片	内面 ナデ 外面 ヘラミガキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
40	第2区 土器集積	弥生土器 高杯	口径 17.5 器高 11.5	内面 ヘラミガキ・脚部シボリメ 外面 ヘラミガキ	内) 淡橙褐色 外) 淡橙褐色	良好	
41	第2区 土器集積	弥生土器 高杯	口径 18.9 残存高 3.1	内面 ヘラミガキ 外面 ヘラミガキ	内) 淡褐色 外) 淡褐色	良好	
42	第2区	弥生土器 高杯	口径 11.6 残存高 9.4	内面 ヘラミガキ (一部) 外面 ヘラミガキ・ハケ	内) 淡褐灰色 外) 淡褐灰色	良好	

図 版

図版 1 太田遺跡（96—266）・恩智遺跡（96—471）

太田遺跡（96-266）
第2面SK03焼土坑
検出状況



恩智遺跡（96-471）
調査風景
(第2調査区)



恩智遺跡（96-471）
掘削状況
(第2調査区)



調査風景



第1調査面
検出状況
(弥生時代遺構面)



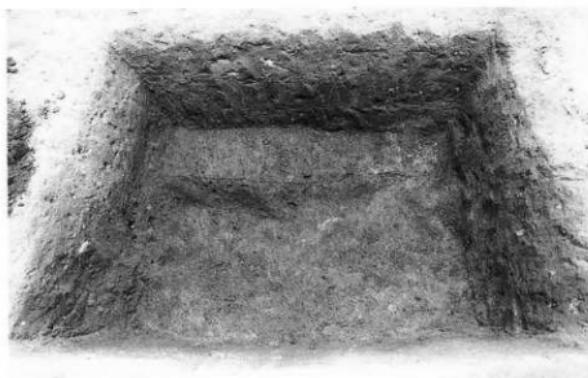
第2調査面
検出状況
(中世遺構面)



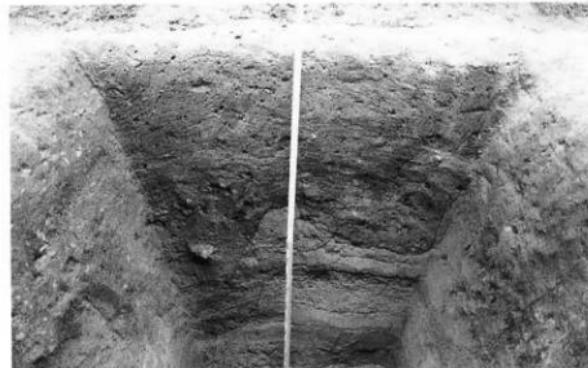
第1遺構面
溝状遺構
(東より)



第2遺構面
落ち込み状遺構
(東より)



東壁土層断面





葦振遺跡（97-299）
広口壺出土状況



成法寺遺跡（97-156）
調査風景
(機械掘削)



成法寺遺跡（97-156）
掘削状況
(第3調査区)

図版 5 神宮寺遺跡（97—49）・東郷遺跡（96—768）・中田遺跡（96—718）

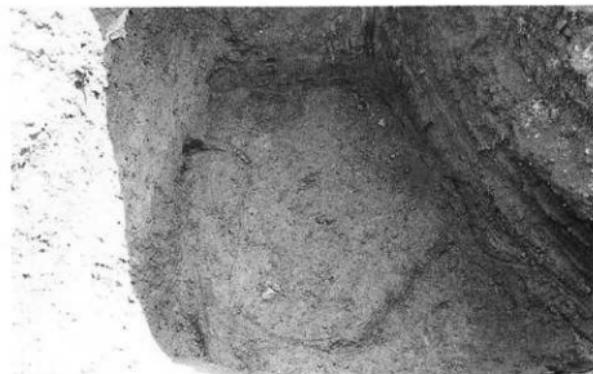
神宮寺遺跡（97-49）
遺構検出状況（SD01）
(南から)



東郷遺跡（96-768）
南壁断面
(北より)

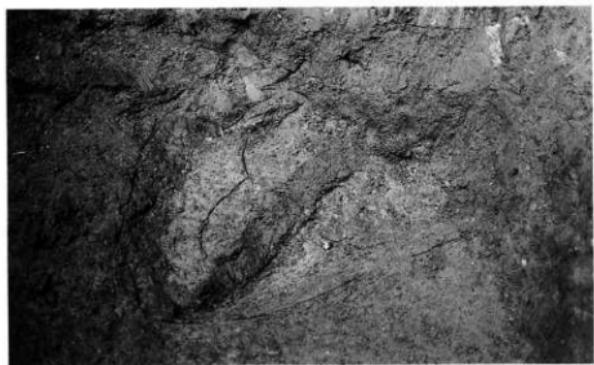


中田遺跡（96-718）
第2区・第1遺構面
(北より)



図版 6 中田遺跡（96—718）・八尾寺内町遺跡（97—718）・八尾寺内町遺跡（97—99）

中田遺跡（96-718）
第2区・第2遺構面
ピット検出状況
(南より)



八尾寺内町遺跡
(97-99)
東側調査区断面



八尾寺内町遺跡
(97-99)
西側調査区断面



ピット1 検出状況
(西より)



調査区全景
(南より)



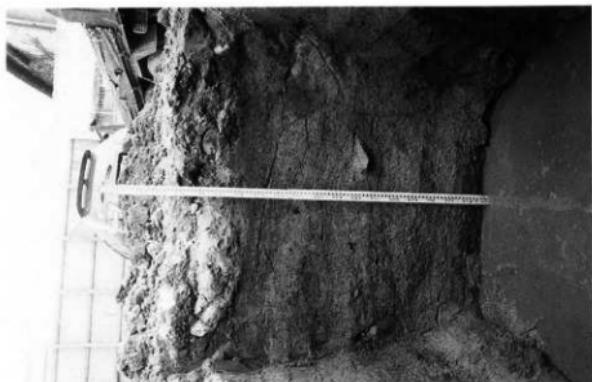
ピット2 検出状況
(北東より)



ピット4及び5
検出状況（東より）



南壁土層断面



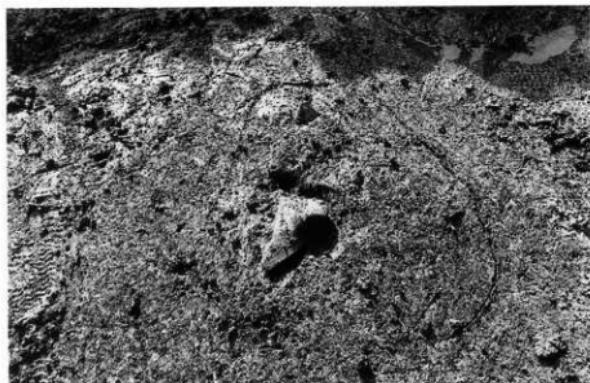
北壁及び西壁
土層断面



遺構検出状況
北より
(第1調査区)



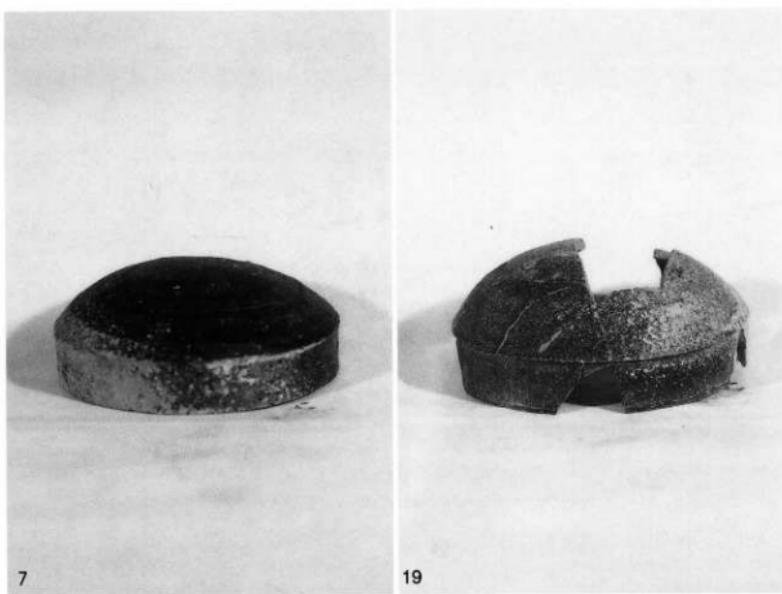
ピット内遺物
出土状況



掘削状況
(第2調査区)



図版 10 太田遺跡（96—266）・恩智遺跡（96—471）出土遺物

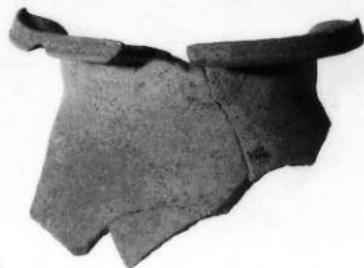


太田遺跡（96-266）出土遺物

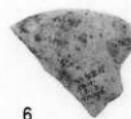


恩智遺跡（96-471）出土遺物（石器類）

圖版 11 恩智遺跡（96—518）出土遺物

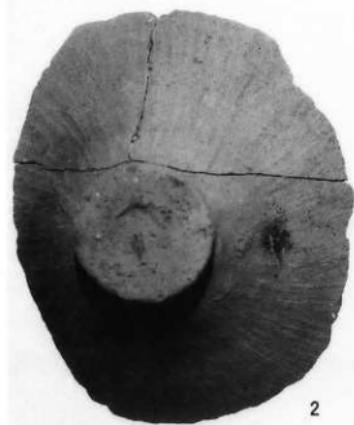


SD01出土土器

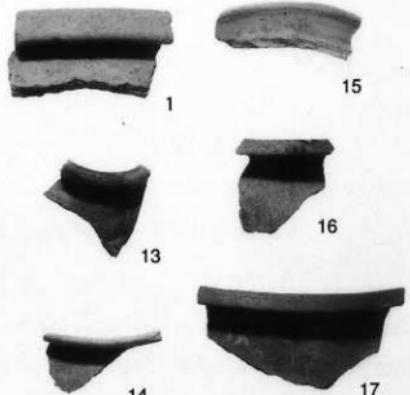


SD02出土土器

図版 12 恩智遺跡（97—310）出土遺物



2



1

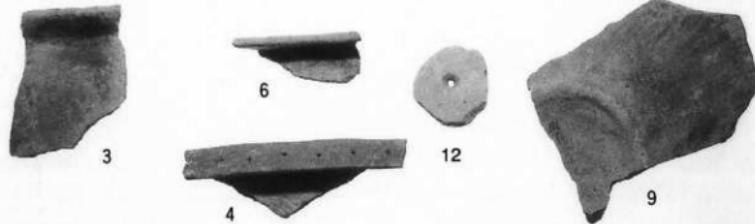
15

16

13

14

17



3

6

12

9

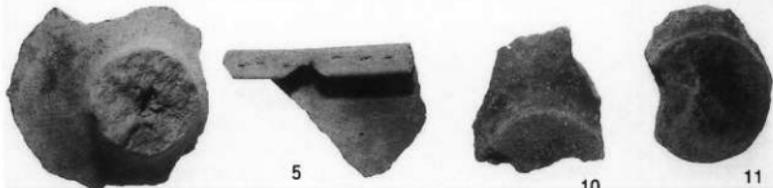
4

5

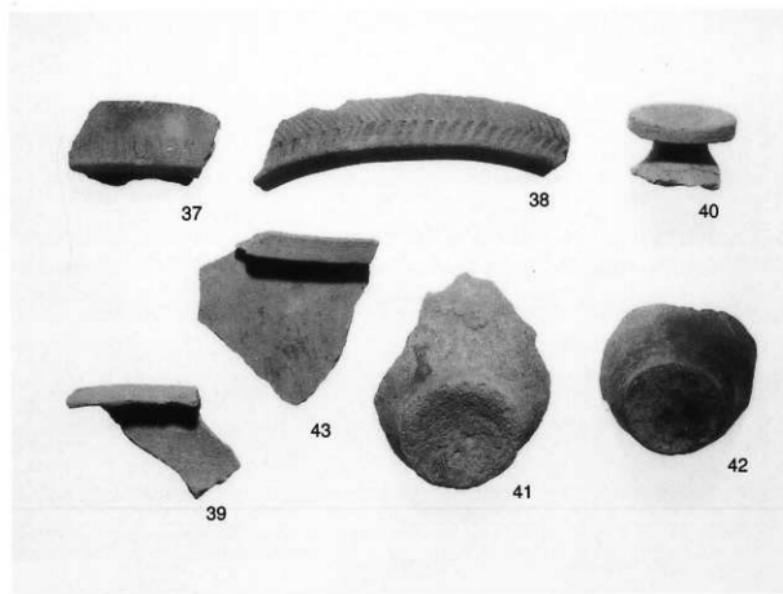
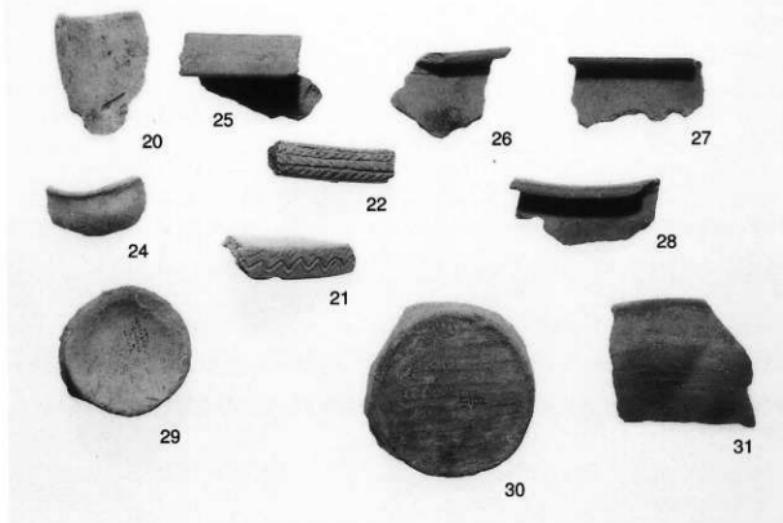
10

11

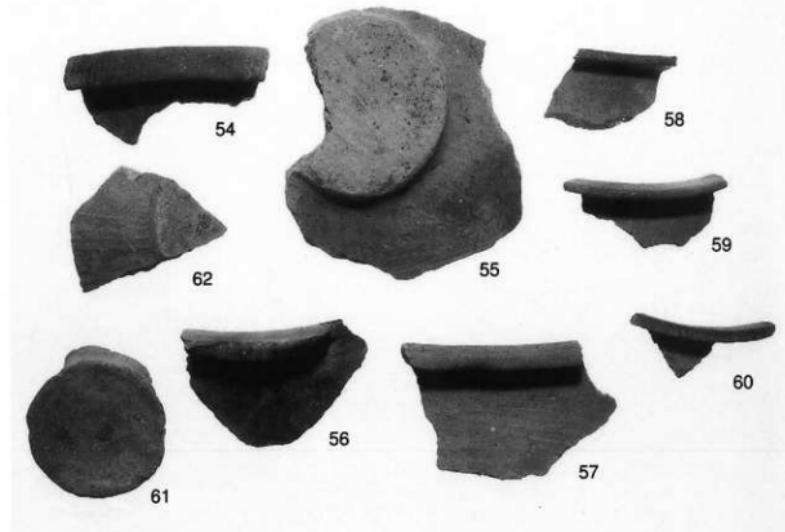
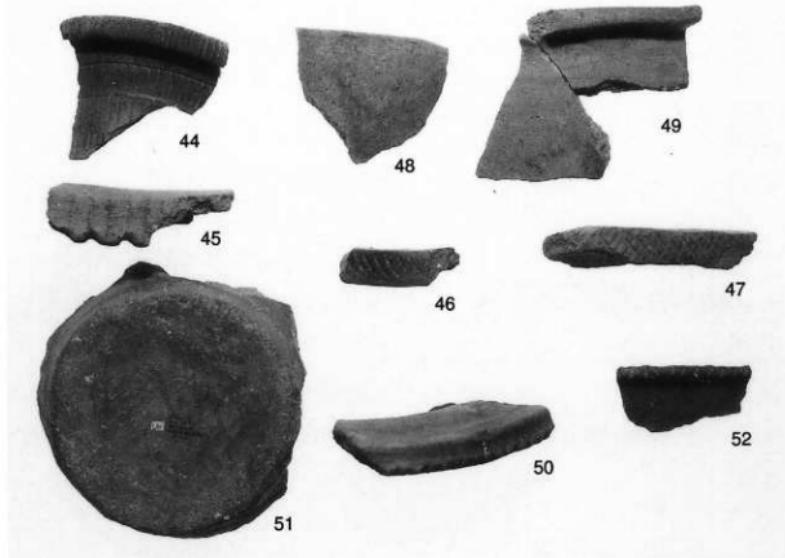
8



圖版 13 恩智遺跡（97—310）出土遺物

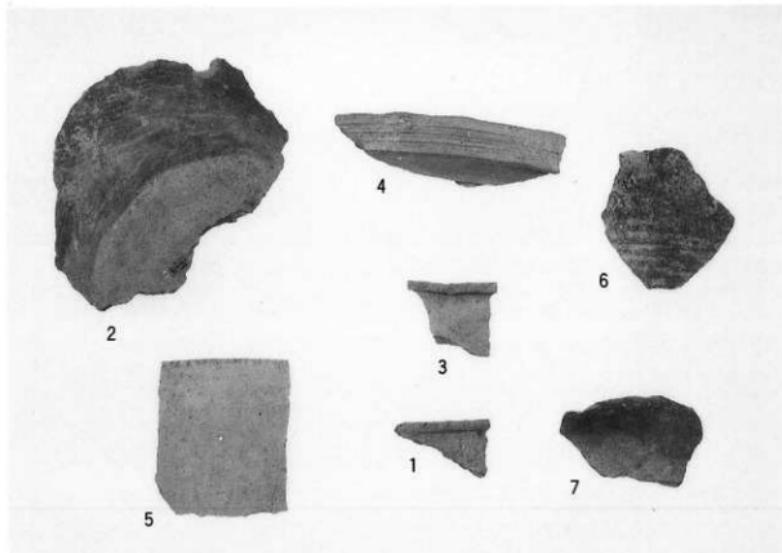


圖版 14 恩智遺跡（97—310）出土遺物



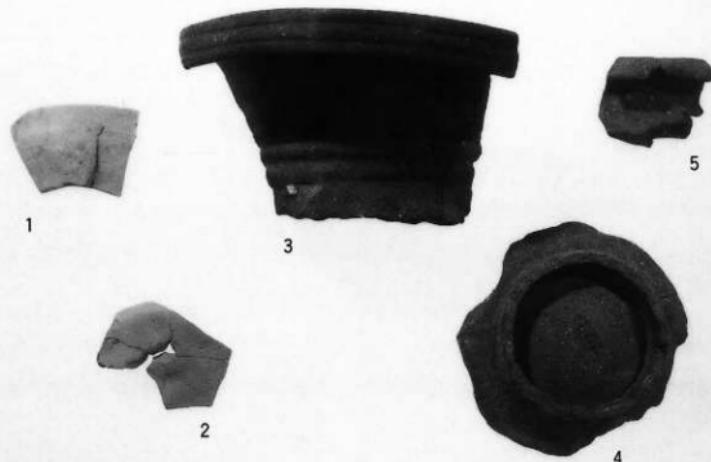


(97-310) 出土石器

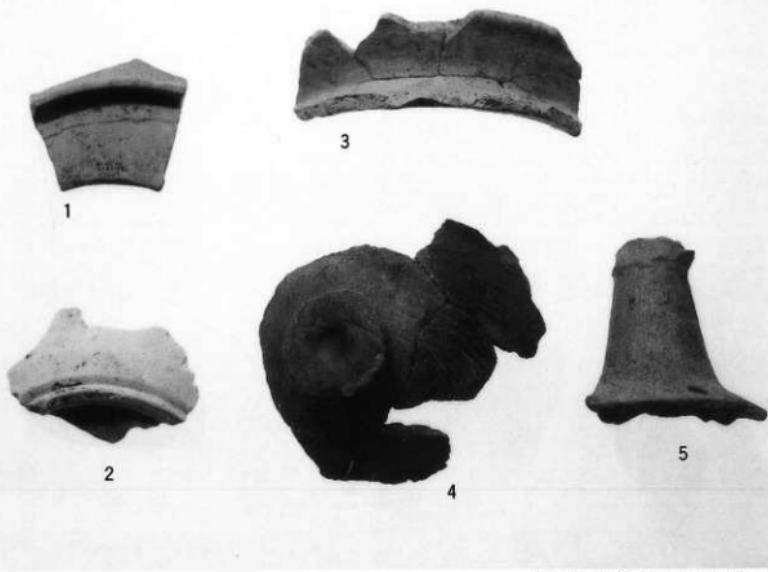


(96-747) 出土遺物

図版 16 萱振遺跡（97—299）・郡川遺跡（96—691）出土遺物



萱振遺跡（97-299）出土遺物



郡川遺跡（96-691）出土遺物

図版 17 久宝寺遺跡（97—298）出土瓦



2
凸面 凹面



7
凸面 凹面

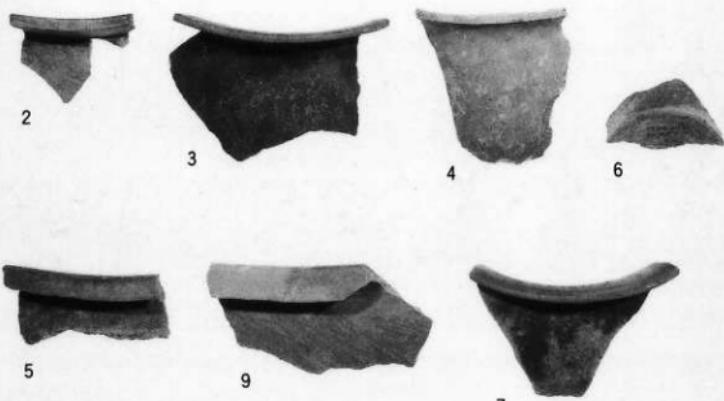


8
凸面 凹面



9
凸面 凹面





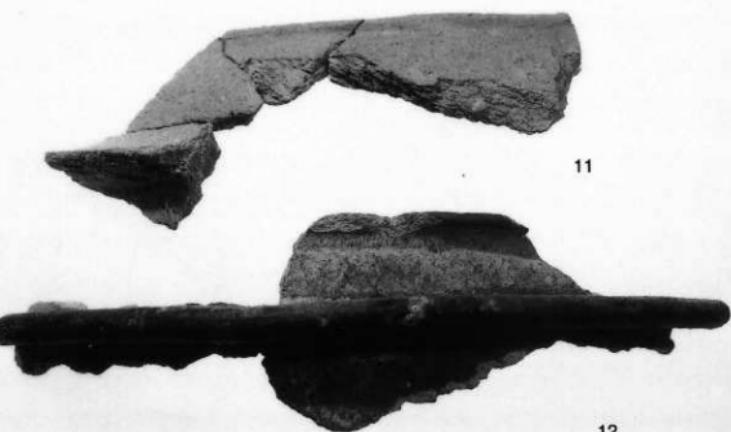
成法寺遺跡（97-156）出土遺物



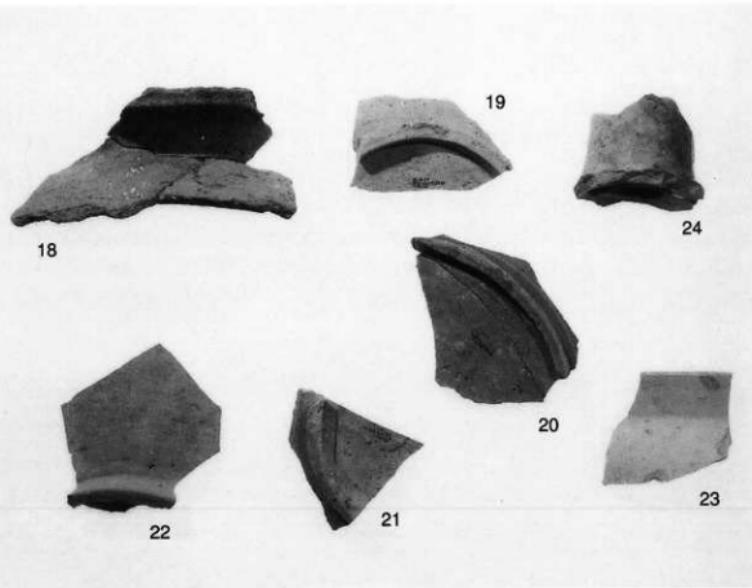
97-185-65

中田遺跡（96-718）・八尾寺内町遺跡（97-185）出土遺物

図版 19 東弓削遺跡（96—565）出土遺物



No. 6 出土羽釜

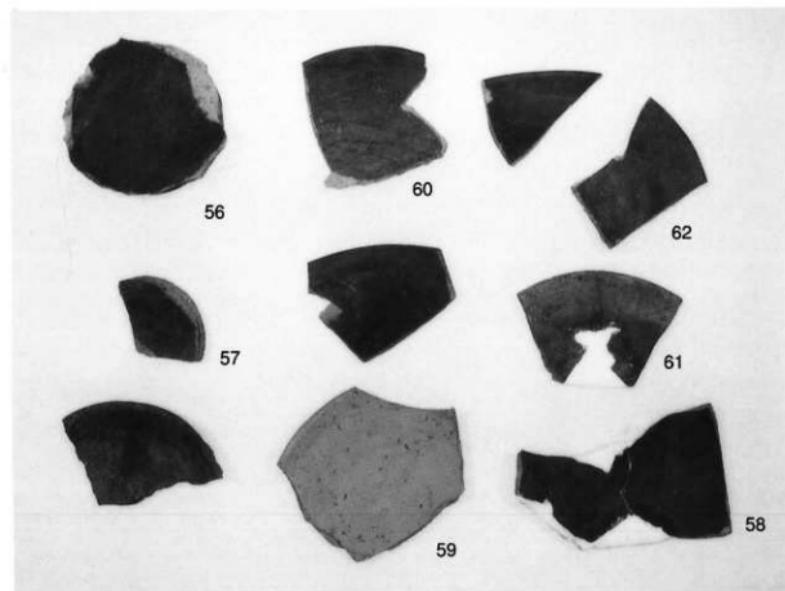


No.14' トレンチ⑧ 層出土遺物（18~23） No. 9' 出土遺物（24）

図版 20 八尾寺内町遺跡（97—185）出土遺物



土坑 1 出土 土師器皿



土坑 1 出土 瓦器

図版 21 八尾寺内町遺跡（97—185）出土遺物



ピット 2 出土 土師器小皿



ピット 4 出土 土師器小皿・羽釜・白磁

図版 22 跡部遺跡（96—580）出土遺物

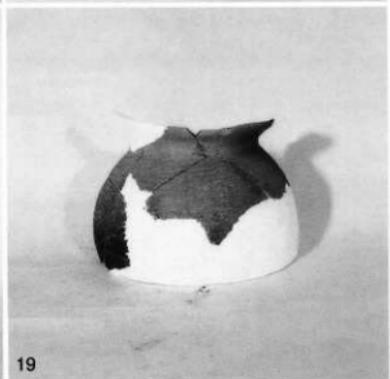


第1調査区



第2調査区〔SW-96580〕集合

図版 23
跡部遺跡（96—580）第2調査区
土器集積出土遺物



[SW-96580] その1

図版 24 跡部遺跡（96—580）第2調査区 土器集積出土遺物



24



25



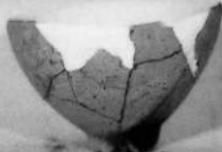
26



34



35



36



40



42

[SW-96580] その2

報告書抄録

あたりがな	やおしないいせきへいせいりねんどはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ						
副書名	平成9年度国庫補助事業						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	38						
編著者名	米田敏幸・酒井・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎ 0729-91-3881						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
所取遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因
	市町村	遺跡番号	°	'			
太田遺跡	八尾市 太田	27212	34° 35° 20"	135° 35° 33"	19970217~21 0224	29.75	長屋住宅建設に伴う遺構確認調査
惣曾遺跡	八尾市 惣曾中町	27212	34° 36° 13° 34° 36° 20° 34° 36° 15° 34° 36° 13° 34° 36° 14°	135° 37° 57° 135° 37° 56° 135° 37° 59° 135° 37° 55° 135° 37° 56°	19970227 0317 19970303 19970324~28 19970416 19970612 19970819,20 0905	2.42 2 16 2 3.3 6	専用住宅建設に伴う遺構確認調査 専用住宅建設に伴う遺構確認調査 浄化槽設置に伴う遺構確認調査 専用住宅建設に伴う遺構確認調査 専用住宅建設に伴う遺構確認調査 専用住宅建設に伴う遺構確認調査
豊振遺跡	八尾市 豊ヶ丘	27212	34° 37° 56°	135° 36° 43°	19960730,31	4	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
久宝寺遺跡	八尾市 神武町 北龜井町	27212	34° 37° 15° 34° 36° 58°	135° 35° 15° 135° 34° 54°	19970313 19970729	18 18	工場建設に伴う遺構確認調査 工場建設に伴う遺構確認調査
鶴川遺跡	八尾市 鶴川	27212	34° 37° 14°	135° 38° 37°	19970227 0807	8	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
小坂合遺跡	八尾市 小坂合町	27212	34° 37° 08°	135° 36° 43°	19970609	12	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
成法寺遺跡	八尾市 成法寺町	27212	34° 37° 16°	135° 36° 53°	19970619,23	44	社員寮建設に伴う遺構確認調査
神宮寺遺跡	八尾市 神宮寺	27212	34° 35° 52°	135° 37° 56°	19970424 0603	8.16	店舗建設に伴う遺構確認調査
太子堂遺跡	八尾市 太子堂	27212	34° 36° 42°	135° 35° 17°	19971015	12.5	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
東郷遺跡	八尾市 東郷	27212	34° 37° 38°	135° 36° 45°	19970325	15	共同住宅建設に伴う遺構確認調査

所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北 棒 東 伸	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
中田遺跡	八尾市 中田	27212		34° 36° 51°	135° 36° 50°	19970305	8	宅地開発に伴う遺構確認調査
東弓削遺跡	八尾市 八尾木	27212		34° 36° 22°	135° 37° 04°	19970230,28 031,26 0410	32	宅地開発に伴う遺構確認調査
八尾寺内町	八尾市 本町	27212	本町	34° 37° 24° 34° 37° 35°	135° 36° 12° 135° 36° 07°	19970509 19971022 1209'15	18	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
矢野遺跡	八尾市 朝美町	27212	朝美町	34° 36° 56° 34° 37° 04°	135° 36° 11° 135° 36° 32°	19970710 19970924	4 24.5	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
新部遺跡	八尾市 春日町	27212	春日町	34° 36° 50°	135° 35° 35°	19961212	21.78	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 配 事 項			
大田遺跡	集落	古墳時代	焼土坑 溝状遺構 土坑 包含層	土師器 須恵器 製塙土器				
墨智遺跡	集落	弥生時代	包含層	弥生土器 土師器 須恵器 石器				
	集落	弥生時代	包含層	縄文土器 弥生土器 石器				
	集落	弥生時代	溝・ビット	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器				
	集落	弥生時代	包含層	弥生土器 土師器 須恵器				
	集落	弥生時代	包含層	弥生土器 土師器 須恵器				
	集落	弥生時代	落ち込み状遺構 土坑状遺構	縄文土器 弥生土器 石器				
笠振遺跡	集落	弥生時代・中世	素掘り井戸 包含層	弥生土器 土師器 瓦器				
久宝寺遺跡	集落	弥生時代～古墳時代・近世	流路 溝	土師器 須恵器				
	集落	中世	疊群状遺構 溝	土師器 瓦器 瓦				
葛川遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	土坑 包含層	弥生土器 土師器 須恵器				
小阪合遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	包含層	山内式土器 土師器 弥生土器 須恵器				
成法寺遺跡	集落	弥生時代	包含層	弥生土器 土師器				
神宮寺遺跡	集落	古墳時代・奈良時代	溝	土師器 須恵器				
太丁堂遺跡	集落	古墳時代	包含層	希留式土器 土師器 瓦器				
東郷遺跡	集落	奈良～平安時代	ビット 溝 包含層	土師器				
中田遺跡	集落	古墳時代・中世	土坑状遺構 包含層	土師器 希留式土器 須恵器 黒色土器				
東弓削遺跡	集落	古墳時代・奈良～平安時代・鎌倉時代	溝状遺構 土坑状遺構 骨片埋葬状況 包含層	庄内式土器 上師器 須恵器 瓦				
八尾寺内町	集落	古墳時代	包含層	希留式土器 土師器 瓦器				
	集落	中世	土坑 ビット	土師器 瓦器 瓦 陶器 白磁 宋鏡				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 墓	主 な 遺 物	特 記 事 項
矢作遺跡	集落 集落	鎌倉時代 古墳時代	包含層 土坑	土師器 瓦器 瓦 陶器 種(モモ) 土師器 須恵器	
猪部遺跡	集落	弥生時代・ 古墳時代	包含層	弥生土器 土師器 須恵器 製造土器	

八尾市文化財調査報告38
平成9年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告Ⅰ

発行日 1998年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 (株)近畿印刷センター

(八尾市刊行物番号H 9-70)

